

発達支援教育コース（幼年教育領域） 課題研究プロジェクト

本領域では、幼児期から児童期初期までの子どもの発達と それを支える教育に関する研究を幼稚園・保育所等の就学前施設、小学校及び家庭の教育等との関連で総合的に進めています。幼年教育をめぐるさまざまな研究手法を通して、実践現場の先生方と連携し、独自の視点から幼児教育実践をいきいきと読み解くプロジェクトを提案します。

本領域に所属する教員の専門分野と可能なプロジェクト

本領域には、3名の教員が所属しており、それぞれの専門分野に基づいた研究及び大学院生への研究指導を行っています。課題研究プロジェクトにおいては、現場の課題と、教員の専門分野に応じ、以下のプロジェクトを展開することが可能です。また、3名の教員が合同で共同プロジェクトを展開することもできます。（以下はあくまで一例です）

杉浦英樹研究室 （幼年教育学） チーム

①幼児教育の基本をめぐる 学び合い

幼児期における教育の基本は遊びを通した総合的な指導です。子どもたちが遊びながら学ぶ姿を支えるためにはどのような援助の在り方や環境づくりが望ましいのか、先生方と院生がともに検討し、実践します。

②幼保小連携のための相互 理解（現職あるいは保育経験者）

幼保小の連携や接続を進めるためには、それぞれの領域で培われてきた文化を知り合うことが大切です。就学前後の指導の在り方や環境がどのように異なり、互いの生活の中で接点を持つためには何が必要か、現場から学びながら今後の実践につなげます。

白神敬介研究室 （幼年心理学・発達心理学） チーム

①子ども理解からの発達支 援の工夫

子どもの発達や個々の特徴を踏まえ、子どもたちが自己肯定感を感じられるような活動を検討し、実践化します。

②教育・保育活動のふり返 りのための情報収集・整理

子どもたちの観察や保育者・教師の言動の記録を通じ、活動の振り返りのための情報収集・整理を行います。保護者向けアンケートといった調査を実施するにあたっての準備も検討可能です。



山口美和研究室 （保育内容論） チーム

①身近な自然を活用した保 育実践のあり方の検討

幼児期に自然と触れ合い、自然の多様性・循環性を感じる体験は大切です。各園の身近な自然環境を活用し、日常的に自然を取り入れた保育実践について、先生方とともに検討します。

②相互作用分析を用いた保 育者-子ども関係のリフレ クション

日々の保育の中で、「子どもにどんな声がけをすればよかったのだろう」「子どもは何を求めていたのだろう」と悩むことはありませんか？プロセスレコード等の相互作用分析ツールを利用し、保育者と子どものあいだに起こっていることを振り返るお手伝いをします。

共同プロジェクトのキーワード

- 子どもたちの遊びを通した学び
- 子どもたちのかわり
- 教室の環境構成
- 自然・地域資源を活用した保育
- 保育室及び園庭の環境構成
- 子どもの主体性を大事にするための活動
- カリキュラム・マネジメント
- 動線の把握・調整
- 課題分析に基づく支援
- 保育者-子ども間のコミュニケーション
- 就学前教育の「独自性」と就学前後の「連続性」

連絡先：杉浦英樹（sugiura@juen.ac.jp）



発達支援教育コース 特別支援教育領域

これまでの特別支援教育コースでは

特別支援教育コースでは、これまでも障害種（視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱・言語障害・発達障害）ごとに「教育臨床実習」「応用教育臨床実習」という科目を設け、各種学校及び特別支援教育実践研究センターでの実習を継続してきました。

これらの臨床実習においては、教員のスーパーバイズのもと、大学院生が実際に対象児と関わり、適切な実態把握、指導計画の作成、教材の作成、実際の指導、評価等を行います。この一連の実習を通して、理論と実践を結びつけて考えられる実践的指導者を育成するとともに、対象児や保護者、先生方から寄せられた課題の解決をともにはかっています。

担当教員：池田吉史
対象児・者：発達障害特性のある児童を含む特別な教育的ニーズのある児童

上越教育大学附属小学校において、授業中や放課後に学習支援を行っています。特に、大学院生は、RPDCAサイクル（担任教諭や特別支援教育コーディネーターとの情報交換、アセスメント、個別の指導計画、特別支援教育支援員、カンファレンス・ケース会議を含む）に則った通常学級における一連の支援方法の学修に励んでいます。特別支援学級や通級による指導における指導力の養成も視野に入れています。

担当教員：小林優子
対象児・者：聞こえに困難をもつ幼児・児童。年齢については特に制限を設けていません。

聞こえに困難をもつ幼児・児童を対象とし、大学院生と大学教員で実態把握、指導プログラムの作成・指導を行い、教育現場で必要となる基礎的な指導力を育成します。

指導形態は、近隣の小学校の特別支援学級にて週1回・1時間分にて個別指導を行っています。指導場面では大学院生にMT・STの役割を担当してもらい、スーパーバイザーとして大学教員が帯同します。

- ＜実際のテーマ＞
- ・語彙拡充・作文指導
 - ・音韻意識・聴覚的ワーキングメモリに関する指導

担当教員：佐藤将朗
対象児・者：学齢期の視覚障害児及び視覚・重複障害児、学齢期の肢体不自由児及び重症心身障害児

本臨床実習（視覚障害）では、視覚障害児及び視覚・重複障害児の能力を伸張させることを目的とした活動を行っています。具体的には、まず、指導対象児が確定した後、履修者による対象児への関わりグループを討議により決定します。次に、様々な活動時の対象児の感覚系の観察、感覚系に関連したアセスメントツールの実施、保護者や学校関係者への意見聴取を行い、得られた情報を総合的に評価する、これにより、対象児の活動計画を策定し、指導計画に基づいた実践を行っています。

なお、本臨床実習（視覚障害）の指導対象児は視覚障害が主訴ではないが、見ることに困難性を抱えている幼児児童生徒も含まれます。

- ＜実際のテーマ＞
- ・視覚障害児及び視覚・重複障害児における感覚代行ならびに残存感覚の伸長
 - ・肢体不自由児における見る学習
 - ・重症心身障害児における感覚系へのアプローチ

学校での実習

担当教員：坂口嘉菜
対象児・者：聴覚障害のある2歳～18歳の幼児・児童・生徒



ろう学校の幼稚部の活動に参加させてもらい、先生と幼児のやりとりを記録し、ことばと思考を促す方法について学んでいます。活動の準備や片づけ、教材作成の補助などを行います。

その他、センターにおいては、就学前・小学校低学年の幼児・児童を対象として、ことばと思考の素地を養うごっこ遊びの指導などを行っています。小学校中学年以上のお子さんに対しては、言語指導や言語を伴った思考が必要となる教科学習指導を行っています。

- ＜実際のテーマ＞
- ・聴覚障害児を対象とした数学的リテラシーに関する指導
 - ・聴覚障害のある幼児を対象とした遊びに関する指導
 - ・ICTを活用したことばの学習教材の開発

担当教員：村中智彦・池田吉史
対象児・者：就学前から学齢期にある知的障害、自閉症スペクトラム障害、肢体不自由を伴う知的障害のある子ども

担当教員のスーパーバイズのもとに、特別支援教育実践研究センターのプレイルーム、検査・指導室での継続的な臨床実習を実施しています。知的障害教育に関する課題や問題に関し、臨床実習における自ら企画・立案した解決策に対して実験的・実証的に体験・経験することにより、自ら学校等における課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うことを目標とします。

活動内容は、オリエンテーション及びガイダンスのち、対象児・者への倫理的配慮、アセスメント、実態把握（聞き取り、インタビュー、質問紙調査、行動観察、心理等検査等）、指導目標（長期・短期）設定、環境設定、指導教材、個別の指導計画、指導プログラムの作成、指導案、個別・小集団指導と形成的評価の目的・方法・分析を実習します。院生は、全ての活動内容に関わり、加えて、担当教員の指導のもと、カンファレンス、集団討論、総合的評価、指導の成果報告を行います。

- ＜実際のテーマ＞
- ・知的障害のある子どもの効果的なアセスメントの開発
 - ・知的障害のある子どもの効果的な指導法の開発
 - ・個別の指導計画の作成と評価方法の開発

担当教員：笠原芳隆
対象児・者：学齢期から成人期にある肢体不自由や動作不自由のある人

特別支援教育実践研究センターにおいて、上記対象児・者に対して心理リハビリテーション（動作法）を参考にした指導・支援を行い、運動・動作面の改善を図るための技法を学びます。

指導・支援はグループをつくって個別に行い、特別支援教育における自立活動の授業を念頭に個別の指導計画を作成し、その計画に従って実際の指導・支援と評価を進めていきます。

通常期は毎週月曜日の夕方行い、夏季と冬季の休日には評価を兼ね一日集中で行います。

- ＜実際のテーマ＞
- ・脳性まひの子どもの座位や立位の安定を図る指導・支援
 - ・知的障害があり身体に緊張が見られる人のリラクゼーションを図るための指導・支援
 - ・個別の指導計画の作成と活用
 - ・チームティーチングのあり方 etc,



担当教員：八島猛
対象児・者：病弱者（呼吸器疾患、心疾患、皮膚疾患、脳性麻痺、ADHD、学習障害）の小中学生・中学生・高校生

病気の子供に対する教科学習支援：病気の子供を対象として主要教科に対する個別的な学習指導を1週間に1回行っています。指導内容及び方法は大学教員と大学院生によるカンファレンスにて決定し、大学院生は指導者を担当します。教育実践をとおして、病気の子供が主体的・意欲的に学習活動に取り組むための指導支援について検討しています。

病気の子供に対する対人関係支援：病気の子供同士が大学院生と大学教員の補助のもとにレクリエーション活動を行う教室を1カ月に1回開催しています。この活動をとおして、参加者の対人関係の支援及び参加者の保護者に対する支援について検討しています。

- ＜実際のテーマ＞
- ・学習障害児を対象とした内発的動機づけに基づく漢字の書字指導
 - ・視知覚認知に困難を有する児童に対する漢字の書字指導
 - ・脳性麻痺のある生徒を対象とした数学科における自己調整学習の支援
 - ・特別な教育的ニーズのある生徒の自尊感情に配慮した教科学習支援



センターでの実習



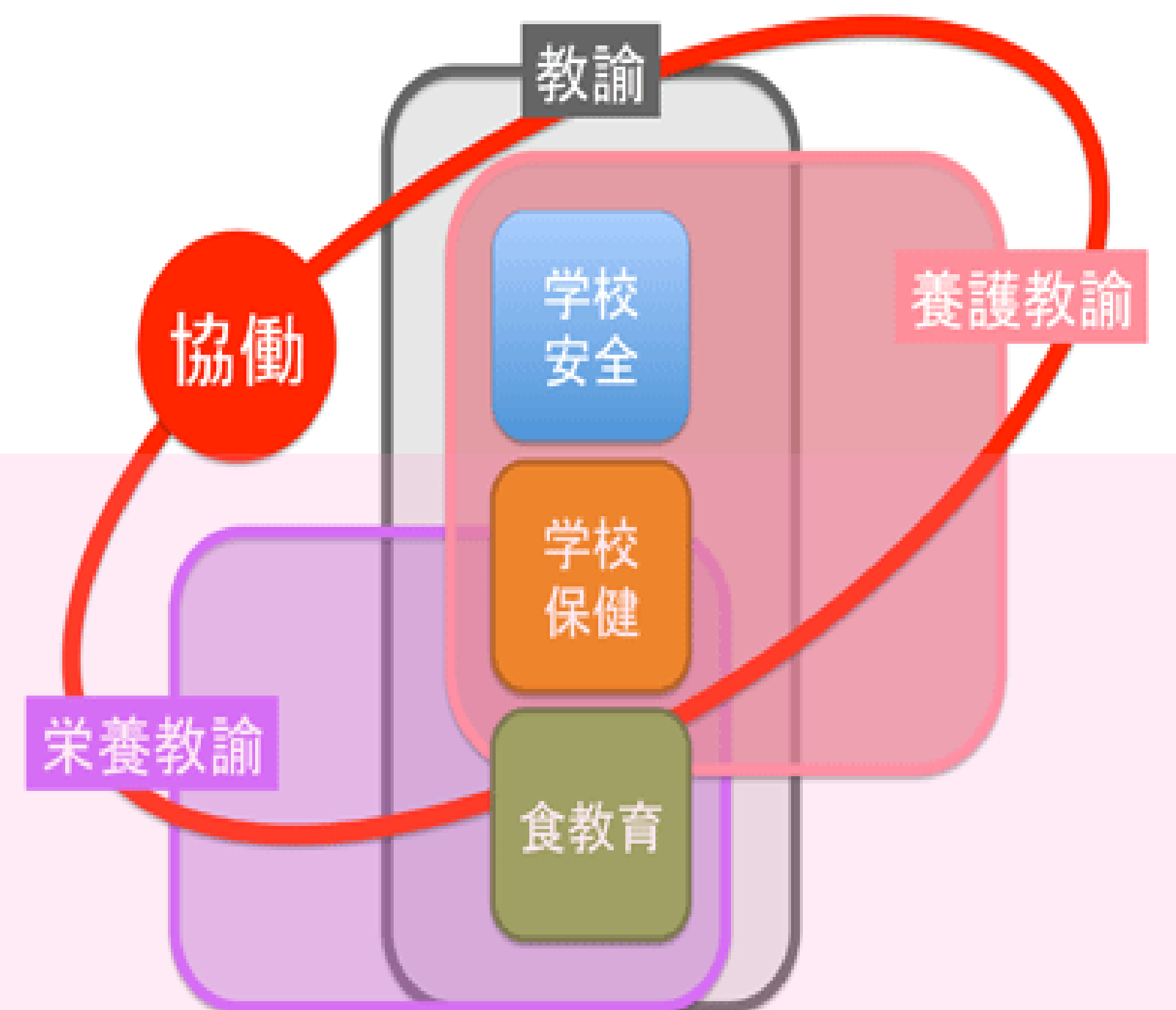
修士課程 学校教育高度化専攻 発達支援教育コース 学校ヘルスケア領域



【学校実習構想】 養護教諭免許状を持つ大学院生の場合

Q.学校ヘルスケア領域とは？

複雑化、多様化、深刻化する児童生徒の心身の健康問題に対して、組織的な対応を講じ、改善・解決に努めること、そして生涯にわたる健康で豊かな生活につながるための学校教育実践について学修する大学院(修士課程)です。



大学院生メンバー

(年度によりメンバー構成は変わります)

- ・学部を卒業し、ただちに大学院生になったストレートマスター
- ・派遣等で大学院に通っている現職養護教諭

実習の形態および時間

- ・一人実習 あるいは チーム実習
- ・9月から11月にかけて 全60時間

* 特別支援教育領域や臨床心理領域と組んだチーム構成も可能です。ご要望をぜひお聞かせください。
* 実習終了後も、大学院生ボランティアとして継続的にお手伝いすることが可能です。

実習のアウトライン

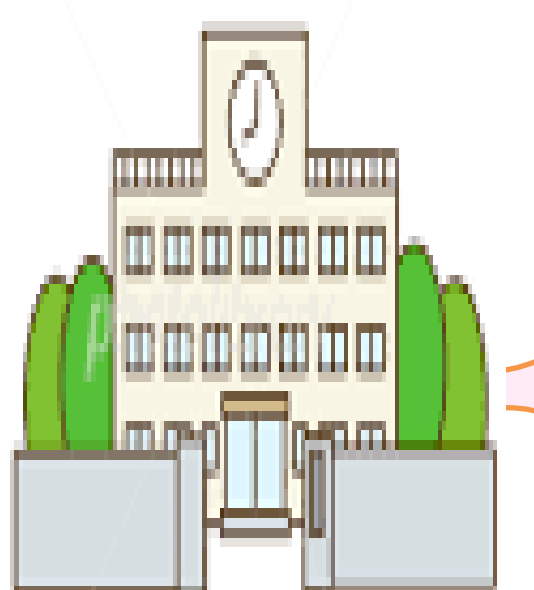
●保健室執務にかかわって●

- ・保健室活動や事務補助
- ・児童生徒の対応補助
- ・情報の整理・分析・評価
- ・保健だよりや掲示物、各種資料の作成
- ・保健委員会活動の指導補助 など



●日々の授業や特別活動にかかわって●

- ・給食・清掃・休み時間における児童生徒との交流や見守り
- ・個別対応を要する児童生徒の見守り、サポート
- ・学習支援
- ・挨拶運動や校内巡視 など



●養護教諭の校外活動にかかわって●

許可いただけるようであれば…

- ・地区・学区内の情報交換会や各種協議会への参加
- ・地区・学区内の研修会への参加、運営補助 など

●学校行事にかかわって●

- ・保健・安全行事補助
(健康診断、学校保健委員会、交通安全教室など)
- ・体育祭やマラソン大会の補助(救護を含む)
- ・校外学習・遠足引率の補助(救護を含む) など

●学校課題、研究課題にかかわって●

学校のご要望をお聴きしながら、実習計画を練ります。

実習生は学校理解に励みながら課題意識を洗練していきます。そのうえで課題にそった実践に取り組む能動的な実習になります。

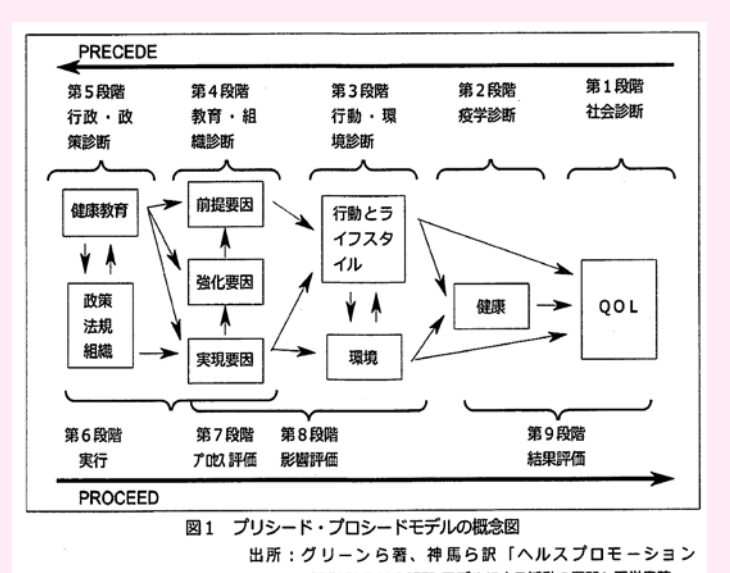
具体的な課題例

プリシード・プロシードモデルを活用した 学校保健委員会や児童生徒保健委員会の支援

- ・前半(30時間) 【観察、参加を通じた実態理解】および【分析】
：健康課題を抽出し、組織活動の実践計画を検討します。
- ・後半(30時間) 【具体的な実践と評価】および【次年度学校保健計画の策定への協力】
：校内研修、部会等で成果報告をさせていただきます。

●プリシード・プロシードモデルとは？

健康・安全教育の効果を高めるために開発されました。実態の要因分析→目標・計画・評価計画の策定→実践→プロセス・アウトカム評価の流れを通して、健康・安全指標の改善をめざします。児童生徒や保護者の参加・参画にも資するモデルです。



大学教員アドバイザー

(学校課題、研究課題により、大学教員アドバイザーは変わります)

- ・増井 晃(精神科医) : アドバイザー例 学校精神保健、教員のメンタルヘルス など
- ・上野光博(内科医) : アドバイザー例 健康管理(アレルギーや感染症対応)、健康教育(がん教育) など
- ・留目宏美(養護教諭) : アドバイザー例 保健室経営、健康相談、チーム支援、ケース会議、省察 など
- ・池川茂樹(学校保健) : アドバイザー例 生活習慣病予防、熱中症予防 など

【お問い合わせ先】お気軽にご意見、ご要望をお寄せいただければ幸いです。
留目 宏美 todome@juen.ac.jp

大学院修士課程 文理深化（国語）

小埜裕二（近代文学） 押木秀樹（書写書道） 鯨井綾希（国語学）
渡部洋一郎（国語科教育） 迎勝彦（国語科教育）

国語の力は学びの基礎！ **書**いて **読**んで **話**して **聞**いて♪

○たとえばこんなお手伝い○

小学1,2年生



- ・文字を正しく整えて1
平仮名・漢字学習を補助
- ・読書習慣の形成1
いろんな本の読み聞かせ

小学3,4年生



- ・文字を正しく整えて2
硬筆・毛筆の書写を補助
- ・言葉に関わるネタ探し
漢字を使った謎々

問：日がつくと明るい漢字

答：「月」

問：竹を乗せるとよく合う漢字

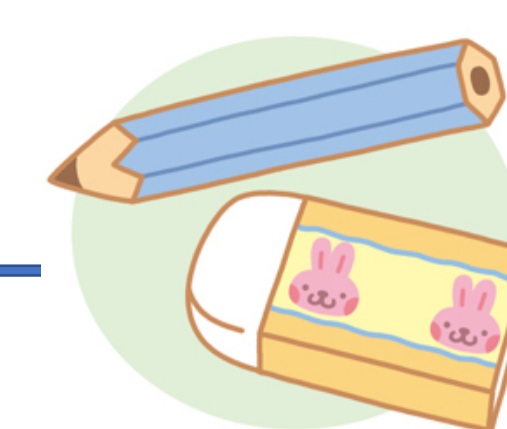
答：「答」

小学5,6年生



- ・文学に触れる1
俳句・短歌作成の補助
- ・放課後の学習支援1
作文の添削・指導
- ・読書習慣の形成2
朝読書の見守り
ブックトーク

中学・高校



- ・文学に触れる2
文学作品の読解や解釈の補助
- ・Team Teachingで学習支援
音読指導のお手本役
- ・放課後の学習支援2
読解や作文の添削・指導

○私たちの方針



- ・補助教材の作成やネタ探しのお手伝い
- ・TT(Team Teaching)での授業環境維持のお手伝い など

先生方の負担の軽減のためにサポートします



お気軽に御相談下さい。kokugo-s@juen.ac.jp

確かな英語コミュニケーション能力 ・異文化理解能力の育成

学校教育専攻 学校教育深化コース:文理深化(英語)領域

野地美幸 長谷川佑介 アイヴァン・ブラウン 松崎邦守

— 計画概要とコースの特色 —

- 在籍院生数: 各学年に15名前後(現時点)
- 支援機能: 学校現場と大学の実情に合わせて、まずは補助的支援、連携的支援を目指します
- 対象校種: 小学校・中学校・高等学校

キーワード: 歌・チャンツの活用、読み聞かせ、ことばへの気付き、音声と文字の導入、語彙と文法の導入、インプットの質と量、様々な国・地域の生活・習慣の理解、ICT活用、ことばの機能、やさしい英語表現で作る自然な会話

このポスターは「私たちにできること」のイメージです。実際には、先生方と相談しながら、実情に応じて柔軟に考えます。他コース(他教科)との協働を行う可能性もあります。

- アドバイザー(引率者): 当コースの教員が個々に引率する場合と、複数教員が連携する場合があります

案1: 授業実践型の実習

- ①事前打ち合わせ
 - 協力校の先生方と大学教員との打ち合わせ
 - 当該クラスでの事前の授業参観
- ②プランの具体化
 - 協力校の要望や院生の得意分野を考慮して英語活動を具体化する
 - 院生は大学で入念な事前準備・練習を行う

例: 院生数名のチームを編成し、15分程度の英語活動(数週にわたる帯活動)を何種類か提案する

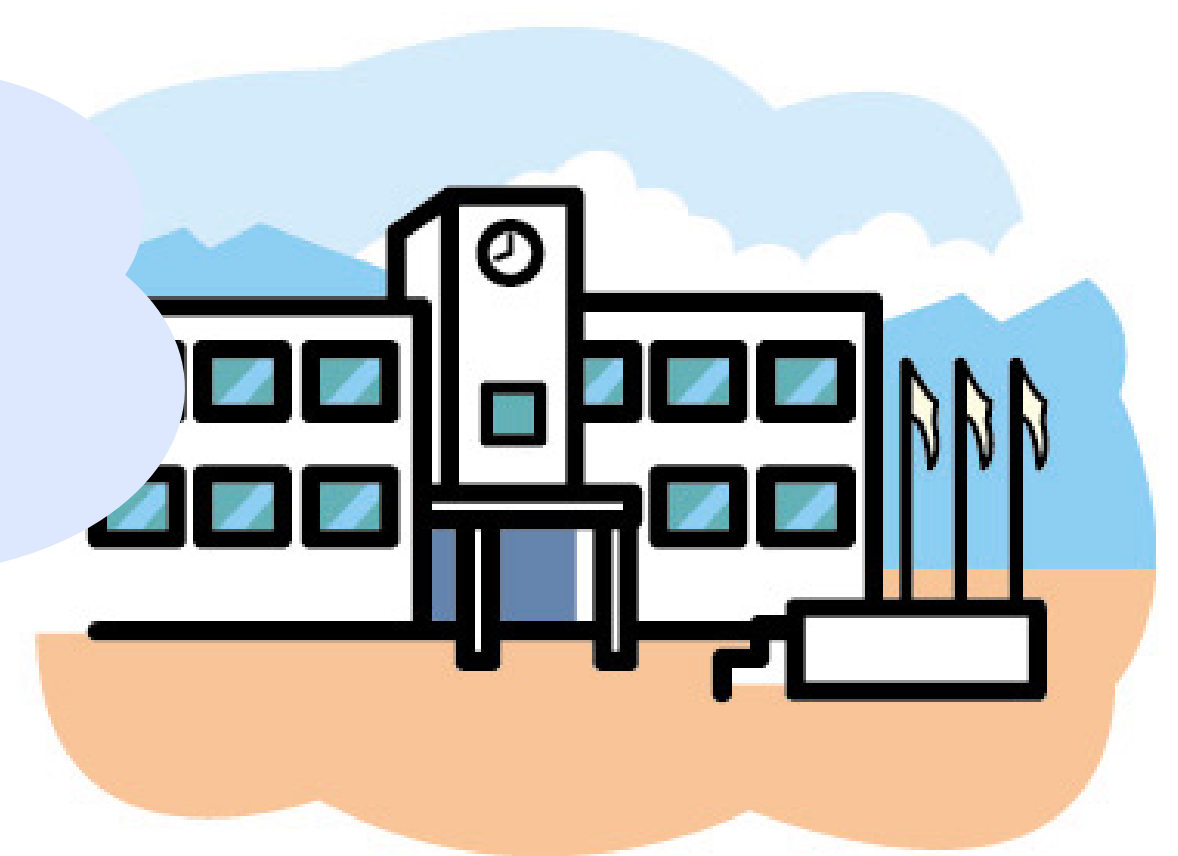
- ③英語活動の実施
 - 院生は相互に英語活動を参観(評価)し合う
 - 協力校の教員からも評価や改善点をいただく

案2: 授業準備型の実習

- ①事前打ち合わせ
 - 協力校におけるニーズを検討
- ②授業準備支援の実施

- 例1: 教材研究や、授業で使用する視覚資料の作成
- 例2: 演習プリントの作成や、その印刷補助
- 例3: 投げ込み教材や帯活動の提案

英語を使ってコミュニケーションをする児童・生徒の姿の記録・分析もできます。



案3: 課外学習クラブによる実習

- ①事前打ち合わせとプランの具体化
 - 協力校の先生方、院生、そして大学教員が具体的な実施計画を立てる
- ②課外学習の実施
 - 院生2~3名(最少人数)が大学教員(輪番制)と共に、放課後に課外学習の指導を行う
 - 例えば、児童・生徒の英語の宿題を見たり、英語の歌・本・ゲーム等に触れさせ、補習を行う

- ③経過報告
 - 課外学習の指導を継続的に実施し、英語力の増強を図るとともに、その状況を報告する
 - 協力校の先生方には可能な範囲で関わっていただき、情報共有を図る



案4: 授業分析による実習

- ①授業参観の実施
 - 参観可能な授業とその日程を決定する
 - 院生数名からなるチームを編成し、授業を参観させていただく(可能であればビデオ録画も)
- ②検討内容の共有
 - 大学にて院生が授業分析を行う
 - 後日、その授業の効果や授業中の児童生徒の学習状況などをまとめたものをお返りする

案5: 英作文添削による実習

- ①事前打ち合わせと作文活動
 - 英作文の評価基準について打ち合わせを行う
 - 普段の授業通りに作文活動を行っていただく
- ②採点・添削・スコア入力
 - 院生数名からなるチームが校内で手分けして採点および添削作業を行い、スコアを入力する(手間のかかる作文添削を院生が分担して行うことで、短時間で生徒に返却できるようになる)

子どもの社会的な「見方・考え方」を育む地域素材を活用した社会科授業開発 — 社会科教科「内容と方法」・「理論と実践」の協働 —

修士課程【社会】の学校実習構想

修士課程学校教育深化コースで文理深化（社会）となる本領域（以下【社会】）では、領域**【社会】をユニット（基本組織単位）とした学校実習**を構想しています（ユニットは、状況・条件に応じて**サブ・ユニット（小組織）**へ分割）。

キーワードは「地域教材、社会的な基礎力・思考力・実践力、ESD(SDGs)、防災教育」等で、**社会科教育を中核に学校教育実践の幅広い領域へ対応**します。

【社会】でユニットを組む理由は？

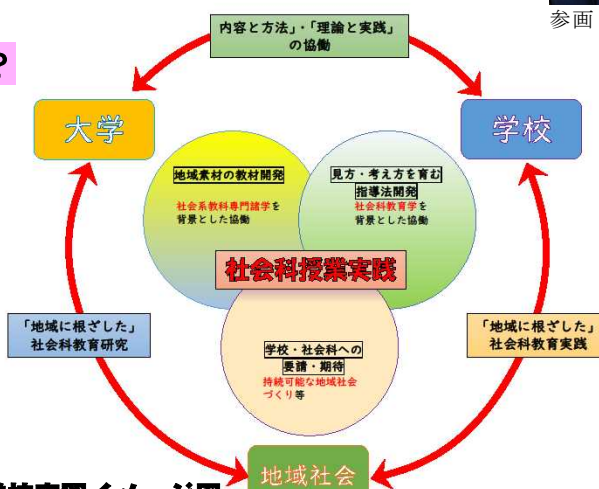
- ・学校現場の教科「社会」は、非常に幅広い**内容と方法**を擁しているから、
- ・【社会】は、教科「社会」の幅広い内容と方法に対応できる**多様な教員**で構成されているから、
- ・【社会】は、教科「社会」の学校教育実践に協働的に関わり成果を挙げてきたから、です。

そんな【社会】の学校実習の目標は？

- ・社会科教育に関わる幅広い「**内容と方法**」と学術的・臨床的な「**理論と実践**」をもとに、
- ・学校固有の**地域素材**を活かした授業開発（教材開発・授業実践・省察）を遂行し、
- ・学校と大学との知の**協働成果**として、次期学習指導要領「社会」における「**資質・能力**」の中核である**子どもの社会的な「見方・考え方」を育む教育実践**を目指します。

学校実習に携わる【社会】の教員は？

- 地 理 学 : 山縣耕太郎（自然地理学）
橋本暁子（地誌学）
歴 史 学 : 浅倉有子（日本史）
下里俊行（世界史）
畔上直樹（日本史）
公民系諸学 : 小島伸之（法律学）
吉田昌幸（経済学）
塚田穂高（宗教学）
社会科教育学 : 志村 喬（地理教育）
茨木智志（歴史教育）
中平一義（公民教育）



【社会】学校実習イメージ図

学校教育現場と【社会】との協働的活動のこれまでの成果は？

* 個人レベルの協働研究は除外

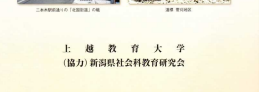
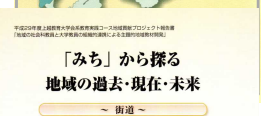
- 2009～現在：新潟県社会科教育研究会と社会系コースとで**地域教材資料集シリーズ『平成の大合併』**等を刊行し上越地域の全小中学校へ頒布
2011～13年度：上越市立大潟町小学校「**社会科研究調査**」(県小学校教育研究会指定研究)へ参画・協力
2013～現在：上越地域の社会科教員等を研究分担者とした実践研究活動を学内研究プロジェクトとして継続遂行し、成果は**上越市教育コラボ**等で発表。



上越市教育コラボでの院生による開発教材の発表



参画・協力した大潟町小学校での授業づくり



新潟県社会科教育研究会との開発教材(2009～18年)



上越市教育コラボでの研究分担現場教員の実践成果発表

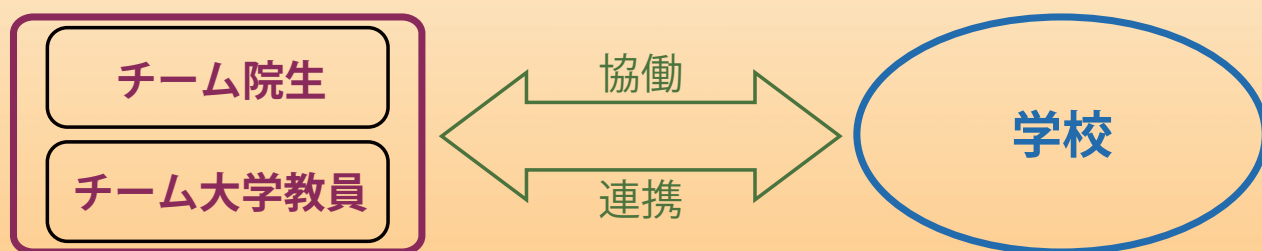


現場教員・大学教員・院生協働の教材現地調査

不明な点・質問・相談等は？

現社会系コース長である志村喬 (shimura@juen.ac.jp, 025-521-3339) はじめ、コース構成教員へお気軽にお問い合わせ下さい。

学校教育深化コース 文理深化(数学)領域



チーム院生：2名から5名で編成。数学教育研究をする者と数学研究をする者が共同で取り組みます。

チーム大学教員：2名から7名で編成。数学教育学研究者は算数数学教育実践の視座から、数学者は算数数学教材の深化という視座から取り組みます。

学校実習への4つのアプローチ

1. 子どもたちと

- ・授業での子どもたち支援
- ・放課後学習での子ども支援
- ・授業分析と子どもたちへのそのフィードバック
- ・子どもたちへの学習相談，学び直しへの支援，発展的学びへの支援



2. 学校教員の皆さんと

- ・授業実践の補助，TTでの授業参加
- ・日々の教材作りへの参加，ワークシートの作成
- ・授業分析と教科担任へのそのフィードバック
- ・校内研修での授業作りへの参加
- ・地域の研究会での授業作りへの参加



学校実習



3. 教育課程について

- ・カリキュラムマネジメントへの協力
- ・教育課程に係る年度計画作成への参加
- ・単元開発への参加

4. 学校行事について

- ・研究協議会への参加
- ・学校行事への参加

連絡先
自然系教育実践コース(数学)
高橋 等 hitoshit@juen.ac.jp

理科授業における3つの協働の例

【協働1】

観察、実験の準備や後片付け

- ・教材教具の製作
- ・予備実験の実施
- ・観察、実験器具の準備
- ・理科室の環境整備

【協働2】

観察、実験における班活動

- ・観察、実験の安全確保
- ・観察、実験操作の支援
- ・野外観察（校外学習を含む）

【協働3】

生活習慣・学習環境づくり

- ・児童生徒の生活習慣や学習習慣形成のための支援
- ・教室用掲示物や理科用掲示物の作成支援

【協働1】の例



【協働2】の例



【理科のセールスポイント】

- ◎観察、実験の準備から後片付けまでを協働して進めます。
- ◎観察、実験における班活動の支援や授業補助を行います。
- ◎児童生徒の生活習慣や学習習慣形成のための支援を協働して行います。

【協働3】の例



お問い合わせ：自然系教育実践コース(理科) 教授：中村雅彦 (masahiko@juen.ac.jp)

講師：山田貴之 (tyamada@juen.ac.jp)

修士課程学校教育専攻学校教育深化コース 文理深化・技術

科学技術の高度化、情報化、グローバル化に伴い、社会や生活における技術に関わる課題を解決する力や、地球資源やエネルギーを持続的合理的かつ賢明に利用し、地球環境保全に配慮し、技術を工夫し創造する能力と態度等を育成することが、学校教育の重要課題の一つです。

文理深化・技術では、材料と加工、生物育成、エネルギー変換、情報の各技術に関する深い知識と広い視野を持ち、技術教育の発展に先導的な役割を果たす人材を育成することに目標を置いて、技術科教育学、木材加工学、電気工学、機械工学、情報工学、栽培学（生物育成の技術を含む）などの学問分野を中心に、実践的・総合的・専門的に研究・教育を行っています。

教育情報システム研究室（教授 大森 康正 oomori@juen.ac.jp）

- 1) 小学校から高等学校までのプログラミング教育に関する題材開発
- 2) 小学校から高等学校までのプログラミング教育に関するカリキュラム開発
- 3) プログラムによる計測・制御および双方向コンテンツの題材開発&プログラミング環境開発
- 4) 人工知能・知識工学の教育への応用
- 5) その他、情報工学、教育工学関連

技術科教育研究室（教授 山崎 貞登 yamazaki@juen.ac.jp）

- 1) 中学校学習指導要領技術分野を中心に、学習指導要領（教育課程の国家基準）改訂のための基礎研究、小・中・高等学校における試行実践研究を約30年間継続
- 2) 教育課程国家基準改訂に関する基礎研究として、海外の技術科教育の動向を約30年間研究
- 3) 「生物育成」「材料と加工」「エネルギー変換」「情報」に関する技術を連携・総合化したカリキュラム研究と「技術を適切に評価・活用する能力（技術リテラシー）」育成のカリキュラム研究

機械工学研究室（教授 黎 子椰 liziye@juen.ac.jp）

- 1) メカトロニクス教育教材・教具の開発と実践
- 2) デジタルものづくりの技術教育への応用（CAD/CAM、CAE、3Dプリンタ、卓上NC工作機械）
- 3) 技術科教員養成における教科専門力の育成に関する研究
- 4) 楽しいものづくり体験学習教材の開発と評価

技術科教育・木材加工研究室（准教授 東原 貴志 htakashi@juen.ac.jp）

- 1) 木材の圧縮加工や曲げ加工などの木材加工ならびに木材物性学に関する教材の開発
- 2) 中学生が学ぶ生物育成の技術に位置づけられる林業に関する内容など、森林・林業教育に関する研究および技術科教育に関する研究

電気工学研究室（助教 岡島 佑介 okajima@juen.ac.jp）

- 1) 電気回路に関する研究、ロボット作りなどの研究

主に抵抗・コンデンサー・コイル・モーターなどを基盤に取り付けて電子回路を構成することにより、モノづくりの基礎に触れることを目指します

文理深化・技術では教員の専門性を活かし、中学校技術・家庭科技術分野のほか、小学校から高等学校までのものづくり教育やプログラミング教育に対応したさまざまな題材を提案することができます。コース世話人もしくは各教員まで直接ご連絡ください。

コース世話人 大森 康正 (oomori@juen.ac.jp)

修士課程 学校教育深化コース 文理深化・技術が行っている 主に小学生・中学生を対象とした地域貢献活動

領域の教員と大学院生が協働で実施している取組例

連絡先: 領域世話人 大森康正 (E-mail oomori@juen.ac.jp)

「ものづくり」教育・研究グループの取組例

上越科学館との協働
サイエンス広場(わくわくものづくり教室)
発明クラブ



公開講座(木琴をつくろう)



レーザカッターを使った鉛筆立てづくり体験学習



県中教研や関東甲信越ブロック研究大会などでの指導や運営支援



「プログラミング」教育・研究グループの取組例

教員・社会人を対象とした
プログラミング指導者育成講座



ギークラボ上越
子供向け「もくもく会」(放課後クラブ)
各種プログラミング教室



地域のITグループ、専門学校や
企業等と連携したプログラミング教育



教育委員会等での研修
教育委員会・学校との研究プロジェクト



≪文理深化・家庭≫



≪家庭≫では、人の一生と暮らしを考え、創造し、科学します。
生活について、人文・社会・自然科学の立場から総合的に学ぶのが
≪家庭≫です。様々な教科で学んできたことを
「生活者」の視点から、とらえなおす科目が≪家庭≫なのです。



≪文理深化・家庭≫は
家庭科教育学・生活経営学，児童学，食物学，被服学，家庭科教育学
の5つの研究室から構成されています。

家庭科教育学 生活経営学

探求的な学習におけるグループ
ワークや課外活動などの支援
(ティーチング・アシスタント)や、授
業実践の記録などを行う。家族や
人の一生、「サステナブルな社会
の構築」などをテーマにした授業
や教材の検討・準備をする。



児童学

幼児期の子どもの発達を「生活文
化」の伝承獲得・共有の視点から
捉えるとともに、「生活」概念の形
成過程について関心を持っている。

家庭科教育学

教室で学んだことが実際の生活と
つながっていくような家庭科の授
業、家庭科の学習環境に関する
検討を行っている。また、家庭科
に対する理解を高める体制づくり
などに関心を持っている。

学校 実習

被服学

普段何気なく用いている衣服を着
用者の視点から実験や調査を通
して、被服の諸機能を考究してい
る。特に、日常生活の道具等の使
い手と衣に関する生活動作との関
係等を取り上げ検討している。

食物学

地域資源を活用した学校教材を検
討・作成する。教材を通して、「食」
についての科学的理解を深めること
ができるよう工夫を加える。授業実践
の際には、準備・片付け等のサポートも
行う。教材の内容理解のために地域
の資料館や記念館を活用し、それら
が有効に機能するよう協力する。

「家庭」で学んでいたら、その学びは地域と、世界と、繋がっていた。
歴史と、未来と、繋がっていた。そして今の自分の生活と、繋がっていた。

連絡先 家庭科教育学・生活経営学：小高さほみ(sahomi@juen.ac.jp) 児童学：吉澤千夏(chinatsu@juen.ac.jp)
被服学：佐藤悦子(etsuko@juen.ac.jp) 食物学：光永伸一郎(mitunaga@juen.ac.jp)
家庭科教育学：佐藤ゆかり(yukari@juen.ac.jp)



学校教育専攻 学校教育深化コース

芸能深化（音楽）領域

芸能深化（音楽）領域は現在の芸術系教育実践コース（音楽）の教員7名により構成されます。

課題研究プロジェクトに関する学校実習においては、学校現場における音楽に関わる問題の解決に取り組むとともに、修士課程学生の課題研究にも繋がるよう計画しています。音楽教育学・声楽・器楽・作曲・音楽学の5つの専門分野の学生・教員が単独または複数でチームを編成する予定です。

分野とテーマ例

音楽教育学

担当教員：時得紀子、尾崎祐司

- ・音楽科における「三つの柱」の充実に向けた授業方法の開発
- ・特別支援学校の音楽科におけるピアノの伴奏や子どもの介助
- ・音楽科における通常の学級の児童生徒と特別支援学級の児童生徒との交流の深め方
- ・小学校音楽科における英語を取り入れた授業づくり

声楽

担当教員：上野正人

- ・歌唱に関する授業・課外活動の支援
(合唱の音取り、パート練習、若手教員へのアドバイス等)

作曲

担当教員：阿部亮太郎

- ・創作の授業における実演や試演
(創作の試行錯誤の実演、
児童生徒が試行しているものの試演)

- ・歌唱指導をより発展させる取り組み（声楽とピアノのチーム）
(音取り、歌唱指導、ピアノ伴奏やその助言等)
- ・創作に関するピアノパートの演奏
(ピアノと作曲のチーム)
- ・音楽が関わる学校行事の運営・指導（器楽と声楽のチーム）
(文化祭や校内合唱コンクール等の企画・運営、実技指導)

器楽

担当教員：平野俊介、長谷川正規

- ・音楽科におけるピアノ演奏による支援
- ・吹奏楽の指導・運営の充実にむけて
(合奏を含む実技指導、演奏会等の企画・運営、楽器管理等)

複数の分野による
チームも可能

- ・音楽科における器楽の教材研究や授業補助（器楽と音楽学のチーム）
(リコーダー、伝統楽器等の範奏、実技指導等)

音楽学（伝統音楽・諸民族の音楽）

担当教員：玉村恭

- ・音楽科における伝統文化教育・多文化教育の充実に向けた教材研究・教材開発
(教材研究・授業研究、授業実施の際の範奏や実技補助、教具の管理・運搬・管理)



阿部 靖子 研究室

美術科教育を担当。特に、美術科教育における立体表現や空間表現、そして環境造形表現を研究領域とし、理論的研究及び自身の制作による実践的研究を行っている。また、教育内容やカリキュラムの研究、子ども研究、教材研究と指導法、評価なども研究対象としている。

美術科教育

五十嵐 史帆 研究室

美術科教育を担当。「つくる行為」に注目し、従来の概念にとらわれない視点から美術教育を再考していくことをテーマにしている。授業実践や美術館ワークショップ等を通して実践的研究を行っている。

美術科教育

洞谷 亜里佐 研究室

絵画（日本画）を担当。日本画制作研究を中心とした理論と実践を行っている。主に、伝統的な絵画・壁画表現の組成や技法を分析し、模写を通じた文化財教育を研究している。

絵画

伊藤 将和 研究室

油彩画、現代美術を担当。平面作品と立体作品の関連性を様々な技法や材料を用い、インスタレーションとして展開する。また、ワークショップ等を通じ、美術の社会還元を研究している。

絵画

松尾 大介 研究室

彫刻制作を研究領域とする。木彫を主として、塑造、石彫、金属、テラコッタ等、様々な技法や素材を扱いながら彫刻表現の可能性を研究している。また、彫刻を中心とした立体表現の教材に関する研究も行っている。

彫刻

安部 泰 研究室

視覚・メディアデザインを担当。グラフィックデザイン、イラストレーションを専門とする。デザインの社会的な意味や役割を意識した実践的研究を行っている。制作においてはアナログとデジタル双方の長所を活かしつつ、目的に合った完成度の高い表現を研究している。

デザイン

齋 期天 研究室

陶芸（陶磁器）、工芸を担当。粘土から工芸作品に至る行為を通じて「ものづくり」の本質について考察し、工芸における素材・プロセス・技術のあり方について研究している。工芸という専門性が学校教育の中で活かされることを目標としている。

工芸

芸能深化・美術では、「つくる」「描く」「みる」ことを通して、自ら学び考え行動する力を育むことができる教育の実現を目指し、教員をはじめとする様々な分野における指導者の育成を行っています。

美術教育研究では、教育現場での実践知を大切にしながら隣接諸科学の成果も参照した実践的研究を目指しています。

授業等では、近隣の小中学校の協力を得て教材開発を行ったり、美術館でワークショップを企画・運営したりしています。

学校支援の例（案）

A 補助的支援

大学（学生）が中心となって計画し行うもの

- 1) 黒板アートの制作（卒業・入学式に向けて、黒板とチョークを使った絵画のデザインと制作）または、制作補助。
～教員が卒業生あるいは新入生へ向けてメッセージを送る際に、その意図を丁寧に調査し、デザインし、制作における技術的な補助を行う～

B 連携的支援

学校、大学（学生）のそれぞれの特性を生かし、役割分担等をしながら行うもの

- 2) 写生大会の引率及び、描画指導補助。
- 3) クラブ活動支援（美術クラブなどの実技指導・支援などを行う。）
- 4) 鑑賞授業の補助（事前授業の教材の作成、美術館等への引率）

C 協働的支援

学校、大学（学生）が一緒に検討しながらすすめていくもの

- 5) 造形遊び（材料や空間を体全体で感じながら取り組む造形活動など）の授業計画、準備、実践、評価。
- 6) 教員、学生の立体作品（彫刻や工芸など）を貸出し、触れながら鑑賞する授業の計画、準備、実践、評価。

D その他の支援

学校外の活動ではあるが、学校の教育活動と関連するもの

- 8) 学外のギャラリー等での児童・生徒の作品による展覧会の企画・運営。
- 9) 放課後や児童クラブ等での造形活動の企画・運営。



中学校運動部活動における「対話的で主体的な、深い学び」の促進

実習概要

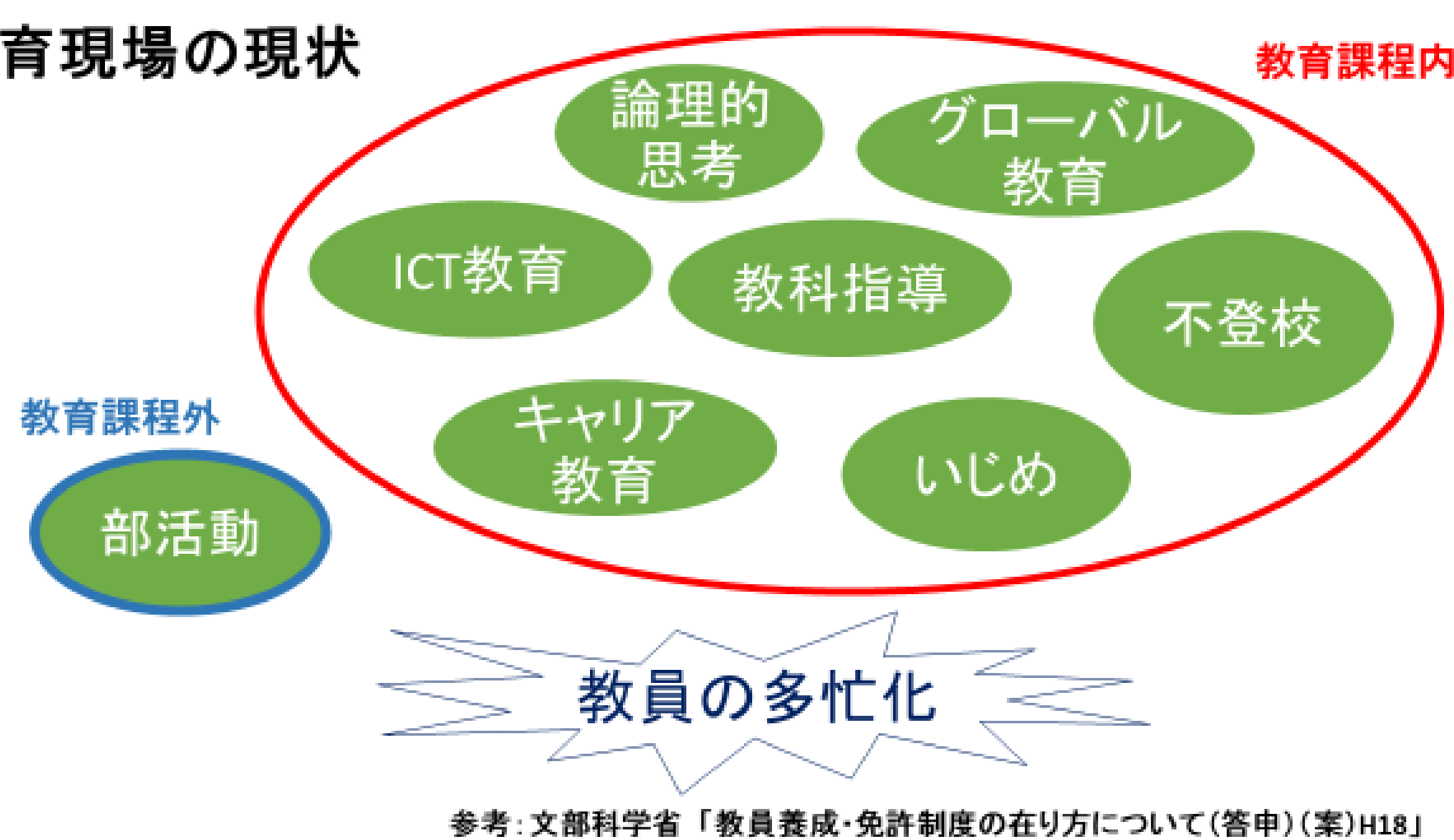
- 競技の専門性(例:剣道、陸上競技、サッカーなど)を有する大学院生が外部指導員として中学校の運動部活動に参加する。
- 生徒の「対話的で主体的な、深い学び」を促すための資料や情報を顧問教員と連携して生徒に呈示する。
(例:示範、動画、練習内容、技術・戦術の要点、疲労度、体力指標 など)
- 生徒の「対話的で主体的な、深い学び」の程度を、大学院生による客観的分析(インタビュー、調査、学習記録の解釈、映像分析)と顧問教員の観察評価を元に検証する。
- 顧問教員の「負担感」の変容を顧問教員の主観的評価を元に検証する。

期待される成果

- 大学院生が外部指導員として運動部活動に参加することにより

- 生徒の「対話的で主体的な、深い学び」が促進される。
- 教員の部活動に対する「負担感」が軽減される。

教育現場の現状



部活動の学習指導要領上の扱い

現行の学習指導要領

- 生徒の自主的、自発的な参加による部活動
- スポーツ、文化、科学に親しませる
- 学習意欲向上や責任感、連帯感の涵養
- 学校教育の一環として、教育課程との連携をはかる

新学習指導要領

- 生徒の自主的、自発的な参加による部活動
- スポーツ、文化、科学に親しませる
- 学習意欲向上や責任感、連帯感の涵養
- 学校教育の一環として、教育課程との連携をはかる
- 持続可能な運営体制が整えられるようにする

教育的意義が大きい

参考: 文部科学省「学習指導要領」(平成22年・平成29年公示)

部活動をめぐる課題(教員)

「平日は部活が終わって7時からやっと教材研究や、事務仕事が始められる」

「顧問をしていると、土日もなく、家庭も顧みず、慢性的な多忙感でゆとりのない生活を余儀なくされる」

「担当している部活動の競技経験がないので、何を指導したらよいのか分からない」

部活動に対する生徒の思いは多様で、それらの思いに答えられているのか不安がある」

部活動をめぐる課題(生徒)

「部活が終わってから塾に通ってる。勉強と部活を両立させるのは大変。」

「小学生の頃から民間のスポーツクラブで練習してきているので、部活の練習は楽だね。」

「初心者だからもっと基本を教えて欲しいけど、今は大会に向けた練習の期間。先輩たちの応援を頑張ろう。」

「試合に出してもらえないし、部活がつまらない。」

「全国大会に出場したいから、しっかり練習したい。土曜日や日曜日は、強いチームとたくさん試合がしたいな。」

外部指導員の活用

生徒の「対話的で主体的な、深い学び」を育む上教大メソッド

「問題解決・発見」

- 1 自身や仲間の運動や生活を省察・観察して問題を見つけ、問いを立てる。
- 2 発見された問題に対して主観的あるいは客観的情報に基づき解決のための課題を導出する。
- 3 問題解決のための練習や解決策を計画する。
- 4 練習や解決策に基づき実践を行ない、結果を分析解釈する。

「論理的・批判的・創造的思考」

- 5 見つけた問題の問いが、練習や解決策で改善できるものになっているかどうかについて説明する。
- 6 練習や解決策が、実践で具体的に改善・修正できるかどうかについて説明する。
- 7 実践上の問題を解決する手立てが適切かどうかについて批判的にとらえ、必要があれば修正する。
- 8 実践で得られた結果(パフォーマンス)に基づき、練習や解決策が適切かどうかについて説明する。

「メタ認知・学び方の学び」

- 9 練習や解決策により、課題を解決する過程を振り返って説明する。
- 10 新たな問題や類似した問題に対して、既習の問題解決のための考え方を適用し、実践できる(実践の手立てを考えることができる)。

<1年目>

<2年目以降>

修士課程 芸能深化コース (保健体育)

連絡先: 世話役 周東 和好 (shuto@juen.ac.jp)

上越教育大学大学院修士課程
言葉と芸術をととして国際的に教育を理解する
国際理解・日本語教育コース*

国際理解・日本語教育コースとは？

日本人学生と留学生を対象とする来年度からの新しいコースです。

日本人学生と留学生が積極的に交流しながら研究を進めるコースです。

入学する学生

(日本人学生)

- ・ 各国の文化・習慣に関心がある学生
- ・ 小学校の外国語活動を担当したい学生
- ・ 教員として働きつつ日本語や日本の習慣・文化を教えたい学生
- ・ 文化・芸術分野のコーディネーターになりたい学生、など

※留学生も在籍予定

担当教員（学校での実習）

洞谷亜里佐：美術教育・絵画（日本画）

- ・ 伝統表現と文化財の教育を研究しています

野村眞木夫：日本語学（文章・談話・文体）

- ・ 日本語の表現の研究を専門としています

北條礼子：英語教育（小学校英語を含む）

- ・ 異文化理解教育の担当実績もあります

藤谷元子：国際・異文化理解教育・国際開発（教育分野）

- ・ 国際協力経験（ヨルダン）があります

本コースの教育・研究内容に基づき、学校と協力し、以下のような活動をお届けします

※留学生と日本人学生のグループ及び留学生のみの派遣を希望される場合は、
直接 fujitani@juen.ac.jp までお問い合わせください

例えばですが…

- ・ 諸外国の文化・習慣に興味を持つための活動
- ・ 児童・生徒が英語に親しむための活動
- ・ 児童・生徒が英語以外の外国語に親しむための活動
- ・ 外国にルーツを持つ児童・生徒の背景をよりよく理解するための活動
- ・ 地域の文化財等を通して、地域愛を育てるための活動
- ・ 各国の美術作品を通して、諸外国の文化に親しむ活動
- ・ 開発途上国のひとたちにみんなが何ができるかを考える活動
- ・ 日本は開発途上国に対して、どのような協力・援助をしてきたかを知る活動
- ・ 日本と世界のかかわりについて興味を持つための活動
- ・ 日本語の使い方や表現を工夫してみるための活動
- ・ 日本の伝統文化に興味を持つための活動



町家交流館高田小町

問い合わせ先 藤谷元子 fujitani@juen.ac.jp

ホームページ <http://www.juen.ac.jp/kokunichi/index.html>

* 本計画は現在文部科学省と協議中です。今後協議を進めていく段階で、コース名称等を変更することがあります。

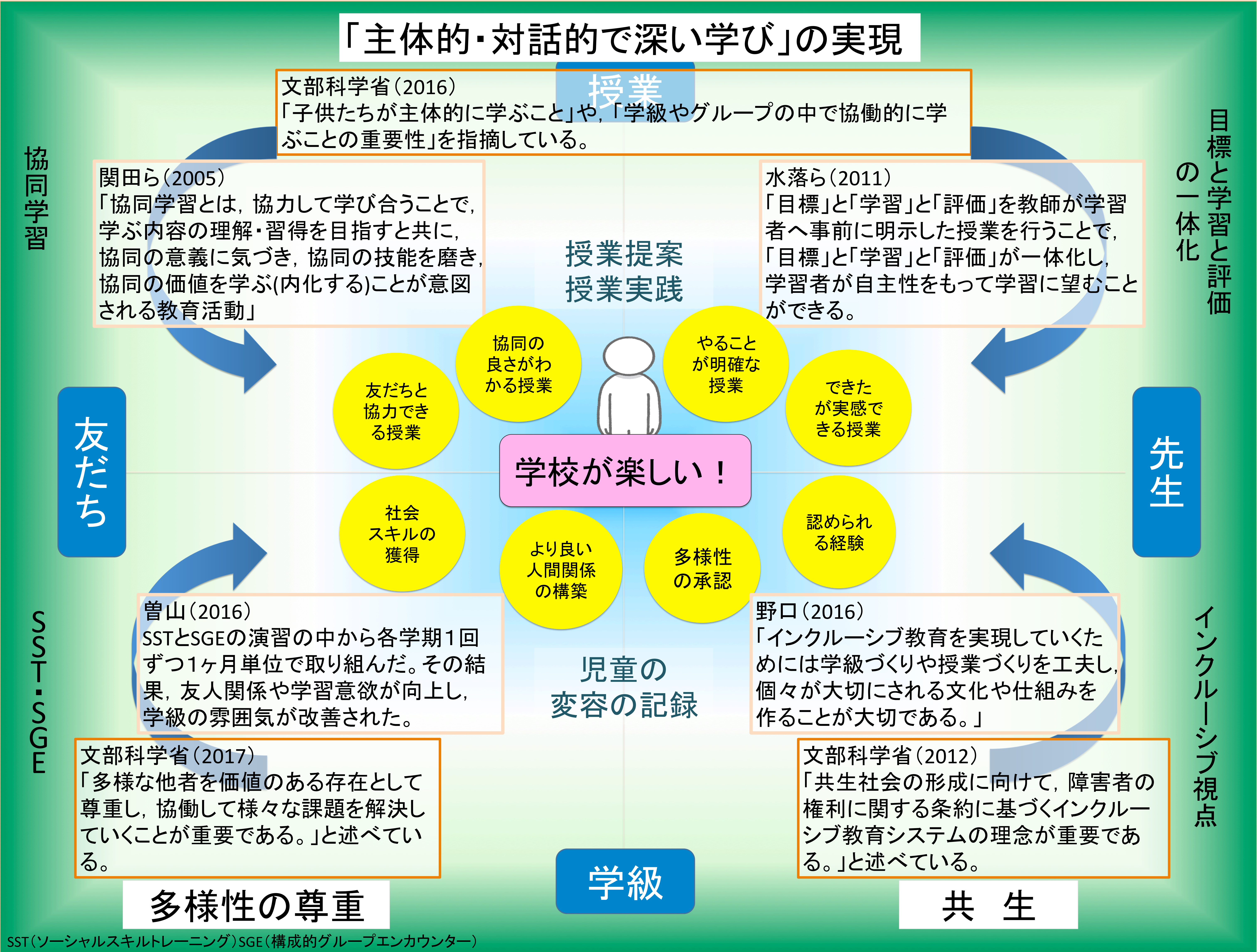
教科教育・学級経営実践コース

阿部研究室

子どもが「学校が楽しい」と実感できる授業づくり・学級づくり

＜学校課題＞
「授業が楽しい！」「学級が楽しい！」「友だちに会いたい！」「先生に会いたい！」と、すべての子どもが心の底から実感できる学校にすること。

- ＜連携にあたっての要望＞
- 担任と共に、子どもにとって満足感の高い学級にするための具体的方策を検討（計画・実践・評価）する。
 - 担任の学級経営力を向上させるための校内研修，授業研究
 - 学級経営の組織論，活動論の研修



SST（ソーシャルスキルトレーニング）SGE（構成的グループエンカウンター）

＜フィールドワーク計画＞ □期間 8月30日～11月末

初期

中期

後期

実習計画	・ニーズの把握 ・アンケート調査，分析 ・学級経営に関するプレゼンテーション （方向性の提示）	・授業提案，授業実践 ・学級経営に関する連携協力 ・児童の変容の記録 ・プレゼンテーション （中間での成果と課題の提示）	・授業改善の働きかけ ・学級経営に関する連携協力 ・児童の変容の記録 ・プレゼンテーション （最終的な成果と課題）
------	--	--	---

教科教育・学級経営実践コース 岩崎研究室

「柔軟な思考力の育成」を目指した算数授業の開発研究 ～「対戦型算数授業モデル」の構築とその授業実践の分析～

上越市立直江津小学校チーム 川上節夫 牛腸賢一

1 N小学校の校内研究

研究主題 柔軟な思考力の育成
～学ぶ意欲を高め、思考を深める算数授業づくりを通して～
研究内容
・課題の工夫
・思考を深める協同的な学びの場における言語活動の充実

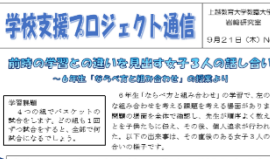
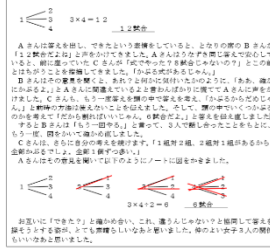
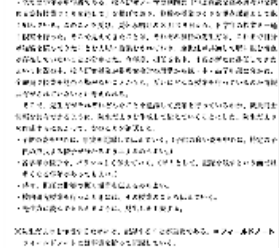
2 新しい教育の方向性

予測困難な時代の中でも、児童一人一人が、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合っており、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることが求められている。

3 チームの目的

- ・子供が目的意識をもって主体的に対話しながら課題に取り組む算数授業モデルの構築
- ・実践授業で見られた相互作用の特徴とそこでの算数学習について明らかにすること

4 主な取組の概要（9月～12月）

月	活動内容	活動の実際	期間を通しての取組
9月	授業観察	○学校支援プロジェクト通信の発行 	○リフレクション及びリフレクション記録の作成 
10月	授業協議会参加	N小学校の職員がどのような授業をしているか、何を大切にしているかを職員同士が共有できるように「院生による通信」を発行した。 	アドバイザーとともにリフレクションを行い、授業の見方やプロジェクトの方向性についてアドバイスをいただき、その内容を記録した。 
11月	授業提案	○提案授業 ☆グループ対戦型算数授業 第4学年「面積」～おもしろ問題づくり～ 第6学年「拡大図と縮図」～よりよいアイデアグランプリ～ 「グループで活動したい、話し合いたい」と子供が感じ、「何のためにどこまで考えなくてはならないか」を主体的に考えられるグループ活動の組織化を提案 ①何のためのグループ活動かの明確化 ②聴く側に責任をもたせるジャッジ制の導入	○算数コーナーの作成、設置 
12月	授業実践		子供が算数に興味をもてるように「算数コーナー」を設置し、問題の作成・採点・正解者の発表を行った。

5 グループ対戦型算数授業の実践 ～第6学年「拡大図と縮図」の授業より～

学習課題 佐渡の面積の求め方を考えよう

佐渡の縮図と実際の面積(855.69 km²)を提示し、グループでよりよい面積の求め方を考える。

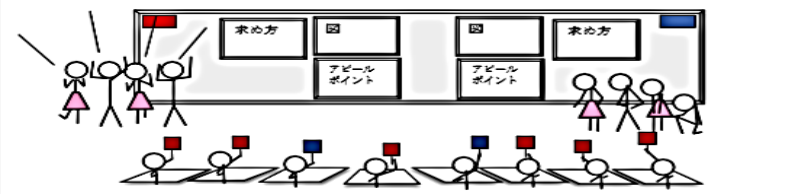
そして、グループ対戦を通して、よりよいアイデアを作っていくことを児童に伝えた。

対戦までの流れ(全3時間)

時間	主な児童の活動
1	グループで佐渡の面積の求め方を考える。
2	対戦に向けて考えたアイデアの図・解答・アピールポイントを作成
3	対戦・判定・振り返り

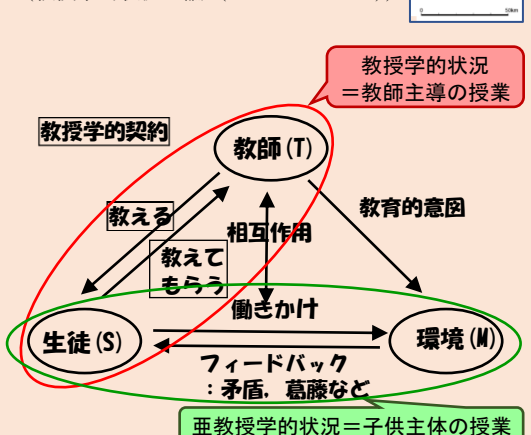
⑤最終ジャッジ(3分) & コメント(2分)

・どちらのグループが「算数的によりよいアイデア」かを判断して、選んだグループと理由をシートに記入し、ジャッジカードを出す。数名からジャッジの理由についてコメントをもらう。



6 理論的視座

(教授学的状況理論 (Brousseau 1997))



教科教育・学級経営実践コース 桐生研究室（小学校）

桐生研究室の取り組み

理科教育，授業実践，プログラミング教育，アクティブラーニング，校内授業研究，ICT，カリキュラム・マネジメント，異学年・異校種連携，看護大との連携（特別支援）

今年度 桐生研究室小学校チーム連携協力テーマ

理科授業実践による進んで学び、意欲的に表現する子どもの育成

連携協力校の実態（連携協力校から出された連携協力希望書より）

「自己受容感覚」自分の良さを実感できず、自信を持ってない
「勤勉性感覚」あきらめずに最後まで取り組めない

課題

この課題を踏まえ、意欲的に学び・表現する子どもの育成を目指し研修を行っている

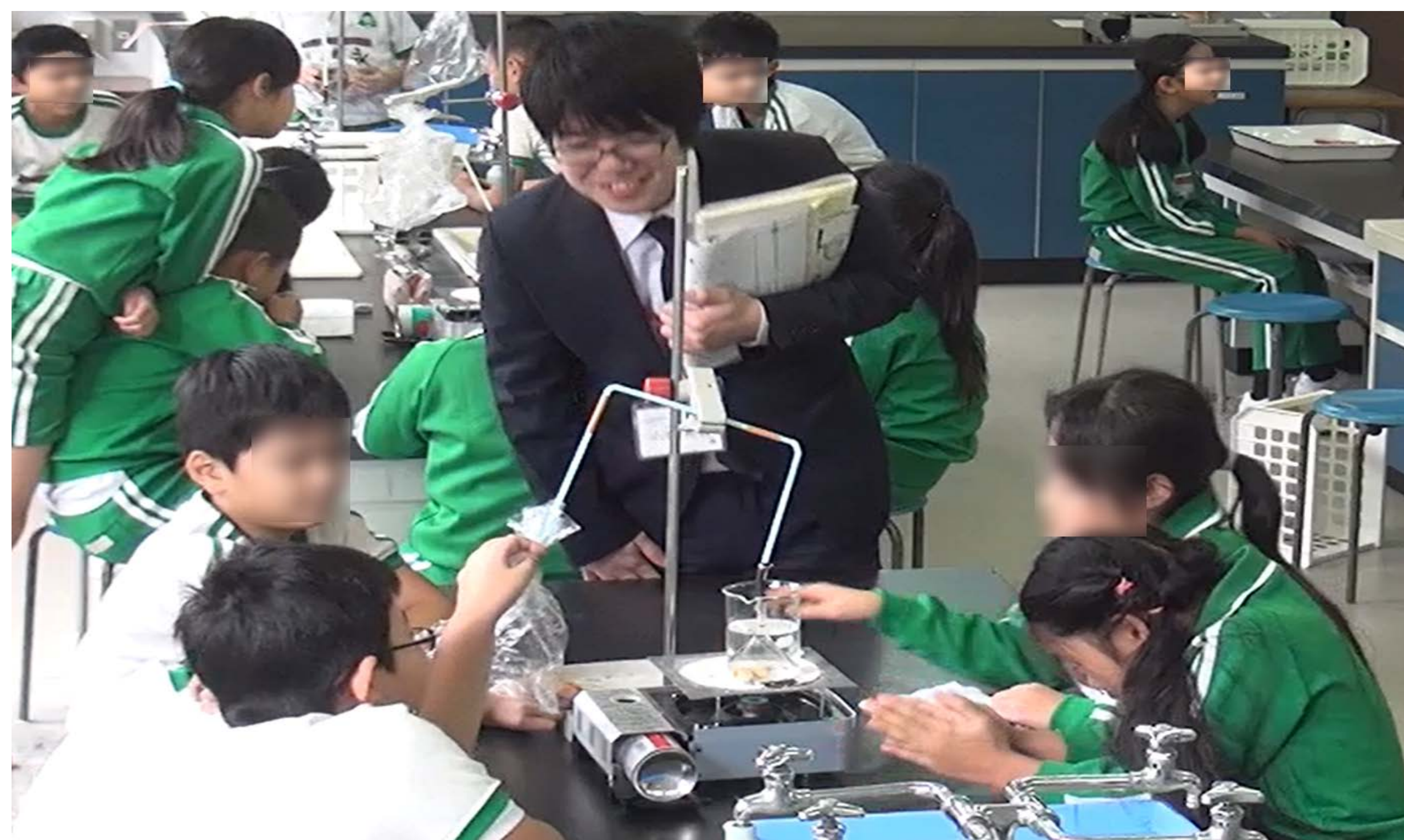
連携協力校の要望

①研修への支援

- ・授業実践への支援（教材、資料収集、先行実践紹介）
- ・子どもの姿の変容についての情報収集及び提供

②教員の授業力向上支援

- ・教材研究の充実に向けた支援
- ・現職院生や院生による提案授業



主な取り組み

院生による理科の授業実践を通して

「主体的・対話的で深い学び」の実現

+

学習と日常生活の関連（実用志向）を重視

⇒ 話し合い・教え合い・発表など表現する言語活動の充実

⇒ 実用志向により、学習意欲の向上
学習の意義の具体化

進んで学び、意欲的に表現

その他の取り組み

- 授業以外の場面（給食・掃除等）の補助
- 理科以外の授業の補助
- 学校行事（マラソン大会・文化祭）の補助
- 理科教材、資料収集、理科室の環境整備
- 連携協力の様子を載せた院生便りの作成
- 子どもへのアンケートの実施と分析
- 観察などを通して気づいたこと（特によかった点や成長が見られた場面）の共有

教科教育・学級経営実践コース 桐生研究室(中学校)

桐生研究室の取り組み

理科教育, 授業実践, プログラミング教育, アクティブラーニング, 校内授業研究, ICT, カリキュラム・マネジメント, 異学年・異校種連携, 看護大との連携 (特別支援)

学校課題

- ①小中一貫教育の推進
- ②問いのある課題、授業のUD化、
学び合いによる授業改善
- ③学力低位層の学習保障



連携協力内容

- ①小中教職員の連携による授業研究の
分析と評価

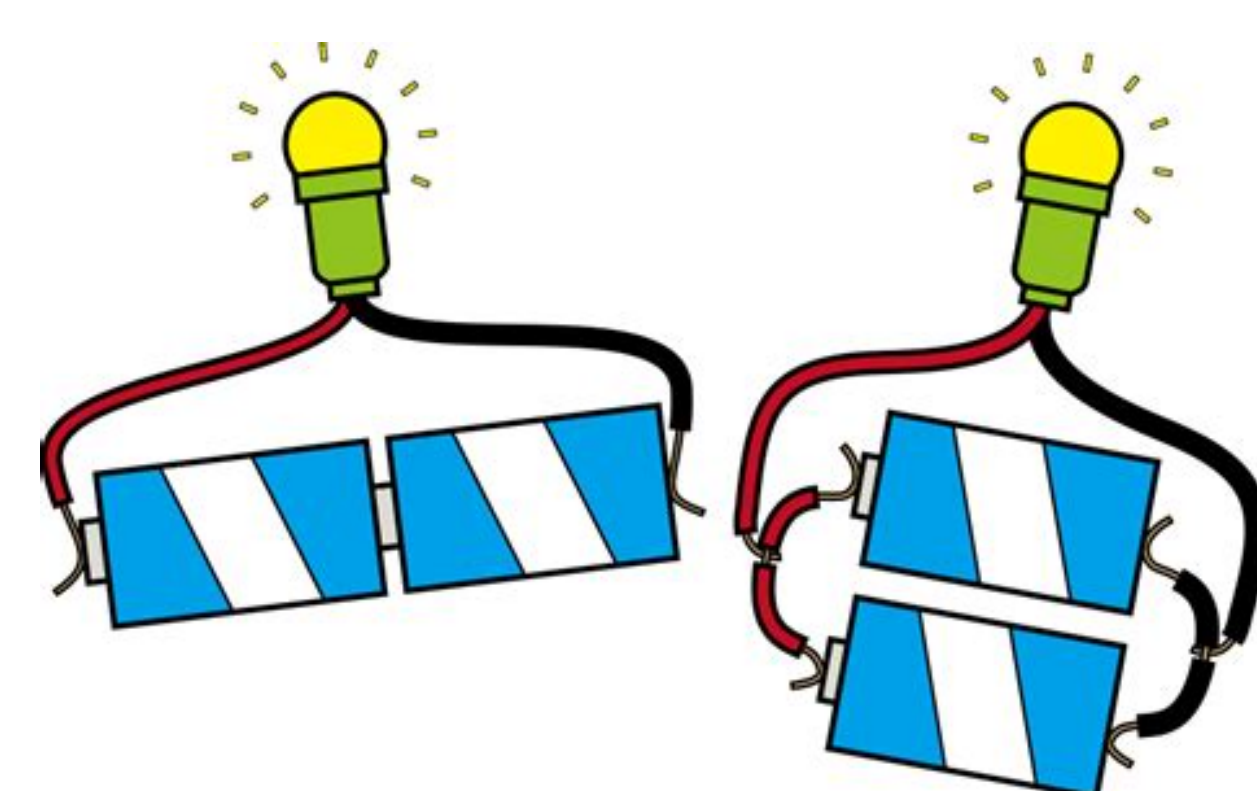
→事前協議への参加、当日の記録、効果分析、分析
結果の還元など

- ②視覚的カリキュラムを活用した
教科横断的な授業研究の企画と調整

→教科横断的な授業実践の効果分析
(アンケート調査・発話分析を通して)

- ③習熟度別授業での個別の学習支援

→放課後補充学習での個別支援及びその効果の分析・評価



その他

- 理科授業実践、理科授業の補助
- 学校行事の運営補助



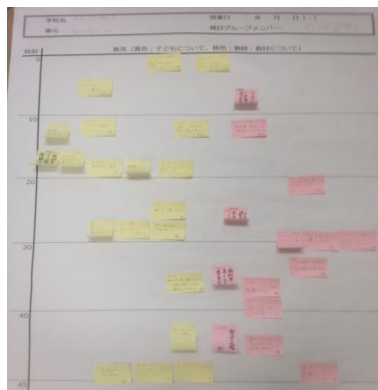
教科教育・学級経営実践コース 桐生研究室(理科センター)

本支援はコア・サイエンス・ティーチャー（略称CST）養成プログラムの活動も兼ねています。CSTとは、指導主事や地区理科教育センター協力員などとして小・中学校で自ら教育実践を行うとともに、研修会や教材開発で中心的な役割を果たすことなどにより、地域の理科教育の質を向上させる教員です。桐生研究室では、現在2名のCST養成プログラムの受講者が在籍し、複数のOBがCSTとして活躍しています。

- 要望**
1. センター研修への支援
 2. 新学習指導要領を見据えた指導計画への支援

1. 授業公開に学ぶ研修会

授業公開研修で授業検討会の進め方を提案する。参加者の授業検討会での発話や付箋紙の分析を通して質的評価を行う。

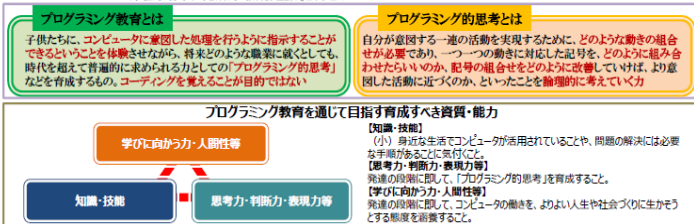


2. 理科におけるプログラミング教育研修会の実施

2020年度の全面実施に向けて、プログラミング教育のねらい、理科におけるプログラミング教育の進め方、実際のプログラミング体験、計画的かつ無理なく実施していくポイント等について研修する。

小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について (議論の取りまとめ)

※平成28年6月16日「小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議
(事務局：初等中等教育局 教育課程課)」とりまとめ



こうした資質・能力を育成するプログラミング教育を行う単元について、各学校が適切に位置付け、実施していくことが求められる。また、プログラミング教育を実施する前提として、言語能力の育成や各教科等における思考力の育成など、全ての教育の基盤として長年重視されてきた資質・能力の育成もしっかりと図っていくことが重要である。

【小学校段階におけるプログラミング教育の実施例】

総合的な学習の時間	理科	音楽
自分の暮らしとプログラミングとの関係を考え、そのよさに気付く学び	電気製品にはプログラムが活用され条件に応じて動作していることに気付く学び	表現しているものを、プログラミングを通じて動かすことにより、新たな発想や構想を生み出す学び
図の作成において、プログラミング的思考と数学的な思考の関係のよさに気付く学び	図画工作	特別活動
		クラブ活動において実施

【実施のために必要な条件整備等】

- (1) ICT環境の整備
- (2) 教材の開発や指導事例の整備、教員研修等の在り方
- (3) 指導体制の充実や社会との連携・協働



教科教育・学級経営実践コース

桐生研究室

キーワード

理科教育，プログラミング教育，異学年・異校種連携，校内授業研究，アクティブラーニング，カリキュラム・マネジメント，ICT

桐生研究室の特色は、理科教育です。

しかし、理科教育にとらわれず、下記のような取組内容をキーワードに、各学校の課題解決に向けた取組を行います。

理科を中心とした教科教育

理科の授業実践
アクティブラーニング
教材研究・教材準備・先行実践の紹介
理科センターでの研修の計画・運営
プログラミング教育・ICTを活用した授業



学級経営・生徒指導

授業による人間関係作り
自尊感情・学習意欲・社会性の向上

学校の運営に関する取り組み

異学年・異校種連携の推進
カリキュラム・マネジメント提案・実践
校内研修・授業検討会の補助・運営・分析
学校行事の補助



実習内容

- * 教科は理科にこだわらず、院生の専門性と連携校の状況に合わせて、相談して決めていきます。
- * 連携校の喫緊な課題と院生の研究テーマを歩み寄りながら、院生による授業実践の提案やその分析等の実習を行います。
- * 実習における授業データは、ICレコーダーやビデオカメラおよび質問紙等を用い記録・蓄積・分析を行い、結果を連携校に返し、学会、各種研修等で成果を報告していきます。

実習形式

実習期間：9月～11月

実習日数：週2～3日間 ※学校の実態に合わせて柔軟に対応します。

お世話になった連携協力校・継続中の連携協力校

小学校（上越地域内）

・上越市立大和小学校 ・上越市立南本町小学校

小学校（上越地域外）

・新潟市立浜浦小学校

中学校（上越地域内）

・上越市立安塚中学校 ・上越市立牧中学校 ・上越市立三和中学校
・上越市立城北中学校 ・上越市立春日中学校 ・上越市立板倉中学校

中学校（上越地域外）

・十日町市立南中学校

教育委員会関係の組織

・長野県総合教育センター ・十日町理科センター・五泉市理科センター

昨年の実践例



理科授業での野外観察



教科横断的な学習
（国語＋理科）



授業検討会の分析



学校行事の補助

本年度の連携テーマ

- 理科授業実践による進んで学び、意欲的に表現する子どもの育成
- 授業研究の分析と小中一貫教育推進に向けた支援
- センター研修の運営補助と効果の分析

< ご連絡先 >

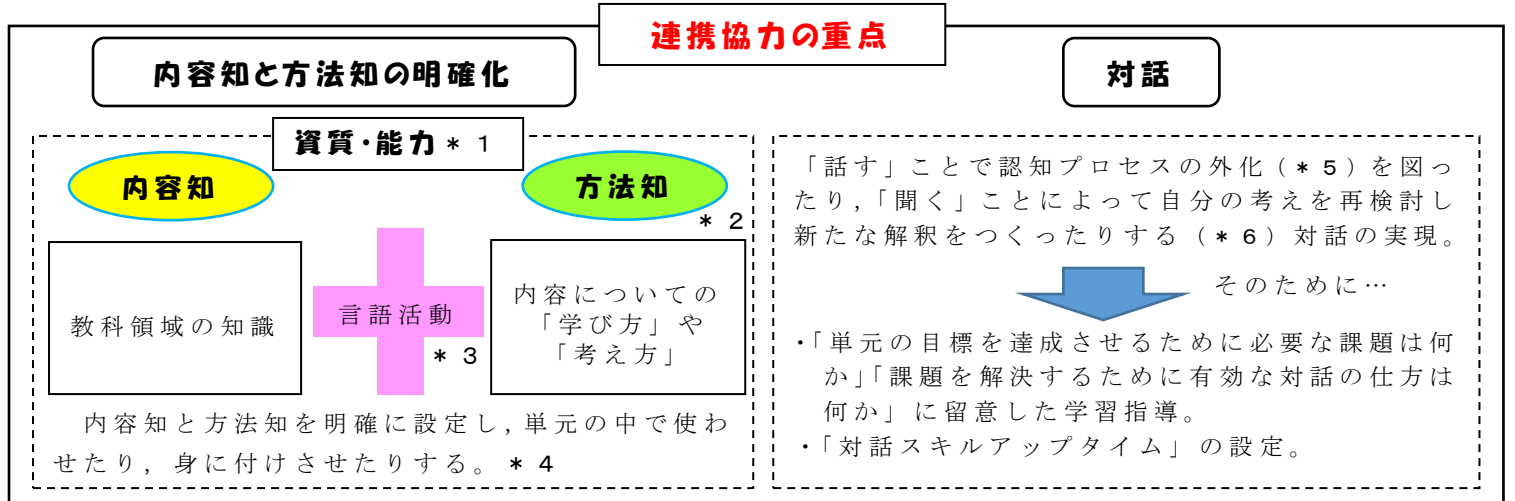
桐生徹 Email : kiryu@juen.ac.jp

教科教育・学級経営実践コース

佐藤多佳子 研究室

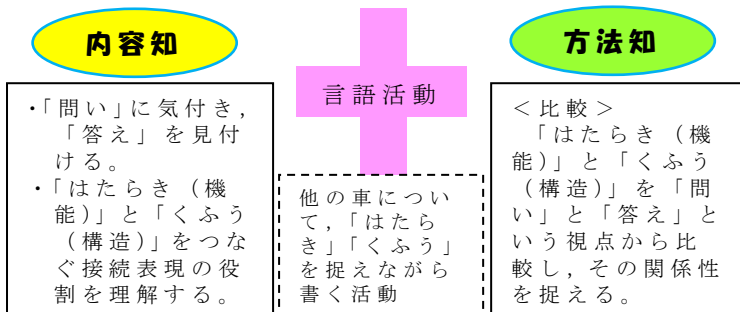
連携協力テーマ
身に付けさせたい知識・考え方を明確にした単元づくり

連携協力校（上越市立八千浦小学校）の研究主題
自ら学び，確かな学力を身に付ける子どもの育成
～国語科における課題解決の過程を重視した『分かる』『考える』授業づくり～



連携協力の実際

1年生の実践「くらしをまもる車」



成果

教材文には登場しない車の学習においても「はたらき」「くふう」を捉えることができていた。

<バスの「はたらき」>

児童S：行きたいところに送ってくれる。

児童R：人を連れていく。

<バスの「くふう」>

児童A：車が長くなっている。

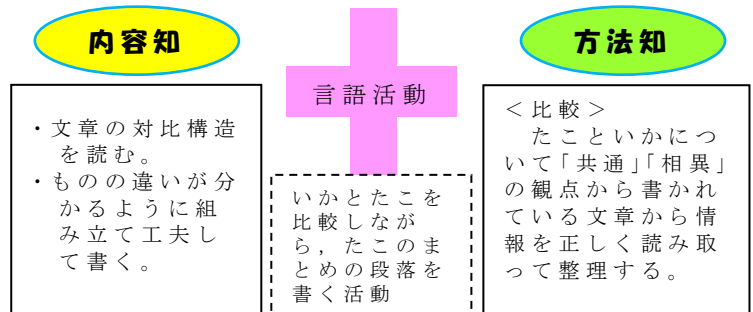
児童K：手すり。お年寄りが大変だから，ちょっとでも助けるためにある。

課題

「くふう」の意味理解や「はたらき」「くふう」の関係性を捉えるところまでは至らなかった。

挿絵等からイメージをもたせた上でテキストと結びつけること，児童の言葉で「くふう」を換言する等の手立てが必要であった。

2年生の実践「たこのすみ いかのすみ」



成果

対比しながら文章を読むことで，いかのまとめの段落に対応したたこのまとめの段落を書くことができた。

<児童が書いた たこのまとめの段落>

児童R：たこは，いかみたいにはやくおよげないで，すみでてきの目からかくして，そのすきに岩などのせまいすき間にみをかいくすことができれば，にげるのです。

課題

・たこのまとめを書く際に，比較するための観点の押さえが甘く，ワークシート内に何を書くか分からない児童がいた。観点を色分けしたことや「ので」「できれば」などのキーワードとどのように対応させていくか，初めだけ全員で書いてみるなどの手立てが必要であった。

- * 1 「対象が変わっても機能する」ような，「教科等の質の高い知識やその学び方に関するメタ認知，ものの見方・考え方を含む総体」国立教育政策研究所(2015)『平成26年度プロジェクト研究調査研究報告書 資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～』
- * 2 思考の1つの側面である論理的思考「比較・分類・関係付け・具体と抽象等」佐藤多佳子(2013)に重点をおく。
- * 3 内容知や方法知を活かす言語活動の取り入れ方「Authentic Learningの要素」石井英真(2015)に留意する。
- * 4 「方法知は内容知をより深く学ぶことで使えますし，そうすることで方法知自体も育てられます。このらせんの資質，能力教育の一つの目標です。」前掲，国立教育政策研究所(2015)
- * 5 溝上慎一(2015)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』
- * 6 松本修(2015)『読みの交流と言語活動 国語科学習デザインと実践』

教科教育・学級経営実践

佐藤多佳子 研究室

支援テーマ:文学的文章の学習デザインにおける「深い学び」と対話



【「深い学び」を支える国語科学習デザインと対話】

○「深い学び」を具現する国語科学習デザインの要件

- 「ア. 探究的な課題（単元レベル）」「イ. 論理的思考を促す課題（1時間レベル）」
- 「ウ. 思考プロセスを説明する活動、思考のモニタリングや修正する機能をもった対話」
- 「エ. パターンや原理を含む教材」「オ. 思考ツールとしての教具」

上月・佐藤（2017）「対話学習が「学習への深いアプローチ」に与える影響」

○理解状況をフィードバックする機能をもたせた対話

確認や質問、説明活動といった、いわば受け取り手が話し手に対して自らの理解状況をフィードバックすることによって受け取り手の静的な認知状態から脱却し、理解を促進したりする。

田島・森田（2009）「説明活動が概念理解の促進に及ぼす効果—バフチン理論の「対話」の観点から—」

中川研究室, 富田（2015）『児童・生徒のためのモニタリング自己評価法：ワークシートと協同学習でメタ認知を育む』

3年生の実践「三年とうげ」

〈学習デザインの概要〉

時	学習過程
1	・既有知における世界の昔話、日本の昔話、物語では、どのような違いがあるかについて記述する。 ・昔話の観点「昔話クイズ」をすることを確認する。①登場人物②方言や今ではあまり使われていない表現、リズム、繰り返しの表現等③起承転結の簡単な構成④昔話のメッセージ（教訓、伝承、昔の人のものの見方）（要件ア）
2	○「三枚のおふだ」（日本：新潟の昔話）を読み、教訓や構成についてまとめる。（要件エ, オ）
3	○「三枚のおふだ」の教訓について交流する。（要件ウ） ・〈問い〉「三枚のおふだ」のメッセージは何か。（要件イ）
4	① ○「三年とうげ」（世界：韓国の昔話）を読み、教訓や構成についてまとめる。（要件ア）
5	○「三年峠」の教訓について考える。 ・〈問い〉ぬるでの木のかげで「えいやら〜」と最後に歌ったのは誰かについて考える。（本時）（要件イ, エ, オ）
5	○「昔話題名当てクイズ」の準備を行う。（要件オ）
6	・用意した昔話を複数選択し、ワークシートを基に読む。
7	○「昔話題名当てクイズ」を行う。 ・「昔話題名当てクイズ」を行う。（要件ア） ・日本の昔話、世界の昔話、物語の違いについて学んだことを振り返る。（要件カ）

〈連携協力の実際〉

- ◎授業実施前の2時間を用いて、フィードバックする対話の仕方を、対話の一つの方法として学習者に教授する。
- ◎数名抽出した学習者について、「三年峠」の教訓についてワークシートの記述と〈問い〉の後のワークシートの記述の変化について分析する。
- ◎〈問い〉における学習者の発話プロトコルから解釈の生成過程や変化の過程について順を追いながら分析していき、「深い学び」がどのようになされているかについて考察する。

名前	受け取った教訓（メッセージ）	その理由
Sr	いい場所だからって油断してはいけない。けれども何度でも転べば長生きできる。	□で囲んだところから○でかい言い伝えがある。
Sm	冷静に考えるといい考えが思いつく。	おじいさんはころんでしまったんだけど、トルトリがみまいにきてアドバイスをして、おじいさんは行動を表したから。

名前	〈問い〉に対する解釈	受け取った教訓（メッセージ）：交流後
Sr	神様	言い伝えをあまり信じすぎるといメッセージ
Sm	おじいさん（の心の中）	人を信じるのが大事だと思う。

〈成果と課題〉

対話活動において自分自身の理解状況をフィードバックする活動によって、相手や自分自身に新たな根拠が導入されたり、自らの読みをモニタリングしたりする発話がみられた。しかし、フィードバックする活動そのものの有効性を学習者が認識していないと、対話が形式化し、かえって学習が阻害されてしまうということも考えられる。また、深い学びの在り様は個々によって様々であるため、その学びのプロセスそのものを詳細に分析せざるをえず、検討できた様相の事例は非常に少数であった。



妙高市立新井中学校

1 連携協力校の研究主題 「高め合う」生徒の育成 生徒が意欲的に学習活動に取り組める学級経営・授業展開の工夫

2 国語科の重点目標 学び合う学習を通して、生徒の言葉を大切にする態度と国語学力の向上を図る

→中教研国語部 「テキストにこだわる課題で対話的な学び合いを促進し、汎用的な言葉の力を育てる」

3 連携協力テーマ Authentic Learning*をめざした学習デザインの検討

4 連携協力の方向

支援テーマの理論的背景

Authentic Learning* (真正の学習・共同的で深い学習)

【石井英真(2015)『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』「学校外や将来の生活で遭遇する本物の、あるいは本物のエッセンスを保持した活動」を「真正の学習(authentic learning)」と呼び、『知識を活用したり創造したりする力は、(中略)学習者の実力が試される。思考しコミュニケーションする必然性のある文脈において、共同的で深い学習(真正の学習)に取り組む中で育てられます。そして、「真正の学習」を通して、その分野の知識や思考力、さらにはその分野の本質(より善い活動)を追究しようとする態度は、一体のものとして育てていく』

①思考しコミュニケーションする必然性のある文脈 ②共同的で深い学習(真正の学習)にする対話の設定

(a) 自主的・自律的に関わり合う学習の場を作る。

(b) 質の高い対話

(c) 振り返り

問い

3つの対話の往還

【鶴田清司・河野順子(2012)『国語科における対話型学習の授業を作る』明治図書】

学習材との対話(個)

他者との対話

自己内対話

対象世界＝学習材＝テキストとの対話
をすることで、既知の知識・体験が発動
して、その学習材とかわかってくる。

○初めの思考

他者との対話で、自分と異なる考えを
見出し、自身の考えを揺さぶられ、思考
の流れが言葉によって外に出ること。

○思考の表出

自己の既知知識を再構成して、新たな
知識を生み出すこと。

○思考の再構成

3つ(テキスト・他者・自己)の対話を促す
活動で「使える(条件的知識)」に導く。＝共
同的で深い学習

【三宮真智子(2008)『メタ認知 学習力を支える高次
認知機能』北大路書房】
メタ認知知識の方略

「知っている(宣言的知識)」

「わかる(手続き的知識)」

「汎用的な言葉の力」
になる

「使える(条件的知識)」

方策② ホワイトボード等を使ったグラフィックで、思考の可視化をし、メタ認知を促す。

方策③ 自分の考え・思いの変化の
自覚化と意識化を図るまとめと振り返り
で、学習の定着と「使える(条件的知識)」を確認する。

【井上尚美(1998)『思考力育成への方路
—メタ認知・自己学習・言語論理—』明治
図書】

振り返りは、学びの自覚を促すメタ認知
として有効であり、習得した思考方略を武器
として他の場面に転移させる契機となる。
獲得された方略の知識が、他で再生さ
れ、再固定化されると、その方略は定着する。

5 実際の授業

○期間：平成 29 年 10 月 ○検証方法：生徒の発言をプロトコル、ホワイトボードの記述、ワークシートの記述、ビデオカメラとデジタルカメラで撮影した授業の様子を分析する。

方策①身に付けたい「汎用的な言葉の力」を明確にした課題設定(問い)をする。

方策②ホワイトボード等を使ったグラフィックで、思考の可視化をし、メタ認知を促す。

方策③自分の考え・思いの変化の自覚化と意識化を図るまとめと振り返りで、学習の定着と「使える(条件的知識)」を確認する。

2 学年「走れメロス」～身に付けさせたい汎用的な言葉の力「読み手としての多様な姿勢」～

題名を読み解き、考える学習を通して、まずは「自分なりの読み」ができる力が育て、さらに、他者との意見交換を通して、自分の考えを表現する力や、視点を変えて読む力を身に付けさせることができると考えた。

『走れメロス』は誰の声で聞かえるか? → 「自分の読みが伝わるサブタイトルを完成させよう」

自分の考えを図表にまとめる。→ 図表を示しながら、考えを伝える。→ 新たに得た考え方や視点を図表に書き加える。→ 再考する。

意見交流によって、考えが変わったり、視点が広がったりしたかを振り返る。

3 学年「作られた『物語』を超えて」 身に付けさせたい汎用的な言葉の力「対象を評価しながら読む」

情報との関わり方の段階を「そのまま受け入れる」→ 「情報に疑問をもつ」→ 「情報を吟味したり検討したりする」→ 「情報を評価する」と捉え、このステップで評価しながら読む力を身に付けることができると考えた。

疑問をもって読もう → 「根拠に基づいて筆者の思いを推し測って読もう」 → 「批評文を書こう」

ホワイトボードに話し合いによって導かれた疑問の解釈を書き、黒板に貼る。

他者の考えを参考にしながら自分の考えを見直す。→ 自分の考えに広がりや深まりなどの変化が感じられたかを振り返る。

○テキストには内容的価値と言語学習材料としての価値がある。まず「汎用的な言葉の力」を習得するための(言語学習)材料的価値としてテキストを捉えたことで、活動のねらいが焦点化され、生徒に汎用的な言葉の力の意識を付けることができた。結果、主題理解等による内容的価値にも近づくこともできた。STEP1「テキストの言語的特徴の分析と把握」STEP2「どんな言葉の力をつけられるか」という教材研究 STEP3「テキストにこだわる課題の設定」という学習デザインへのアプローチの効果も捉えられた。

教科教育・学級経営実践コース 榎原研究室

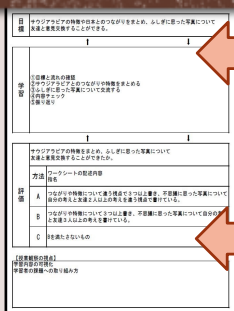
本年度から上越教育大学に赴任しました。榎原です。次年度から研究室として学校支援プロジェクトへ参画させていただきます！現場での経験、院生としての学校支援プロジェクトに参加した経験を生かして学校の一助となれるよう尽力します！ゼミ生がいないので自己紹介させていただきます。



- 氏名 榎原 範久（さかきばら のりひさ）
- 所属 上越教育大学 教職大学院 教科教育・学級経営実践コース
- 職歴
 - ・愛知県公立中学校教員，愛知県公立小学校教員，日本人学校教員（カタル），上越教育大学教職大学院派遣院生 等
- 現場での主な経験
 - ・生徒指導主事，研修主任，教科指導教員，校務主任 等
- 学校支援プロジェクトの経験
 - ・院生として上越市立高志小学校にて2年間お世話になりました
- その他
 - ・3児のパパ，辛い物好き，ゴルフが上手になりたい

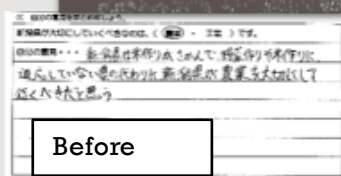
学校支援プロジェクトでの連携項目

アクティブ・ラーニングの授業づくり，教師支援



- ・水落研究室・阿部研究室と連携した授業実践
- ・目標と学習と評価の一体化を目指したALの授業提案，授業分析

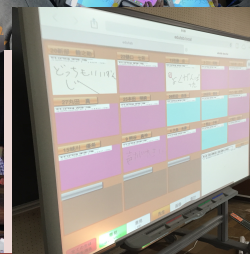
社会科を中心とした思考力・判断力の向上



- ・「思考ツール」の活用提案、模擬授業
- ・意思決定型の授業デザイン提案

子どものICT活用 教師のICT活用指導力

- ・ICT活用実践
- ・教員のICT活用指導力の向上のための補助
- ・学校のICT環境整備



生徒指導

- ・生徒指導支援
- ・情報モラル指導



教科教育・学級経営実践コース 松井研究室

妙高市立新井北小学校

M2：江川 紗恵，神田 章，小松崎 真実
アドバイザー：松井 千鶴子

【 研究テーマ 】

教師のカリキュラム・マネジメントの力量形成に関する研究
—生活科・総合的な学習の時間の授業後の省察をもとに—

【 学校支援プロジェクトにおける支援要請 】

- 総合的な学習の時間のカリキュラム構想・改善への支援
- 総合的な学習の時間を充実させるカリキュラム・マネジメント
- 総合的な学習の時間，教科等の指導や生徒指導等への支援



【 研究の目的 】

生活科・総合的な学習の時間の授業後に，教師に省察を促し，その省察内容を分析・考察することによって，教師のカリキュラム・マネジメントの実際を明らかにするとともに，その力量を形成する一助となることを目的とする。

【 活動の概要 】

2年生

「みんなでチャレンジ！なかよし畑&なかよし探検隊」

野菜栽培や自然体験活動を通して，地域の自然のよさなどを感じ取るとともに，周りへの感謝の気持ちをもち，自分自身の成長に気づく。



3年生

「たんけん！発見！ 大好き わたしのまち 妙高」

妙高の自然，人，文化や歴史などとふれあうことを通して，自分たちの住んでいる地域のよさに気づき，愛着や願いをもつ。



4年生

「探検！発見！ ふれあい 妙高の自然 大調査！」

自然体験活動や調査活動を通して，妙高の自然が抱える問題に気づき，自分たちにできることを考え，実践していく。



【 研究の概要 】

●教師との授業リフレクション及びインタビュー

生活科・総合的な学習の時間の授業後に，教師とのリフレクション及びインタビューを継続的に行い，本時や次時以降の展開について省察を促す。

●担当学年・学級の教育活動への支援

院生が担当する学年・学級（2・3・4学年）の学習指導及び生徒指導，その他学級経営に関わる教育活動全般の補助・支援を行う。

【 研究の方法 】

① 授業観察



② 院生によるリフレクション



③ 教師とのリフレクション 〈視点〉・本時の展開について ・次時以降の展開について



④ 省察内容の分析・考察

村上市立さんぽく南小学校



M1：徳富 大吾
アドバイザー：松井 千鶴子

【研究テーマ】

「郷」でつくる総合的な学習の時間における教師の地域連携への意識に関する研究

【連携協力校の教育目標】

かしこく つよく ともにのびる子
～「ここで生きる」自信と誇りと実力の育成～

【学校支援プロジェクトにおける支援要請】

- 総合的な学習の時間を中核にした教育課程の編成への支援
- 地域の特色を生かし、地域と共に歩む学校づくりへの支援
- 総合的な学習の時間における地域と連携した学習活動の研究支援



【社会に開かれた教育課程】

これからの社会を創りだしていくために
社会や世界に
向き合い、かかわり合いながら
自分の人生を切り拓いていく
資質・能力を育成



実社会と
つながりのある
テーマ

地域・社会の
課題解決に
参画・協力

地域・社会の
人的・物的資源
との連携

資質・能力
を
育成・発揮

* 平成28年「次世代の学校・地域」創生プランを参照

【村上市の郷育と教師の地域に対する意識】

地域の子どもの

地域の人々で育てる

「『ここで生きる』ことに自信と誇りを持ち、自らの進路を切り拓いていくことのできる風力（風力・風力・風力・風力）を備えた子ども」の育成

地域の子どもの地域の人々で育てる教育活動の推進

学校教育

連携・協働

地域等での子どもたちの活動

社会教育 公民館活動 生涯学習 生涯学習 生涯学習 生涯学習

乳幼児の保育・教育

家庭教育

郷育会議

子どもたちへの思いや思いの共有

関係機関・団体どうしの情報交換・情報共有、連携・協働活動の推進

地域ぐるみで子どもたちを育む取組の推進

地域活用型教師

地域参加型教師

地域理念型教師

地域創造型教師

* 第2次村上市総合計画（計画期間 平成29年度～平成33年度）及び著書「持続可能な地域づくりと学校—地域創造型教師のために—」を参照

【研究の概要】

【研究の目的】

「郷」でつくる総合的な学習の時間のカリキュラム・マネジメントの過程で、「地域学習材の価値」「地域連携のあり方」などの視点から教師の地域連携への意識を調査・考察する。

個々の教師との対話リフレクション

山北の2つの小学校の「人・もの・こと」の地域材を活用した総合的な学習の時間に参加し、子どもの学びの姿を観察・記録する。そして、その観察・記録をもとに担任や活動に関わった地域の方々と対話リフレクションを行う。そして、そのリフレクション後の教師や地域の人たちの地域連携への意識を調査・考察を行う。



全体での協働によるカリキュラム作成

視覚的カリキュラム表を活用し、統合する学校の総合的な学習の時間を中核にした教科横断的なカリキュラムを協働的に作成していく。作成の中では、「地域学習材の価値」「地域連携のあり方」などの視点で、これまでの実践をふり返り、地域の特色を生かし、地域と共に歩む学校づくりにつなげていく。そして、その過程での、教師の地域連携に対する意識を調査・考察を行う。



教科教育・学級経営実践コース

松井研究室

上越市立大町小学校

M2：鳥島裕美，惣島大樹，針山美稀
M1：高橋栄介，小原大輝
アドバイザー：松井 千鶴子

【 研究テーマ 】

総合的な学習の時間における探究的な学習の理論と実際

【 連携協力校の校内研究主題 】

「本気」が生まれる学校づくり（4年次）

—探究的な学習を意識した「わくわく学習」の構想・展開—

【 学校支援プロジェクトにおける支援要請 】

- 子どもも教師も「本気」になって取り組む「わくわく学習」（生活・総合）にするため、探究的な学習を意識した活動構想・展開を推進
- 「本気」の子どもの姿を幅広く見取り、それを教師の意識や取組と関連させ、理論的に意味付け
- 「わくわく学習」に関する実践知を共有する校内研修への参画

【 研究の目的 】

連携協力校の研究主題や支援要請に合わせ、探究的な学習を意識した生活科・総合的な学習の構想・展開を支援する。

【 研究の概要 】

- 探究的な学習を意識した活動構想の協議
- 探究的な学習を通した子どもの様子を観察・記録し、そのデータを担任に提供
- 記録したデータから、探究的な学習の要件、子どもの学びの変容、教師の意識の関係性を構造化・理論化

【 活動の概要 】

3学年「グッと！朝市」



朝市へ繰り返し出かけ、魅力ある人・もの・ことと触れ合ったり、季節を感じるもの・ことを探したりする活動を通して、高田の町やそれぞれの季節のよさについて自分なりの考えをつくっている。
2学期は、情報の整理・分析を通して、思考を統合・抽象化していく活動を支援する。

5学年「ここ 生きる」



高田地区と三和地区に入り、そこで見聞きたり、その地区の伝統的な文化について触れたりする活動しながら、両者のよさを実感している。
2学期は、年間を貫く活動の構想及び、探究的な見方・考え方を働かせる活動を支援する。

平成30年度 大町小学校グランドデザイン

教育目標 思い合う子 工夫する子 やりぬく子

重点目標 本気になって取り組む子



教科教育・学級経営実践コース

松沢研究室

【チーム数】

平成	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
チーム数	0	2	3	2	3	3	4	4	2	2	4

【テーマ例】

平成 29 年度：子どもの学びを確かにする算数科授業づくり

Web 診断問題を活用した授業改善

算数・数学

平成 28 年度：「単元構成」と「振り返り」に着目した算数授業づくりの支援

中学生のソーシャルメディア利用における情報モラル授業プログラム

—社会資源の活用と読み物教材に着目して—

平成 27 年度：生徒が主体的に取り組むための授業改善(岩崎チームとの合同)

生徒による振り返りを視点とした授業改善の取組と成果

—生徒の学習感想を分析する枠組みの開発とその実践—(岩崎チームとの合同)

授業改善

算数科における子ども主体の授業の実現(岩崎チームとの合同)

グループワークを中核に据えた学習デザイン・教材アレンジ

教材アレンジ

平成 26 年度：数学科における授業力向上に向けた取組—若手教師と共に—

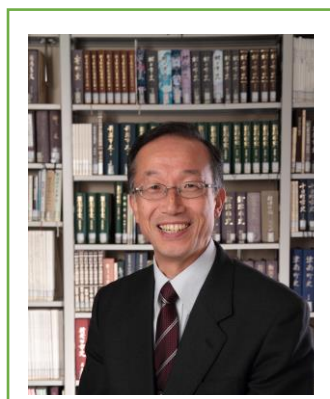
主体的に取り組む生徒の育成—よりよいグループ活動を目指して—(岩崎チームとの合同)

数学的な思考力・表現力を育て、学意欲を高める数学教育の実現に向けた学校支援

プロジェクトの取組と成果(岩崎チームとの合同)

算数科における思考力・表現力を育む授業づくり

【アドバイザーの自己紹介】



中学校勤務 22 年間（講師 1 年・教諭 17 年・教頭 4 年）

指導主事 4 年

大学勤務（任期付き 3 年、その後平成 20 年より教職大学院）

教科教育・学級経営実践コース

水落研究室・阿部研究室

～公立小学校における連携の事例～

要望

- ・授業の**目標**の指示や**振り返り**の方法は？
- ・子ども自身が振り返りやすい**評価規準**は？
- ・ICTやホワイトボードで伝え合う活動を活性化
- ・何のために話し合い、伝え合う？
- ・伝え合うことによる**課題解決**
- ・**目標達成の検証方法**

目的

- ・「**目標と学習と評価の一体化**」を柱とした**学び合いの授業デザイン**
 - 児童の主体的・対話的で深い学びを促進
 - 学ぶ楽しさや学級集団を作れる支援
 - 分かる喜びを実感できる授業の実現
- ・**ホワイトボード・ミーティング®**や**プロジェクト・アドベンチャー**等を取り入れた実践
 - 温かな人間関係を土台とした学級集団づくり

クラス全員が一つになる プロジェクト・アドベンチャー

プロジェクト・アドベンチャーの目的は、「アドベンチャー」のもつ様々な特性を生かし、心の豊かさを育むこと。

→課題解決型体験学習法として、教育の分野で幅広く使われている。

○みやぎアドベンチャープログラム研究会:「クラスの絆が深まる楽しい活動集」, 2012

目標と学習と評価の一体化 に基づく授業

主体的・対話的で深い学び
(アクティブ・ラーニング)の視点
からの学習過程の改善

目標と学習と評価を教師が学習者へ事前に明示した「**学び合い**」の授業を行うことで、**目標と学習と評価が一体化**し、学習者が自主性をもって学習に臨むことができる

○水落芳明:「理科実験場面における言語情報と『形態情報』による評価のフィードバック機能に関する研究」, 2011

スムーズな情報把握と課題解決 ホワイトボード・ミーティング®

ホワイトボードで参加者の意見やアイデアを効率的、効果的に集める会議の進め方

→参加者が役割分担しながら目標に向かう

→参加者一人一人がエンパワーされながら会議を進めることが可能

○ちよんせいこ:「ホワイトボード・ミーティング®検定試験公式テキスト」, 2016

▷▷体育科 (2年生)

プロジェクト・アドベンチャーの考え方を取り入れた授業デザイン

→子どもたちの**自己肯定感**や**人間関係の向上**を図る。



▷▷授業相談・提案 (5年社会・3年国語・2年算数)

「**目標と学習と評価の一体化**」を柱とした**学び合いの授業デザイン**

→児童の**主体的・対話的で深い学びの促進**

→学ぶ**楽しさ**や**分かる喜び**を実感できる授業の実現



▷▷全校ほととタイム ▷▷各教科での活動

互いに伝え合う活動等を取り入れた実践

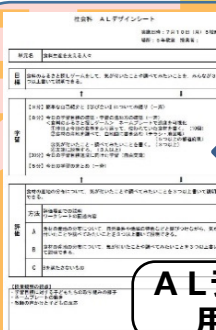
→友達同士の**温かな人間関係**を土台としたよりよい学級集団づくり



院生通信による情報発信



アセス・Q-Uによる実践把握



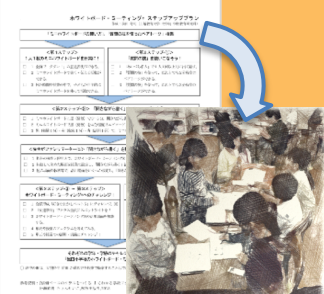
ALデザインシートを 用いた授業実践

臨床教科教育学会全国大会発表

- 「**アクティブ・ラーニングデザインシート**」の提示による**目標・学習過程・評価規準**の教示が学習者の学習に取り組む態度に与える効果に関する事例的研究
- ホワイトボード・ミーティング**の授業における効果的な活用方法の検証
- 学卒院生と現職院生との協働**が現職院生の学びに与える効果の検証
- プロジェクト・アドベンチャー**の与える効果に関する事例的研究



プロジェクト・アドベンチャーの実践



ホワイトボード・ミーティング®の実践

教科教育・学級経営実践コース 水落研究室



水落研究室に興味を持った方、
もっと知りたい方はこちら

※水落研究室のHPでは、これまでの
ゼミの活動やOBの成果などを見れます。
こちらをご覧ください。
アドレス<https://roomofmizuochi.jimdo.com/>



協働 バランスのとれた研究室メンバー構成！

- 学部生 3年次 1名
4年次 4名
- 院生 1年次 5名
2年次 5名
- 博士課程 3名

年次毎の横のつながり
→お互いを高め合う存在・協力し合う存在
研究室内の縦のつながり
→多様な視点や違った立場による高め合い



【学校現場】連携協力の際、教職
経験のない学生だけのチームと
うまく連携できるだろうか...

【学部生】卒業研究や教員採用試験を
同じ学年の仲間と協力して乗り越えて
いけるだろうか...

- 学生、学卒院生 11名
- 現職院生、教職経験有り 7名

- ・現職院生と学卒院生、学部生で組織した
プロジェクトチームで連携協力が可能に！
- ・学校現場の課題を理論的な視点と実践的な
視点をもって協働的に取り組む！

- ・卒業研究を経験した学卒院生や教職経験の
ある仲間と見通しをもって研究に取り組む！
- ・教員採用試験の対策や採用後の教員現場に
対応した準備をより実践的に学ぶ！

理論と実践の往還

【校内研究など】
手立てに対して一定の成果
を感じるが、分析が感覚的
ではっきりしない。
どうしたものか。

連携
協力
にて

実践
理論
分析

連携協力校と研究室で共有

学術論文・学会発表等で
更に価値付け・意味付け

昨年度の実績

- ・飯村寧史・片桐史裕・水落芳明：「生徒中心型」の授業における問いの生成に関する事例的研究 ―課題志向性・社会志向性を視点とした検討から―，臨床教科教育学会誌，17（2），臨床教科教育学会，pp.11-20，2018.3.
- ・榊原範久・水落芳明：小学校社会科における批判的思考態度の醸成に関する事例的研究 ―四面思考シートを用いた教育実践と評価―，日本教科教育学会，pp.13-23，2017.12
- ・Kazutaka Mizukoshi, Tatsuro Furuya, Takayuki Oshima, Norihisa Sakakibara, Yoshiaki Mizuochi, Yuto Omae, Hirotaka Takahashi, Kazuhiro Yatsushiro, "Performance Analysis of edulog System", 2017 IEEE/SICE International Symposium on System Integration, Paper WeC1.2, 2017.
- ・榊原範久・松澤健彦・水落芳明・八代一浩・水越一貴：タブレット型端末を利用した同期型 CSCL による思考の可視化がディベートに参加する聞き手の学習意欲に与える効果に関する研究，科学教育研究，41(2)，日本科学教育学会，pp.85-95，2017.6
- ・大島崇行・水落芳明・榊原範久・八代一浩・水越一貴：アクティブ・ラーニングを協働的に可視化・共有化する授業観察ツールの開発，科学教育研究，41(2)，日本科学教育学会，pp.193-203，2017.6
- ・岸亮・水落芳明：顕微鏡の操作技能における自作ビデオクリップ活用による相互評価の効果に関する事例的研究，科学教育研究，41(3)，日本科学教育学会，pp.282-294，2017.9
- ・徳橋和人・水落芳明：自己モニタリングが自律的な学習態度に与える効果に関する事例的研究―アクティブ・ラーニングを促す小学校算数科の授業における学習者の変容―，臨床教科教育学会誌，17（2），臨床教科教育学会，pp.59-68，2018.3.

多くのゲストの訪問

年に1回、OBOGと集まるゼミ
を実施。それぞれの取組や活躍
を報告し、刺激し合っていま
す。



教科教育・学級経営実践コース

阿部研究室・水落研究室

要望

- ・素直で真面目な生徒が多いが、受け身なため、意欲的に学習に取り組んでほしい
- ・小規模であるがゆえに人間関係が固定化しているため、誰とでも関わってほしい

目的

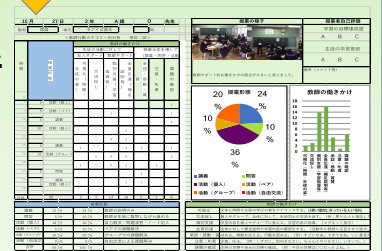
- ・授業を通しての人間関係の構築を目指す
- ・目標と学習と評価の一体化による授業デザインの実践、提案を行う

理論

中央教育審議会(2016)は、主体的・対話的で深い学び（**アクティブ・ラーニング**）の視点からの学習過程の改善を述べている。

水落（2011）は、「目標」と「学習」と「評価」を教師が学習者へ事前に明示した授業を行うことで、「**目標**」と「**学習**」と「**評価**」が**一体化**し、学習者が自主性をもって学習に臨むことができることを明らかにした。

大島ら（2015）が開発した授業分析シート等を活用し、先生方へフィードバックを行った。



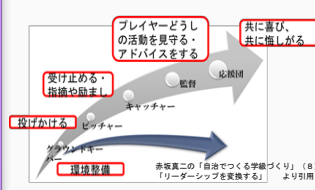
「目標」と「学習」と「評価」の一体化に基づく授業

授業分析シートを用いた授業改善

実践1

『先生サポートから友人サポート』

○「友人サポートの増加」の提案



○「生徒が主体的になる先生の言葉かけ」の提案

言葉かけの種類		予想・判断	問題の表明
要求・制止	事実の指摘	受容	質問
賞罰の予告	人物評価	非受容	追込み
感情表明	助言	その他	比較
はげまし	その他		

言葉かけのイメージ！

吉岡正樹・三宮真樹子：生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響。専門教育大学情報教育。ジャーナル44。2012。27。2007

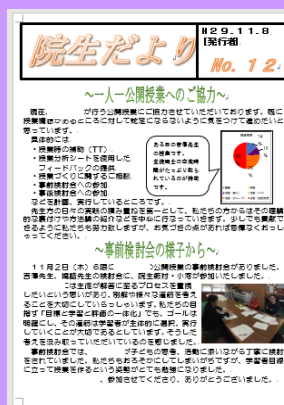


【友人同士で協力し課題に挑戦！】

- ・学習者が主体となって協働的な学習を継続的に行うことで、共同体感覚が高まった
- ・学習状況の可視化、人間関係が構築され、学習意欲の向上に影響を与えた

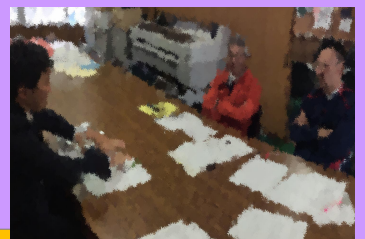
実践2

『授業づくりの連携・協力』



○授業づくり支援

- ・公開授業の協力
- ・友人サポートを生かす、協働的な学習方法



【教職員が「役に立った」と実感！】

○教師アンケートより

- ・協働作業を促す声かけができた
- ・授業を見直すことができ、授業改善につながった

学術論文・学会発表として再び理論へ

○岡崎奏斗・阿部隆幸：生徒への言葉かけと学習意欲の相関についての事例的研究～中学校体育科の授業における言葉かけの内容に注目して～

○小河悟・水落芳明：中学校社会科における交流活動での学習者の裁量と学習意欲の相関に関する事例的研究

臨床教科教育学会にて発表

教科教育・学級経営実践コース 水落研究室

要望

- ・主体的な対話が生まれる授業提案・学級づくり
- ・言語活動を取り入れ、学ぶ楽しさを実感する授業の提案

目的

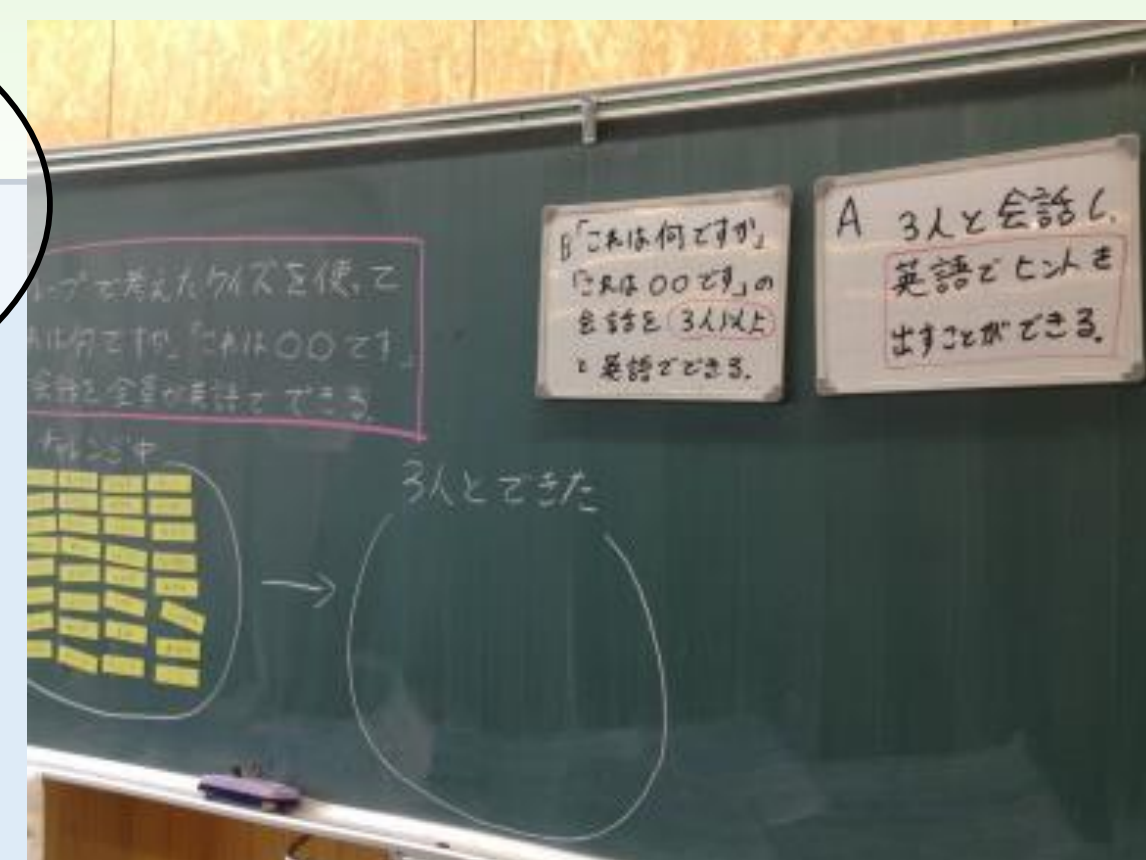
目標と学習と評価の一体化を通じた授業デザインの提案・実践。
また、言語活動を取り入れた授業実践を通して、話す必然性・聞く必然性のある授業（話したくなる授業）を目指す。

理論

中央教育審議会(2016)は、主体的・対話的で深い学び（**アクティブ・ラーニング**）の視点からの学習過程の改善を述べている。

水落（2011）は、「目標」と「学習」と「評価」を教師が学習者へ事前に明示した「学び合い」の授業を行うことで、「**目標**」と「**学習**」と「**評価**」が**一体化**し、学習者が自主性をもって学習に臨むことができることを明らかにした。「**目標**」と「**学習**」と「**評価**」

の一体化に基づく授業



【体育科 ～第2学年 マットを使った運動遊び～】

実践1

- 体育科における、自分に合ったオノマトペを子どもたち同士の関わりによって問い直すことの効果についての授業実践を行った。



オノマトペを介した児童主体の交流による 児童自身の思考面の変容・技能向上

対象児A(前転: ▲→○) 7 パン→トン→ピン→ピーン

A パン、トン、ピン、ピーン。
B なんでひざを伸ばすときにピーンなんですか？
A えーと立って。えーと足をつけるときにくるってなるから。えーとなんか、なんか回るときに足着くじゃん。ピンってそれです。

友だちからの質問により、オノマトペと具体的な動作をつなげる。

技能チェックの結果(前転)							
1	○	→	○	13	▲	→	○
2	○	→	○	14	▲	→	▲
3	▲	→	▲	15	▲	→	○
4	▲	→	○	16	▲	→	▲
5	▲	→	○	17	▲	→	○
6	▲	→	○	18	×	→	×
7	▲	→	○	19	○	→	○
8	▲	→	○	20	▲	→	○
9	×	→	▲	21	▲	→	▲
10	▲	→	▲	22	▲	→	○
11	○	→	○	23	▲	→	×
12	▲	→	○	24	▲	→	○

→24人中13人の技能の向上が見られた。

- 増井英輔・水落芳明：小学校体育科「マットを使った運動遊び」における「マイベストオノマトペ」を子どもたち同士の関わりによって問い直すことの効果に関する事例的研究，臨床教科教育学会。
- 遠山司・大島崇行・水落芳明：外国語活動における目標と評価基準を明示することが学習者の目標意識に与える効果に関する事例的研究，上越教育大学教職大学院紀要(申請中)。

学術論文・学会発表として再び理論へ

実践2

【外国語活動 ～第5学年～】

- 外国語活動にて、「目標を明示しない単元」「目標のみを明示した単元」「目標と評価基準を明示した単元」の3単元で授業実践を行った。



目標と評価基準を明示した授業による 児童の目標意識・発話の変容

単元1	S1	What fruit do you like?
	S2	フルーツ... I like なし。
	S1	あーなし。梨って何て言えはいいだろね。
	S2	I like なし。
単元3	S1	あ、無しになっちゃった、まあいいや。
	S3	What's this?
	S1	It's ...フライパン? あ、先生、これ何て読むの?
	T	It's a frying pan.
	S1	Frying pan. ※Tを授業者、Sを児童とする

「英語で会話する」ことを目標と評価基準で明示したところ、英語で話そうとする児童が見られた。

単元① 目標の明示なし			
④	インタビュー(友達に)	④	インタビュー(友達に)
単元② 目標の明示あり			
③	アルファベットを見つけていっしょにさがすのがめずかしかったです。	③	アルファベットを見つけた。英語はめずかしい。
単元③ 目標と評価基準を明示			
④	英語と全部英語にする予定です。	④	全部英語で話そう。

活動の内容や、感想等を記述している。

授業の目標を意識した記述をしている。

目標や評価基準に関連した記述をしている。

教科教育・学級経営実践コース 水落研究室

要望

- すべての児童が「分かった」「できた」を実感できる授業を目指すために、振り返り活動の充実を図りたい。
- 「ねらいと評価の一体化」した授業づくりを目指したい。
- 児童が学びをメタ認知する、振り返りの有効な手立てはどうあるべきか明らかにしてほしい。

目的

「目標と学習と評価の一体化」を通じた授業デザインを提案・実践し、また、振り返り活動の実態を分析し、児童一人一人が「分かった」「できた」と実感できる授業デザインを提案すると共に学校全体での意識化を図ることを目指す。

先行研究と問題の所在

理論

中央教育審議会(2016)は、主体的・対話的で深い学び（**アクティブ・ラーニング**）の視点からの学習過程の改善を述べている。また、文部科学省(2015)は、新しい学習指導要領が目指す姿の中で、「子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、**自らの学習活動を振り返って次につなげる**、主体的な学びの過程が実現できているかどうか」という深い学びの重要性について述べている。

水落(2011)は、「目標」と「学習」と「評価」を教師が学習者へ事前に明示した「学び合い」の授業を行うことで、**「目標」と「学習」と「評価」が一体化**し、学習者が自主性をもって学習に臨むことができることを明らかにした。

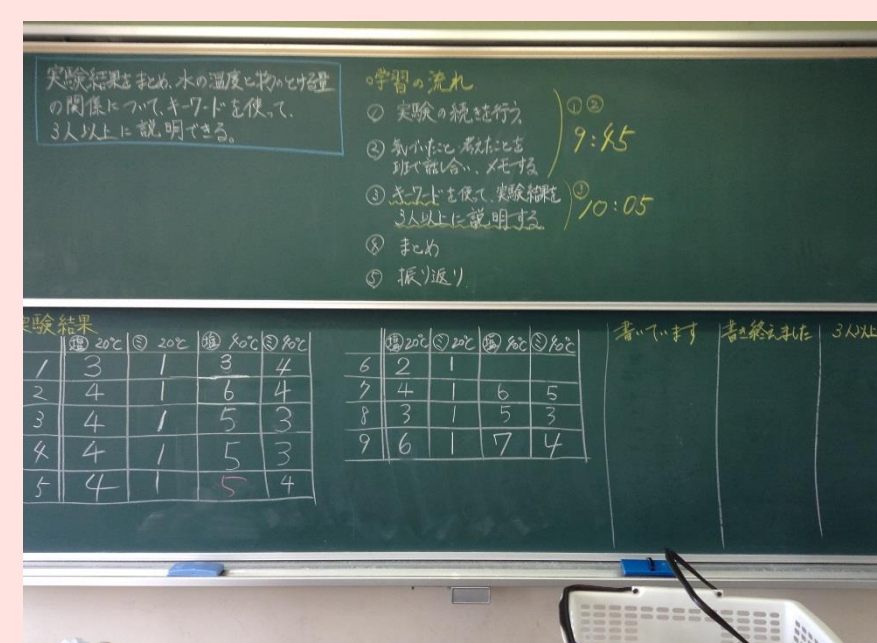
「目標」と「学習」と「評価」の一体化に基づく授業

実践

児童が学びを実感する「学習」を目指して～「目標」達成に向け交流活動を充実させる可視化の促進～

ポイント!

- 可視化＝個々の情報を結び付けたり広げたりする役割をも



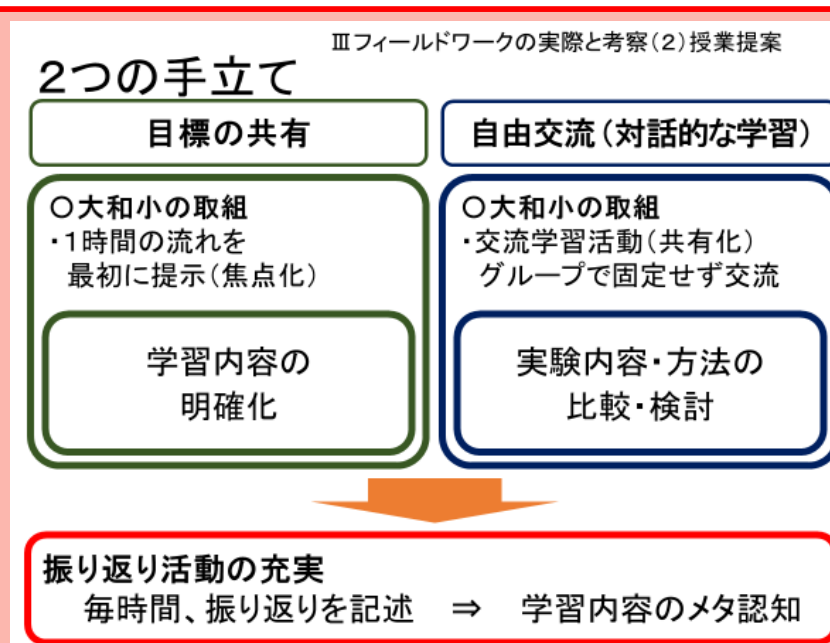
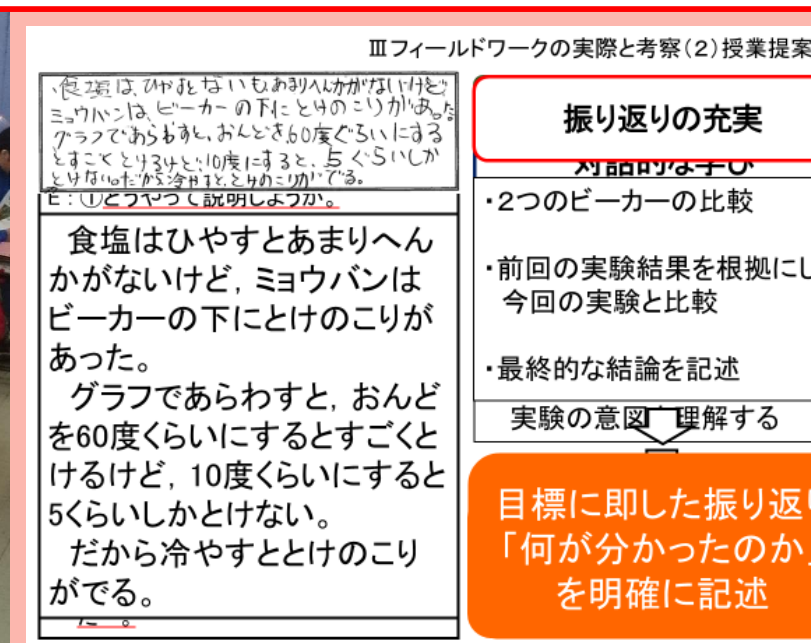
それぞれが何をしているかをはっきりさせる**学習進捗状況の可視化**



「いい考えだねえ。」等、**活動中の教師の発話による、児童の動きの可視化**

メタ認知が児童の振り返りに及ぼす効果

- 他者と協働しながら活動する理科授業の観察・実験において、どのような場面でメタ認知を行い、次の学習への意欲を高めているのかを明らかにする実践を行った。

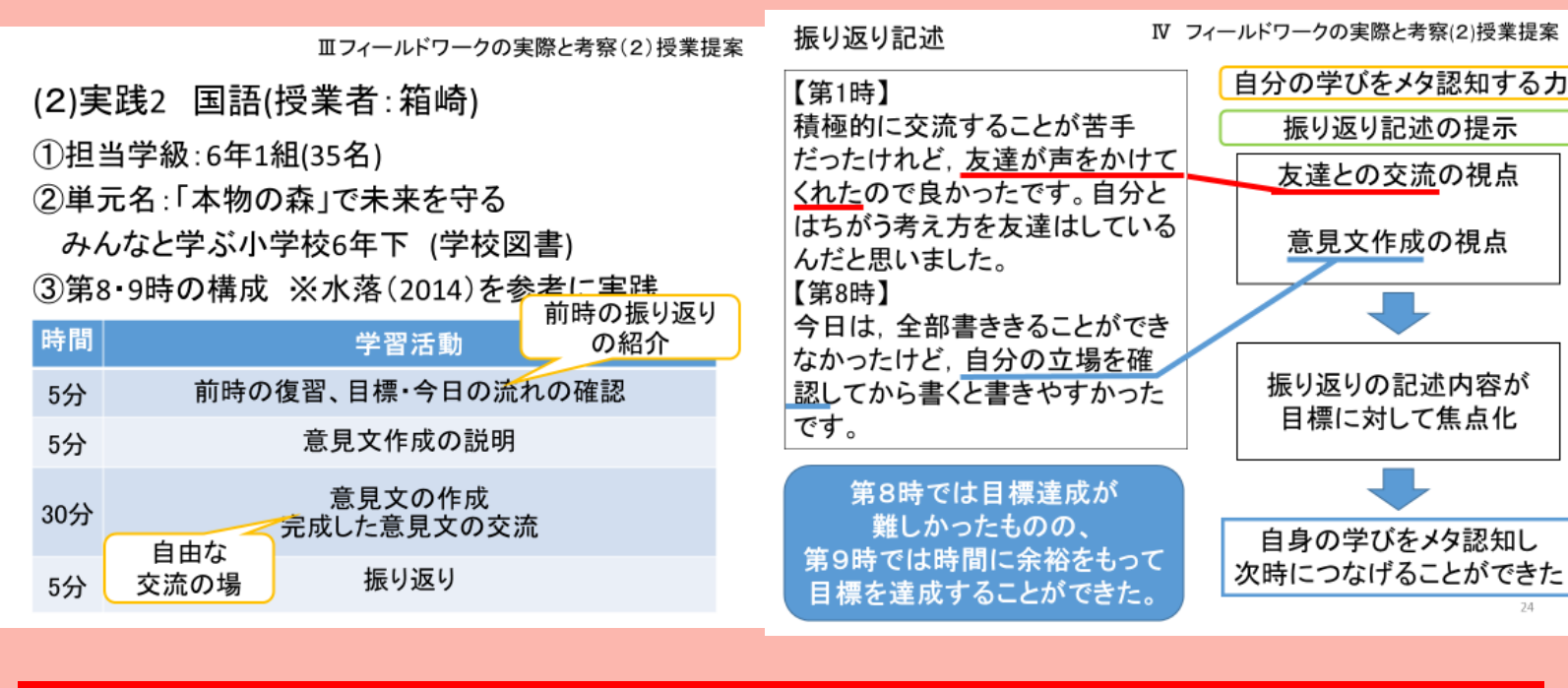


学習者同士の相互作用の働く協働学習が、振り返りにプラスの影響を与える。



自由な交流活動を取り入れた書く活動

- 国語科において学習者の自主的な交流活動が書く能力に与える影響を事例的に明らかにする実践を行った。



導入で前時の振り返りを生かすことで、児童が活動の目標を明確にして取り組む。

学会発表として再び理論へ

- 若田翔暉・水落芳明：理科授業の観察・実験場面におけるメタ認知が児童の振り返りに与える効果に関する事例的研究
- 吉田真也・水落芳明：小学校の教科指導場面を生かした情報モラル教育の指導の在り方に関する事例的研究
- 箱崎覚子・水落芳明：小学校国語科の意見文作成学習における交流の有無を子ども自身が判断することの効果に関する事例的研究

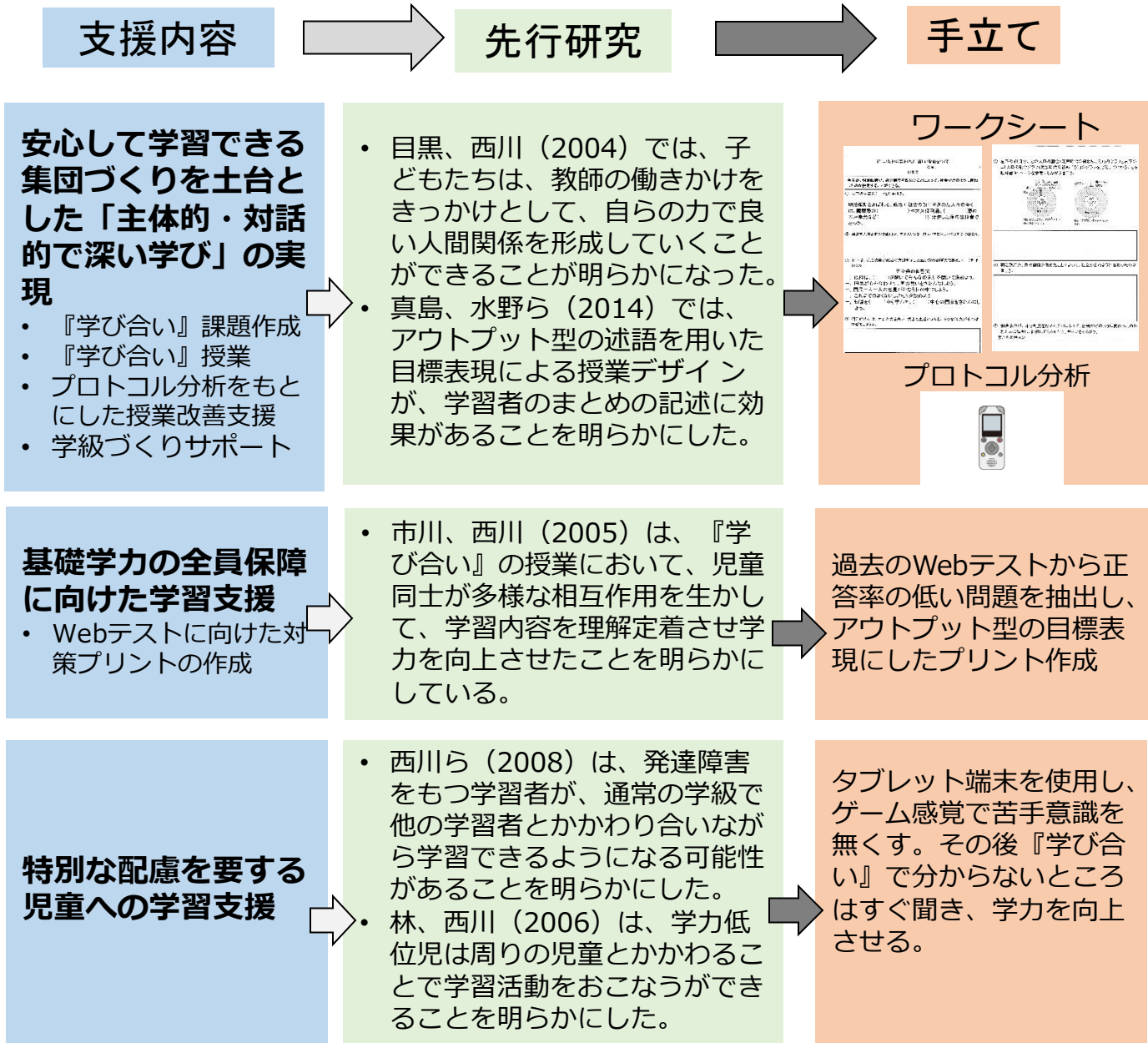
学校支援プロジェクトの成果

- ・「目標と学習と評価の一体化」した授業を通して、目標や評価の共有の重要性、振り返り活動の提案などを行ったことで、学習者の学びの質の向上・授業者の授業改善の意識に一定の効果が見られた。
- ・院生にとって、協働して学校課題を解決する取り組みを通して、教育観・授業観の広がりにつながった。

教科教育・学級経営実践コース 小学校連携チーム

上越教育大学教職大学院 西川研究室
上野佳奈恵 宇浪寿真 柿木幸栄 野口大樹 渡辺雄大

○授業サポート内容



○その他のサポート内容

- ・学級担任の先生とティーム・ティーチング
- ・宿題やテストの丸付けや作成
- ・掲示物の作成
- ・運動会・文化祭・持久走記録会・スキー教室などの参加・補助
- ・研究授業における授業記録・撮影

教科教育・学級経営実践コース

西川研究室

高等学校支援チーム 大塚哲 廣木拓 武樋走太
上野晴菜 伊藤純樹 稲葉雅也

『学び合い』（主体的・対話的な深い学び）を通じた授業改善

国立青少年教育振興機構(2014)

我が国の青少年の自己肯定感は、諸外国に比べて低く、また学年が上がるにつれて低くなるといった傾向が明らかである。

教育再生実行会議第7次提言(2015)

社会で求められる資質・能力の素地として自己肯定感を醸成していくことが重要であり、アクティブ・ラーニングへと授業を革新し、学びの質を高め、その深まりを重視することが必要。

高大接続システム改革会議「最終報告」(2016)

「学力の三要素」に対応する資質・能力を育むため「課題の発見・解決に向けて生徒が主体的・協働的に学ぶ、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を図ることが必要。

西川(2015)

『学び合い』とは、授業において主体的・協働的に学ぶ学習集団づくりを目指す学習デザインの一つであり、学習者の相互関係を重視した学習である。

『学び合い』は「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る」アクティブ・ラーニングである。

ニーズ

- 1.記憶中心の学びではなく、主体的・対話的でより深い学びへの授業改善
- 2.新しい大学入試への対応を目的とした生徒の思考力・判断力・表現力を高める授業の展開
- 3.豊かな人間性と社会性の涵養
- 4.教師の多忙感の解消

その他の支援

- ・課題テストの採点・授業参観
- ・自習監督
- ・授業の支援
- ・マラソン大会手伝い
- ・文化祭でのブース出展

授業を通しての生徒、教員の様子

- ・『学び合い』の授業を通して授業中の生徒同士の関わり合いが増えた。
- ・生徒の能力の差に関わらず授業が進められるようになった。
- ・今まで周りに関わりを持てずにいた生徒が、周りに関わりながら学習する姿が見られるようになった。

これまでの支援内容



予定と課題

『学び合い』の授業支援

研究について

- ・教員へのインタビュー、アンケート
- ・生徒へのインタビュー、アンケート
- ・インタビュー内容のプロトコル分析
- ・アンケート内容の分析

目標と課題

- ・人間関係をうまく結べない生徒に対しての支援をどのように行うか
 - ・学力の定着や向上（テストの点数等）に結び付くか
- 学力の下位生と上位生のどちらにも学力向上の成果が見られること
- ・教師が『学び合い』を継続していくための手立てを考え、提案する。

西川研究室 中学校支援

これまでの支援

・小林 篤史 ・関戸 菜々子
・福坂 昂大 ・福井 健一郎
・竹元 玖乙 ・赤澤 祐輔

- ①1年生を対象としたキャリア教育
- ②1.2年生を対象とした異学年合同アクティブラーニング
- ③3年生を対象とした放課後の受験対策
- ④その他先生方への支援
 - ・学校PR動画作成
 - ・演劇祭での台本の打ち込み など



成果

- ①個々の生徒がこれからの具体的な目標を設定することができ、学習意欲の向上につながった。また、自分自身を見つめ直すことで自己肯定感も向上した。
- ②「一人も見捨てないこと」を求め続けることにより、学力及び人間関係の向上が見られた。
- ③成績の向上

新たに取り組みたい支援

- ・授業支援
- ・小テストなどの採点
- ・生徒対象のテスト対策や受験対策



【支援テーマ】

人間関係づくりを基盤とした学校全体の生徒指導システム構築に向けての取組(4年次) —生徒指導プロジェクトチームによる取組に着目して—

支援 要望

- ・全校体制での生徒指導システムの確立
- ・人間関係づくりを基盤とした集団づくり(学級・学年・全校)
- ・学級集団づくりを基盤とした授業づくり

方法

上越市立直江津東中学校 チーム

・対象 生徒指導プロジェクトチーム

・効果測定材料

- (1) 職場風土認知尺度(教職員対象)
淵上ら(2004)が作成した職場風土認知尺度を使用する。「協働(4項目)」「同調(4項目)」の計8項目について、「今の職場にどれくらい当てはまるか」を問い、5件法で回答を求めた。
 - (2) バーンアウト尺度(教職員対象)
田尾・久保(1996)が翻訳したマラスクのバーンアウト尺度(MBI)を、八並・新井(2001)が修正したものを使用する。「情緒的消耗感(4項目)」「脱人格化(7項目)」「個人的達成感(7項目)」の計18項目で構成され、「あなたは最近6か月ぐらいの間に、次のことをどの程度経験しましたか」というように回想法によって回答するようにしている(5件法)。
 - (3) アセス(生徒対象)
栗原ら(2010)が作成したアセスを使用する。全6因子(生活満足感、教師サポート、友人サポート、非侵害的関係、向社会的スキル、学習的適応)計34項目で構成されており、「今のあなたにどれくらいあてはまるか」を5件法で回答する形とした。
 - (4) インタビュー記録・フィールドノート
教職員や生徒の意識や動きの変容を見取るための質的データとして、インタビュー記録及びフィールドノートを分析する。
- ※(1)(2)は7月下旬、11月下旬の計3回測定
※(3)は7月中、9月中、10月中、11月中の計4回測定

目的

学校全体の生徒指導システムの構築

4年次(2017)

生徒指導プロジェクトチームを核にした取組を実施することが、教職員や生徒にどのような効果をもたらすのかを明らかにする。

1年次(2014)

特別活動における取組により、教師と生徒の信頼関係を高めることを明らかにする。

2年次(2015)

特別活動における取組により、生徒間の良好な人間関係が築かれることを明らかにする。

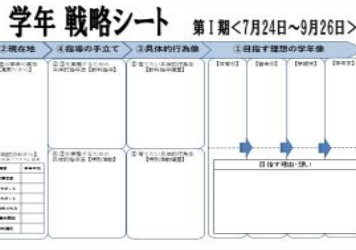
3年次(2016)

教科学習と特別活動における一貫性のある取組により、生徒の学習意欲が高まることを明らかにする。

支援の実際

I期(体育祭) II期(音楽祭) III期(いじめゼロ)

①職員研修会、学年部会への 「戦略シート」の導入



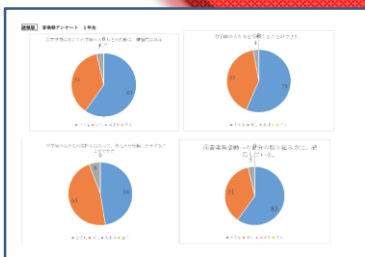
生徒の実態や目指す姿、その実現のための指導方法等について、教師間で共通理解を図る。

⑤学年部の取組についての 評価材料収集・分析

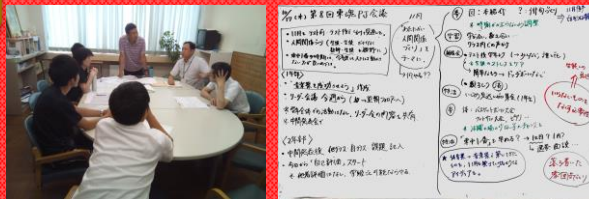
学年部で実施した取組について生徒アンケートを実施し、活動の評価材料として分析する。生徒からの評価をもとに生徒の声を聞き、改善を行う。

評価した取組

- ・1年生MVP活動
- ・1年生ホワイトボードメッセージ
- ・2年生ホワイトボードメッセージ
- ・3年生ホワイトボードメッセージ
- ・音楽祭期間(全校)の活動



②プロジェクト会議の企画・実施



毎週金曜の2時間目にプロジェクト会議を実施する。会議内容については、生徒指導主事と院生チームで検討する。

生徒指導 プロジェクトチーム

校長・教頭・生徒指導主事・生徒会主任・生徒指導担当(各学年1名計3名)・特別活動担当(各学年1名計3名)

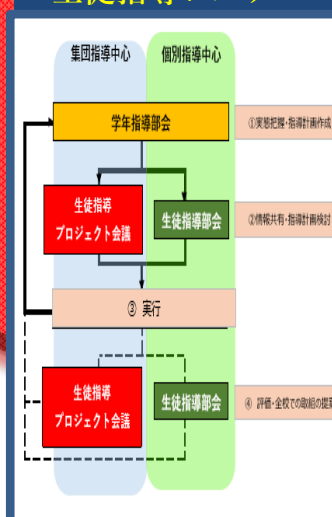
③職員、学年部への 情報共有



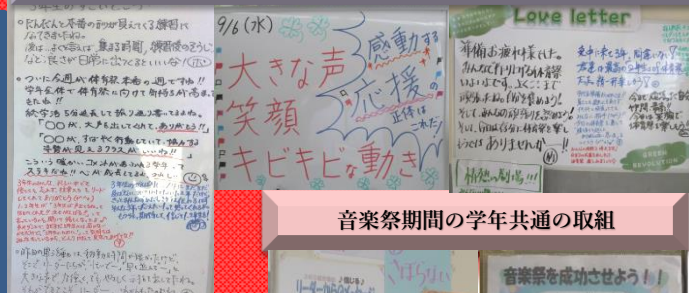
便り及びプロジェクト会議議事録を作成し、各学年部用の回覧ファイルを用いて、プロジェクト会議での情報を全教職員に共有する。

④学年部による取組の 提案・推進

生徒指導システム



先生方から生徒へのメッセージボード



音楽祭期間の学年共通の取組



主体的に学ぶ子を育成する動機づけのあり方

上越市立春日新田小学校チーム

目的

主体的に学ぶ子を育成する動機づけのあり方を明らかにする

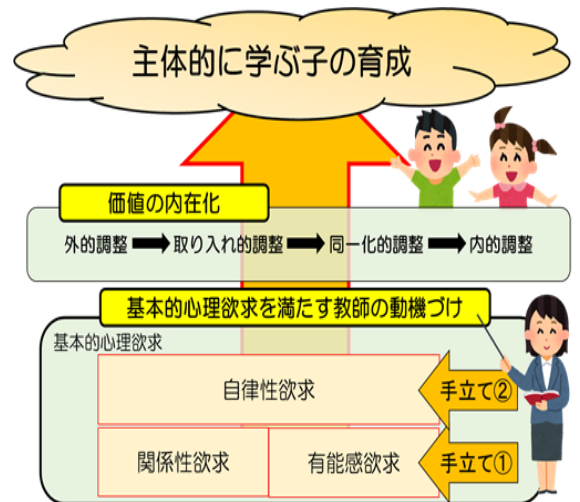
方法

①目的に迫る手立て

- ・関係性や有能感を満たす教師の働きかけ(①教師による適切な課題と励まし。②教師の受容と承認、親密な関わり、③定期的エクササイズ)
- ・共同学習による動機づけ

②効果の測定材料

尺度には、西村・河村・櫻井(2011)の自律的学習動機尺度と西村・櫻井(2011)の基本的心理的欲求充足尺度を使って、具体的数値で示す。また、担任と院生の協同リフレクションを行い、児童の実態から新たな手立てがあれば加え、学級づくり、ルール定着、交流型学習の手立て改善を行っていく。



支援校の実態把握

①支援要望書より

- ◎学級状態の分析・結果を踏まえた子どもの主体的な活動を促す方策の提示

②対象学級の実態(担任インタビューによる)

- | | |
|-----------------------|------------------------------|
| 1. 4年 | 2. 5年 |
| ◎クラスの子どもたちが落ち着かない。 | ◎交流型学習が効果的なのか、深まっているのかわからない。 |
| ◎クラスの子どもたちがなかなか話を聞かない | ◎話し合い学習をさせたい。 |
| ◎不適切行動の児童が気になる。 | ◎学力差や学習意欲の差が大きい。 |



支援の実際

共同学習による動機づけ(2・5年)と関係性や有能感を満たす教師の働きかけ(1・4年)

先生方の実践

2・5年



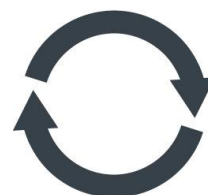
- ・関係性欲求を満たすため、関わり方の提示をする。
- ・交流場面を設定する。
- ・有能感を満たすため、行動表記型の学習課題を設定する。

1・4年

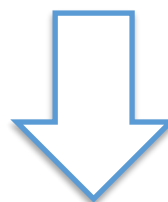


- ・エクササイズを実施し、C-C間の関係づくりを目指す。
- ・T-C間の関係づくりのため受容や承認、親密な関わりをする。

振り返り



提案



担任とのコンサルテーション

1・4年	2. 5年
日常の関わりでよかった箇所、改善する箇所の確認(KPT法を用いる。)	
・場面指導 ・朝の時間に先生方と授業や予定確認	・子どもの様子を伝える。 ・単元計画(学習課題、関わり方課題、交流場面の提案)

院生通信などで取組紹介

提案学級の実践を全校に広げるために、院生通信を職員向けに発行し、全職員に取組を紹介。



自治的集団育成に向けて、自他を認め合う人間関係づくり

支援要望

「温かな学級づくり・自他を認め合う自治的集団づくり」
「自分のよさ、仲間の良さを認める姿」
「問題解決のために、仲間と協力する姿」

上越市立清里小学校
チーム

目的

自他を認め合う人間関係づくりの構築に向けて、教師の指導行動の振り返りによる日常的な学級のよい雰囲気づくりの中で、クラス会議を定期的に行い、その効果を明らかにする。

方法

【手立て】
①クラス会議：赤坂のプログラムで、週1回のペースで行う。
②学級づくりチェック表：
教師が集団を育てるための定期点検を行う学級づくりチェック表であり、赤坂(2017)の“学級機能アップチェックポイント20”から教師が自分自身で1週間で見取れる項目を選出し、自己チェックをする。
【効果の測定材料】
・楽しい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)
・共同体感覚尺度(高坂2014)

支援の実際

自他を認め合う人間関係



＜クラス会議＞
コンプリメント交換、問題解決、
教師からの肯定的評価、振り返り



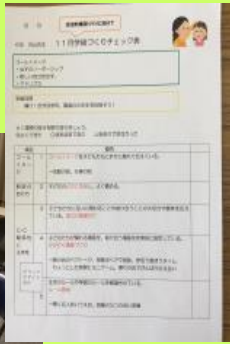
共同体感覚

子ども同士が
よさに目を向ける・よさを伝え
合う・話し合う・協力する機会

担任の指導行動による
よい雰囲気づくり

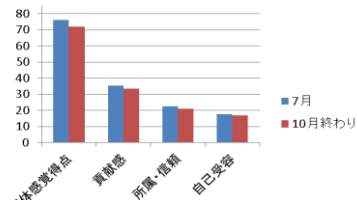


＜院生通信＞
院生と支援校の
先生方と情報の
共有

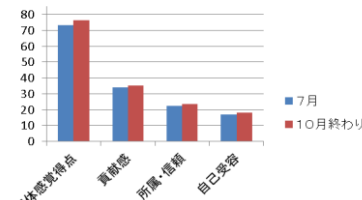


＜学級づくりチェック定期点検＞
・週1回、担任と院生で行う。
・チェック表に◎△◇で記入し、
KPT法を用いて振り返り、
意識する。

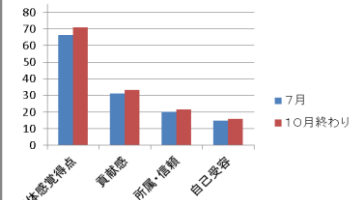
3年生共同体感覚尺度



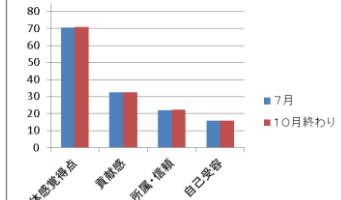
4年生共同体感覚尺度



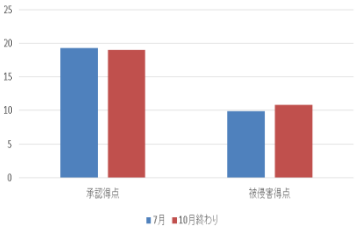
5年生共同体感覚尺度



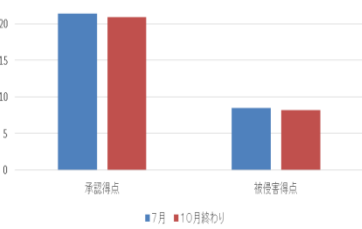
6年生共同体感覚尺度



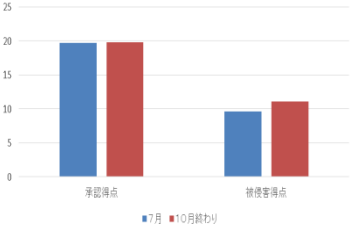
3年生Q-U



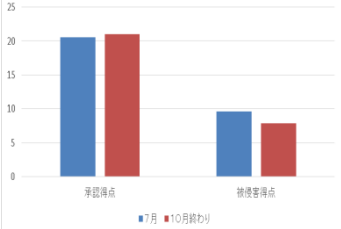
4年生Q-U



5年生Q-U



6年生Q-U



教科領域・学級経営実践コース

赤坂研究室

2018 新井中学校 連携計画書

テーマ

連携テーマ：良好な人間関係構築を基盤とした学級経営

	学級経営・特別活動		職員研修
要望	○良好な人間関係構築を基盤とした学級経営 ○不登校を生みにくい学級づくり 【学校課題】 ・学力向上（全員参加・対話のある授業、きく力・話す力、アクティブラーニング・発表しやすい雰囲気づくり） ・社会性育成（自己有用感、自己肯定感、人間関係形成力、協力して向上を目指す力、規範意識）		・学級経営を基盤とした学力向上を実現するための校内研修の設計プラン
連携校の実態	1年○組	1年○組	
担任の願い	1年○組 ・体育祭や合唱など行事をきっかけにクラスとしてまとまる機会にしたい。 ・マイナス発言する生徒に対して、周りの生徒の力を生かして前向きな働きかけをしたい。 ・嫌なことに取り組まない生徒に対して、見通しと目標を持たせて取り組ませたい。	1年○組 ・行事を機に、仲間の良さを発見したり、人間関係の幅が広がったりするとよい。 ・全体的に、男女関係なく誰とでも話せるようになってほしい。生徒各々の特性を理解してつきあえるようになってほしい。 ・人間関係づくり、雰囲気作りを可能な範囲で日常的に行えとよい。 ・班長会などを生かし、生徒主体で活動できるようにしたい。	・良好な人間関係構築を基盤とした学級経営について ・不登校を生みにくい学級づくりについて
ゴール	○教師は、生徒のよい所や頑張っているところを認め、良好な関係性を築くことができる。 ○生徒同士でかかわる場面が増え、男女関係なく話したり、お互いに声をかけあったりして、協力し合う姿が見られる。 ○学級や学年で生じた問題や課題に対して、自分たちで解決しようとする自主的な行動をとるようになる		・学級や生徒の現状(成果や課題)について、職員の共通理解を基に、ベクトルをそろえて指導にあたる。
数値目標	【量的データ】 ☐hyper-QU（年3回実施） 「教師との関係（担任）」と「かかわりの尺度」に注目して ・全体の数値を下げない（または上げる） ・抽出生徒(数値/教師の気になる生徒)の数値を上げる。 ※9月に院生が準備して実施 ☐アセス（9～11月） ・対人的適応（教師、友人、非侵害的關係、向社会的スキル）の向上 【質的データ】 ・映像・音声データ ・フィールドノーツ 【その他】 ・担任インタビュー ・取組振り返り用紙（生徒） ・チェックポイントを活用した振り返り（教師）		
具体的な手立て	1 生徒同士のかかわり ☐学活・道徳を活用した取組 ・SGEやSST、アサーショントレーニング ☐短学活のプログラム活用 ・ペアやグループでの話合い ☐授業において ・フリートーク・協同学習	☐その他 ・ハッピーレター ・生活ノートを通した交流 ・仲間づくり（学年朝会等） 2 学校行事の活用 3 クラス会議 4 教師の取組サポート	・院生からの提案 ・職員による作戦会議（学年・学級間の実践の共有）

教科領域・学級経営実践コース

赤坂研究室

2018 新井中央小学校 連携計画書

テーマ 自治的集団を育成するための学級づくり ～発達段階に応じた取り組みを通して～

	授業・学習			特別活動			職員研修
	共通	2年	4年	共通	2年	4年	共通
要望	・ 集団の交流 ・ 道徳教育 ・ 同和教育 ・ 人権教育 ・ 自主的な学習態度の育成 ・ 集中して学習に臨める。			・ 友達とのトラブルなく過ごす。 ・ 集団の交流活動			・ 学年間の連携を図る。
連携校の実態							
具体的な手立て	・ SST (2年) ・ 話し方、聞き方の学習 (2年)			・ ハッピーレター (2・4年) ・ クラス会議 (4年)			
数値目標	【量的データ】 ☐ ハイパーQ-U ・ 承認得点の上昇 ☐ 共同体感覚尺度 (貢献・所属信頼・自己受容) すべて上昇			【質的データ】 ☐ 映像・音声記録 ☐ フィールドノーツ			【その他】 ☐ 振り返りカード ☐ 担任インタビュー
ゴール	・ 話の仕方、聞き方が身に付く。 ・ 落ち着いて授業に臨める。 ・ 友達の意見を認め、相互交流ができる。			・ 自分たちで課題を解決する。 ・ クラス会議を担任、または子どもたちで進めることができる。			・ クラス会議、アイスブレイクの周知

教科教育・学級経営実践コース

早川研究室

平成 28 年度

道徳授業の指導の充実を図る協働研修の在り方

【連携協力校】上越市立清里小学校

M2 : 土田健太郎 高橋 歩

石川 真衣

M1 : 林 誠仁

連携協力校の要望

○全担任が役割演技を用いた道徳授業を習得する。

※ 清里小学校は、学校支援プロジェクト2年目。役割演技を用いた道徳授業の効果を実感し、学校の重点目標を「よくみて きいて 考えて取り組む子」としている。

そこで、新たに転勤してきた教員を中心に、一人一人に応じた道徳授業づくりを協働研修として行うこととする。

期 間

2016年8月29日～11月30日(週2回)

協働研修を行う教員

第2学年担任A講師(教職経験 3年)

第3学年担任B教諭(教職経験21年)

第4学年担任C教諭(教職経験16年)

※A講師、C教諭は、協働研修1年目。

B教諭は、協働研修2年目。

役割演技を用いた道徳授業の効果

- ・児童生徒が「道徳的な価値のよさ」について、「知識として知る」知り方から、「実感として知る」知り方に変わる。
- ・監督役割が高まることで、役割演技を用いない道徳授業においても、児童生徒の意見を生かした授業力向上、評価に関する見取り力の向上を図ることができる。

●文部科学省が指摘する道徳授業の課題

- ※特定の価値観を押し付ける授業
- ※主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導する授業
- ※主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合い
- ※読み物教材の登場人物の心情理解に終始する「読み取り」指導

道徳教育の質的転換

○道徳授業の基本的な理解

- ・児童の発言を傾聴し、その背景を推察する。
- ・主題やねらいを明確化し、中心発問を吟味する。
- ・児童生徒同士の合意を形成することが目的ではなく、その活動を通して、道徳的価値について考える。

○質の高い多様な指導方法

- ①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習
- ②問題解決的な学習
- ③道徳的行為に関する体験的な学習

※役割演技は、③のみに留まらず、①②においても効果的な指導法！

連携の実際(A講師)

<A先生の困り感>

- ・道徳授業の進め方

<模擬授業・実践・振り返り>

- ・資料の分割、場面ごとに考える授業方法
- ・児童の発言を傾聴し、背景を推察
- ・A先生の自身の演者体験

<成果>

- ・役割演技の監督役割向上(演者選定・状況説明)
- ・指導の工夫力向上



連携の実際(B教諭)

<B先生の困り感>

- ・役割演技の演者選び

<模擬授業・実践・振り返り>

- ・主題やねらいの明確化
- ・登場人物に対する児童の自我関与の見取り
- ・役割演技の場面設定

<成果>

- ・観客の考えを演者に伝え、解釈する分析者役割の実感(「演者はどの子でもできる」)
- ・役割演技を司会進行する授業者役割の向上



連携の実際(C教諭)

<C先生の目指す授業>

- ・人間関係づくりに役立つ授業

<模擬授業・実践・振り返り>

- ・実態に合った資料選定
- ・指導展開の検討
- ・自我関与に関する理解

<成果>

- ・児童の発言を傾聴し、生かす授業
- ・授業のねらいに迫るテーマ化や見取り
- ・児童の経験知や価値観をより尊重する姿勢



プロジェクトを終えて

<役割演技の指導力向上>

- ・主題やねらいを明確にもつ
- ・児童の発言を傾聴し、受け止め解釈する
- ⇒ 授業者が実感的に理解した！
- ⇒ 児童が道徳授業に意欲的に参加！

今後の課題

- ・協働研修の中に、授業者自身が行う「ウォーミングアップ」を位置付ける。(支援終了後も、継続した役割演技の実施が可能)

支援を受けた先生から
他教科の授業を行う際にも、必要な視点であり、授業改善に役立つ

学習指導要領全面実施に向けた道徳教育推進に関する一考察

—道徳教育と道徳科の関連、道徳の評価の在り方を中心にして—

研究協力校 J 市立 O 小学校

教育経営コース
一年制 P 林誠仁
指導者 早川裕隆

研究の目的①

道徳教育における評価について、児童を複数の職員で見取り、児童を診断的評価する際の資料としての信頼性や妥当性、課題についての検証。

道徳教育における評価のポイント

- ①教育活動全体で見られる具体的な児童の姿を見取る
- ②評価の視点は、学校の教育目標につながる道徳教育の重点目標
- ③評価の目的は、※赤文字は、今回の研究に関係のある部分
ア 児童の道徳性の診断的評価と形成的評価
(結果的に総括的評価の場合もある)
イ 補充・深化・統合したい道徳的諸価値に関する授業改善
ウ 全体計画や別業の改善(カリキュラム・マネジメント)
エ 学校の教育目標や重点目標の改善
- ④組織的取組(学年、教職員全体)として、児童の見取りを行う。
- ⑤発達障害や家庭環境等を考慮すること(児童観の転換)

- ①調査期間 2016 年 9 月
- ②見取りを行う者 教諭、栄養教諭、養護教諭、校長、教頭、講師、院生
- ③見取る場 児童会活動(5 学年児童を中心に見取る)
- ④調査法保 5 学年児童の実態報告、5 学年担任への事後インタビュー



結果と考察 組織的に見取るメリット

事後インタビューにおける A 教諭の発言(抜粋)

「(児童の見取りについて)自分だけがそう思っていたんじゃない」
⇒(妥当性の判断)
「割と自分はよく見すぎていた」 ⇒(差異の確認)
「自分の態度で(児童に)プレッシャーを与えないようにしなくちゃいけない」 ⇒(指導の在り方の見直し)

結果と考察 組織的に見取る課題

- ・経験年数が長い教員は、記述量が多い傾向。
- ・職種によって見取る視点が異なっている可能性がある。
→見取り方についての事前研修
→組織的・計画的に児童の実態を見取る場の設定
(時期を全体計画や別業に明記)

研究の目的②

道徳科における評価について、道徳科授業の終末で行う振り返りシートの記述をもとに児童と面接を行い、学習状況や道徳性の成長について把握する効果の検証。

道徳科における評価のポイント

- ①個人内評価であり、児童生徒が自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくもの
- ②評価の視点は、指導のねらいや内容
- ③評価の目的は、※赤文字は、今回の研究に関係のある部分
ア 学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子の把握
・個々の内容項目ではなく、大くくりなまとまりを踏まえた評価
・学習活動における児童生徒の具体的な取り組み状況を一定のまとまりの中で見取ること
・一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか
・道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか
イ 目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料
- ④組織的取組(学年)として、児童の見取りを行う。
- ⑤発達障害や家庭環境等を考慮すること(児童観の転換)

発言が多くない児童生徒、考えたことを文章にすることが苦手な児童生徒
⇒「一方的な「姿勢の見取り」による解釈では、不十分
児童の発言や記述は、「自らの生活経験を基に発せられる」と肯定的に捉える。

どのように見取っていくのか

- | | |
|---------------------------------------|---|
| ・観察や会話
・作文やノートなどの記述
・質問紙
・面接 | ・大くくりのまとまりで(内容)
・授業ごとに
・一定のまとまりで(学期や年度のポートフォリオ) |
|---------------------------------------|---|

- ①調査期間 2016 年 12 月
- ②調査者 第 5 学年担任の A 教諭
- ③検証材料
・振り返りシートの記述、
・振り返りシートを基にした筆者の面接による児童の発言
・授業プロトコル
・児童の実態に関する聞き取り

○授業で扱った資料

「星野君の二塁打」 C12「規則の尊重」

○ねらい

きまりの意義(きまりを守ることは、自分を守り、チームメイトを信頼することにつながる)を理解し、自分たちで決めたままりは進んで守ろうとする態度を養う。

○実際の授業の概要

- 目先の勝利を優先し、星野くんの行動を肯定する児童
「星野くんのおかげで勝ったのに、次の試合に出さないといい監督は厳しすぎる」
→授業者の発問
「もしも、星野君が打てなかったら、周りの友達はどんな気持ちになっただろう」
- 監督の真意に気付き始めた児童
「バントは失敗しても監督の責任、星野君は責められない」
「監督はチームみんなをやってほしかった」
→授業者の発問
「今日の学習を通して、約束を守るってどういうことだと思いますか」

振り返りを基にした面接の実際

◆理由が書かれていない児童の感想

ほんとはがむとくかやさしいしあめふた

→面接を通して、授業中の友達の発言を聴き、考えを深めたことが分かった。

◆記述内容が理解しづらい児童の感想

かんじは、星野が 100 打てなくてチームのみんな、
やな思 としてほしくないという、ことをたえて
くて、みんなをきいて、話した。

→面接を通して、約束を守るメリットやチームプレーの大切さについて考えていたことが分かった

結果と考察 面接を行うメリット

- ①理由が明確となり、児童に対する理解が深まる。
- ②学習状況を把握しやすい。
- ③児童の実態に応じて聴くことで、道徳性の成長について把握しやすくなる。

結果と考察 面接や評価の課題

- ①時間の確保が難しい。
→常に「傾聴する姿勢」をもつ。
- ②児童の実態把握も必要
→道徳教育の場で、組織的・計画的な実態把握の必要性

I 問題の所在

道徳性を養うための具体的な目標

- ① 道徳的諸価値の理解
 - ② ①を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方の考えを深める
- ⇒ 以上の学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

文部科学省(2015)中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 pp.14~17

よりよく生きるために欠かせないもの

① 道徳的諸価値の理解

文部科学省(2015)中学校学習指導要領解説
 ●道徳的価値の意味を捉えること
 ●その意味を明確にしていくこと

早川(2004)
 ●道徳的な価値のよさについて「実感として知る」

文部科学省(2015)中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 p.14
 早川裕隆(2004)『シリーズ・道徳授業を研究する1 役割演技を道徳授業に』p.1、明治図書

① 道徳的諸価値の理解

文部科学省(2015)小学校学習指導要領解説
 ●価値理解 「人間としてよりよく生きるために大切」
 ●人間理解 「やってみるのはなかなか難しい」
 ●他者理解 「考え方は一つではない、いろいろな考え方があるんだ」

文部科学省(2015)小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編 pp.16~17

II 研究の目的

- ① 生き方についての自覚につながるよう、道徳的諸価値の理解が深まる授業を提案する。
- ② 生徒の振り返りや教師の見取りが深まるような手立てを講じ、その有効性を検証する。

研究期間

2016.5/10~7/15

研究対象

T市立Y中学校
 1年5組
 (男子15名、女子16名)

III 検証材料

- ・道徳授業アンケート(事前、事後に実施、記述式)
- ・道徳の時間についてのアンケート(事前事後に実施、記述式)
- ・道徳振り返りシート
- ・振り返りの振り返り

IV 研究の構成

実施日	実施内容(内容項目)
登場人物への自我関与が中心の学習	・道徳授業アンケート ・道徳の時間のアンケート 1 荷物[B-(6)思いやり、感謝] 2 校内水泳大会[B-(8)友情、信頼] [C-(10)よりよい学校生活、集団生活の充実] [学活：役割演技のウォーミングアップ]
問題解決的な学習(モラルジレンマ資料)	④ 泣いた赤おに[B-(8)友情、信頼] ⑤ つばい、[A-(3)向上心、個性の伸長]
道徳的行為に関する体験的な学習(役割演技)	⑥ 二通の手紙[C-(10)道法精神、公德心] ※毎時間の終末に「振り返り」を記入
調査	7/15 ・道徳授業アンケート ・道徳の時間のアンケート ・振り返りの振り返り

(註) 数字に○印は、筆者が行った授業

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門委員会(2016)「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)p.6

授業づくりの留意点

- ①「対話的コミュニケーションを重視した」授業
⇒「声に出してお互いに意見を交換し合う」
- ② 生徒自身のさらなる語りを引き出す問い返し
- ③ 年間指導計画で組まれた内容項目に合わせて資料を用意

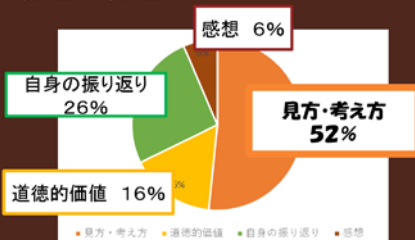
授業づくりの留意点

- ④ 生徒自身の振り返りが深まる手立て

自分の振り返りを積み重ねていくすぐ読める

V 結果と考察

- (1) 振り返りの振り返りから



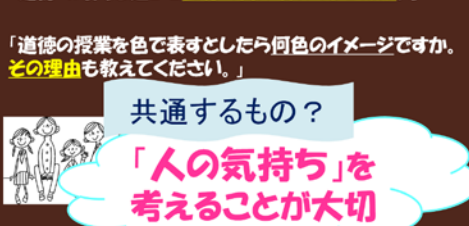
V 結果と考察

- (2) 道徳の時間のアンケートから
「道徳の時間に何を振り返ったか、考えたりしていますか」



V 結果と考察

- (3) 道徳授業・道徳の時間についてのアンケートから
「道徳の時間を通して自分の何が変わりましたか。」



V 結果と考察

- (4) 研究協力者から
●学級担任の多面的・多角的な生徒理解

⇒文部科学省(2015)
 「協力的な指導などについての工夫」
 「他の教職員とのチーム・ティーチングなどの協力的な指導」

⇒道徳科における生徒の学習状況の評価

文部科学省(2015)中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編p.84

VI総括(成果)

- ① 振り返りの振り返りにおいて、自分自身の「見方・考え方」について言及する生徒が多く、メタ認知の効果が表れていたこと
- ② 「自分と他の人との違い」、「自分自身の生き方」を考える生徒の人数が増加したこと
- ③ 「自分自身の生き方」を考えている生徒は「人の気持ちを考える」大切さを理解していること
- ④ 研究協力者は学級担任として、生徒理解を深めたこと

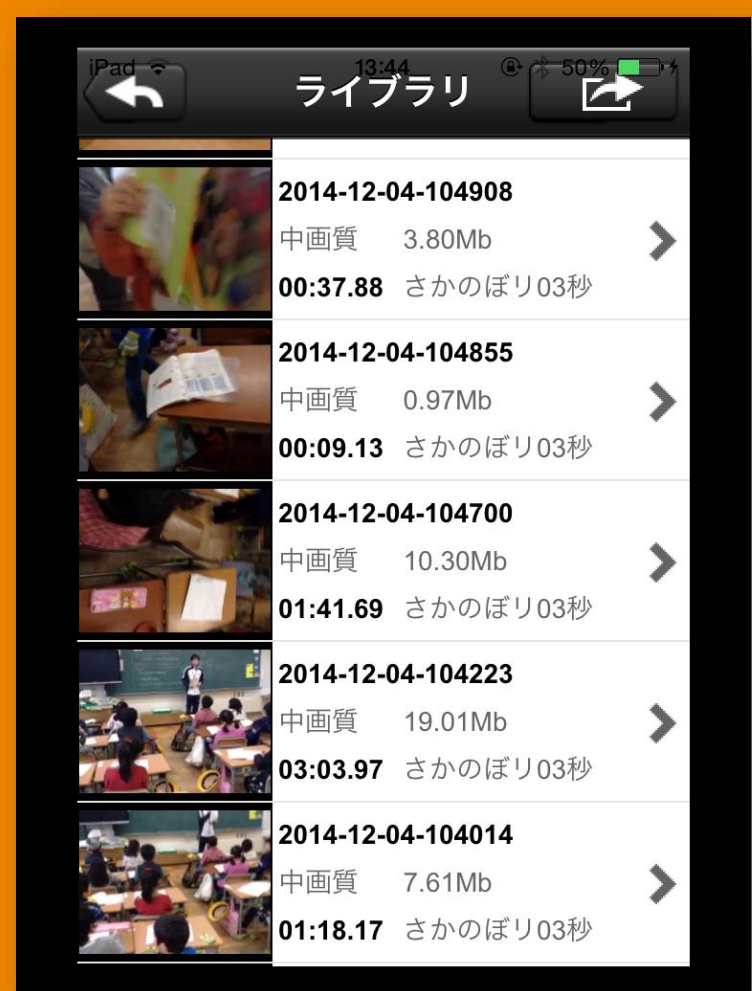
VI総括(課題)

- ① 「自分の何が変わりましたか」に対して「特にない」、「何も変わっていない」と答えた生徒への自己理解の深まりを自覚を促す支援
- ② 生徒が自分の成長を実感できるよりよい振り返りの在り方の追求
- ③ 学年部全職員で生徒一人ひとりを多面的・多角的に理解するための道徳科の授業づくりの具体化・具現化

教科教育・学級経営実践コース 大島研究室

学校支援プロジェクトでの連携項目例

- ・研究主任サポート
- ・授業研究の方法提案・データ提供
- ・初任者・若手の先生へのメンター支援



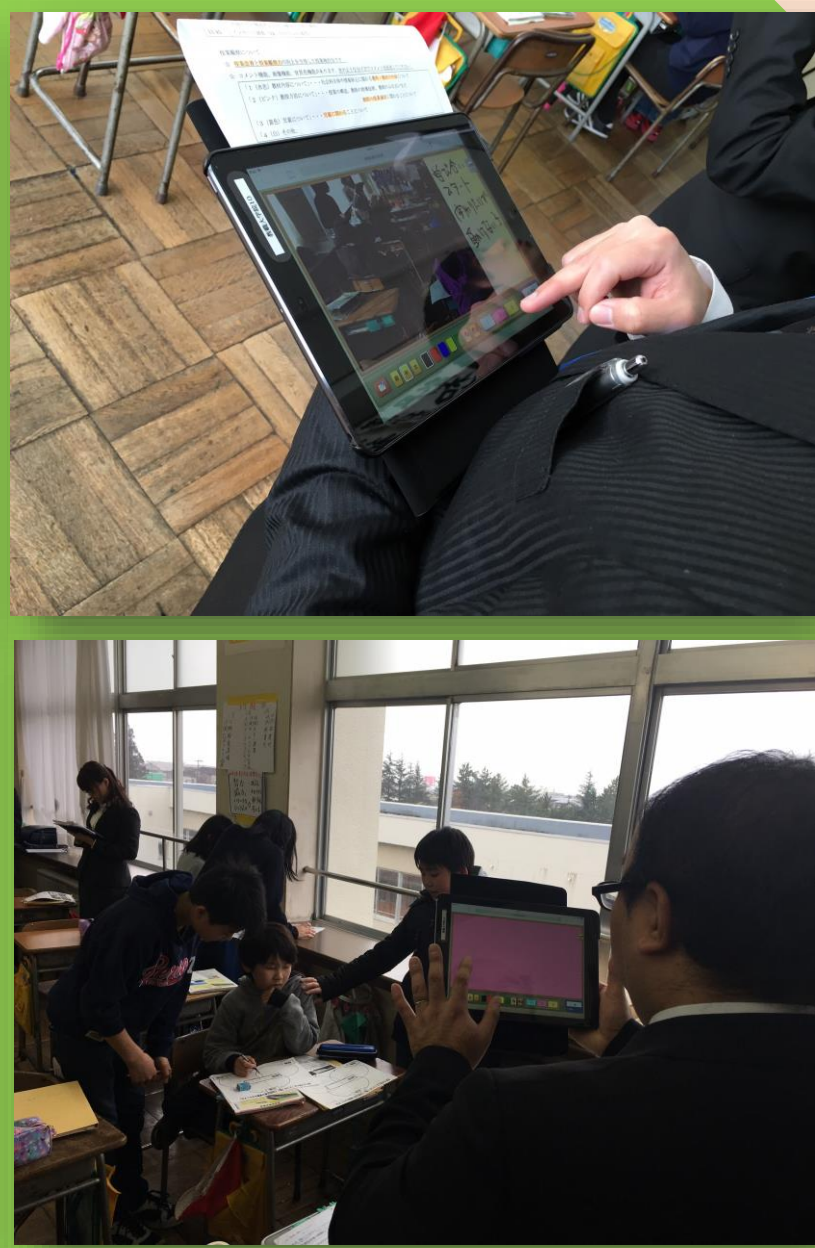
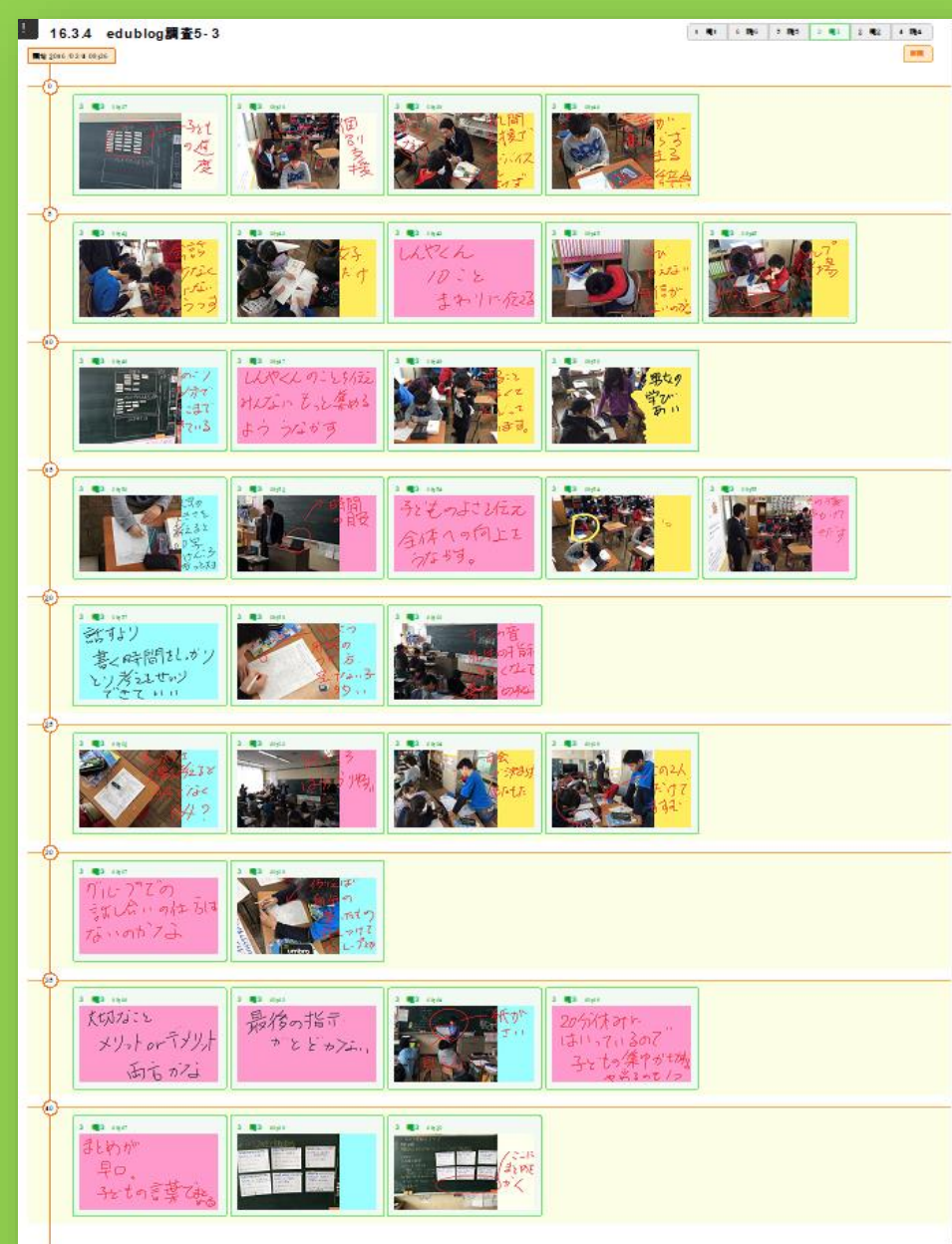
先生方
の学び

- ・先生方とともに協同的な授業づくり
- ・院生による授業実践・提案



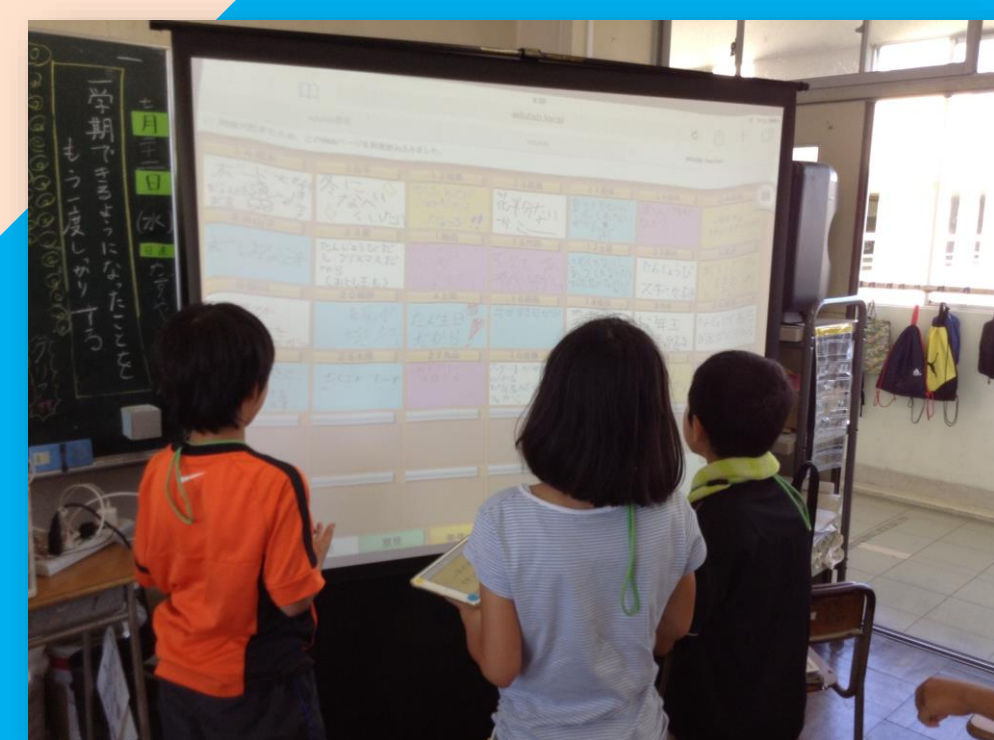
子どもたち
の協同的な
学び

授業データ
フィードバック



- ・学習者の学びの姿、授業者の動き等のデータを授業者に提供

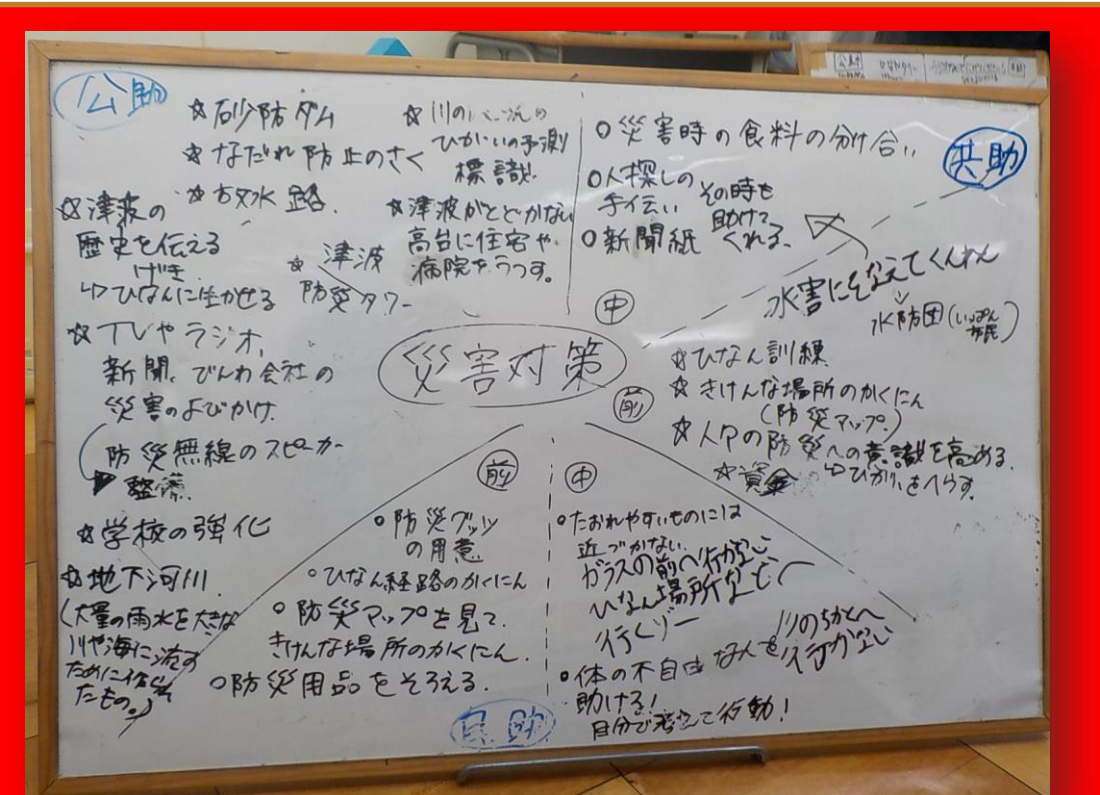
ICT活用



- ・情報活用力を向上させる授業づくり
- ・教員のICT活用力向上のための支援
- ・学校のICT環境整備補助

社会科授業づくり

- ・社会科専門の先生のサポート
- ・社会科が苦手な先生のサポート



■ 大島 崇行
(おおしま たかゆき)

■ 新潟県小学校11年
中学校 6年

■ 現職派遣院生として
学校支援プロジェクト経験があります

■ Mail : oshima@juen.ac.jp



■ 研究分野

- ・教師教育(先生方の学び)／教員養成／
授業観察・検討会／リフレクション(省
察))

- ・授業デザイン(協同的な学び／ICT活用)
- ・社会科教育

子どもたちも、先生方も学びを楽しめる
学校づくりを目指して研究しています

教科教育・学級経営実践コース

片桐研究室

支援担当 堀晃大 上野宏彰 遠藤学
アドバイザー 片桐史裕

キーワード: 言語活動の充実、国語、主体的・対話的で深い学び

①昨年度の取り組み

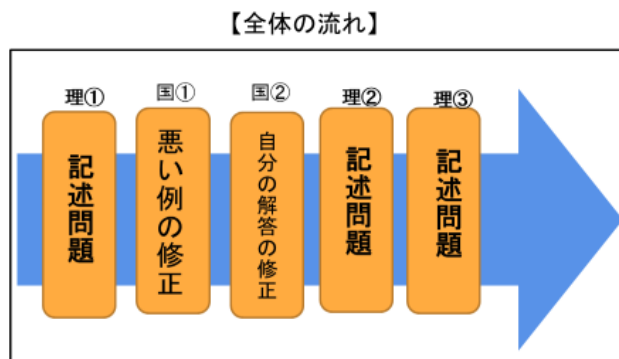
理科と国語によるカリキュラム・マネジメントを提案し、成果を分析した。

具体的な取組: 理科の考察文を書く際に、その書き方を国語の単元の「意見文を書こう」に関連させながら二回の授業を行った。その効果を全三回の考察文をそれぞれ、実践前と実践直後、更に実践から一か月経過したときにそれぞれ回答させ、効果を検証した。

効果: 考察文を論理的な文章として書くことができ、理科の学習内容の深化も見られた。

【理科】	
単元3 天気とその変化	
第3章 大気の様子と日本の天気	
①日本の天気の特徴 (理①)	
②大気の様子	
③天気の变化を予想しよう (理②)	
④気象災害への備え	
単元4 電気の世界	
第1章 静電気と電流	
①静電気の正体とその性質	
②放電と電流	
第2章 電流の性質	
①電気の利用 (理③)	

【国語】
意見文の説得力を考える
2時間

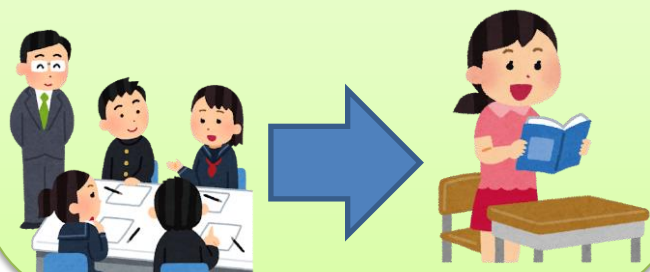


②本年度の取り組み

高等学校国語科での主体的対話的で深い学びを起こさせる授業の実践と効果検証

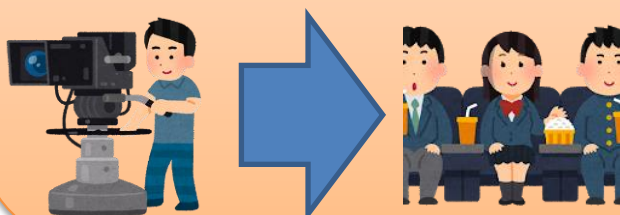
群読の実践授業

・漢文の授業の際に、書き下し文での群読脚本作成、発表による主体的な活動を行う。脚本づくりの活動を通して、お互いの解釈を確認し合い、深い学びにつながることを目指し、共同活動によって苦手感の解消を図る。



文学作品の映像番組化

学習者自身が撮影と編集を行い、「物語の映像化」を行う活動を通し、脚本づくりでの文章表現や文学作品の内容の理解の深化を図る。また、制作した映像をお互いに鑑賞し、映像表現の意図を知ることと、更に深い読みを行うことができる。



教科教育・学校経営実践コース

片桐研究室

チャレンジショップ「Rikka」の取り組みとキャリア育成に関する研究

連携協力校 新潟県立高田商業高等学校
支援担当 堀晃大 上野宏彰 遠藤学
アドバイザー 片桐史裕

①連携協力校での実際

地域の産業界で活躍し貢献できる
ビジネスパーソンを目指した
ビジネス教育

将来を主体的に
ライフプランニングするための
キャリアデザイン※

※高田商業高校における「総合的な学習の時間」



「実践販売の様子」

地域活性化に向けての具体的な活動
チャレンジショップ
Rikka(りっか)



「実践販売の様子」

具体的な取り組み

- ・全校生徒の出資による「**模擬株式会社**」の運営。
- ・毎年夏に本町通り商店街で**チャレンジショップ「Rikka」**を展開し実戦販売を行う。
- ・活動PRと地元の魅力発掘を目的としたフリーペーパー「**Rikka+**」を発行・配布。
- ・商品開発や実戦販売を通じた**小学校・中学校・高校・大学との校種間連携**。

- ◎高校生による小・中学校での特別授業。
- ◎小・中学校とチャレンジショップ「Rikka」で共同販売。
- ◎海洋高校や農業高校と共同での商品開発。
- ◎大学院生による活動の支援。 など。



「フリーペーパーRikka+」

②実際の支援内容と分析

研究内容と分析方法

チャレンジショップ「Rikka」での実践的な取り組みや、地域連携活動を通じた**生徒のキャリア意識の変化**を調査すべく、活動の前後でアンケート調査を行う。

これまでの支援内容

- ・仕入れ内容や価格設定等の検討・助言。
- ・高校生による大町小学校での特別授業の引率と映像・写真撮影。
- ・高校生による城北中学校でのビジネスマナー講座への引率と映像撮影。
- ・チャレンジショップ「Rikka」の準備・実戦販売補助と事後指導。



「大町小学校での特別授業」



「城北中学校でのビジネスマナー講座」

今後の活動予定

- ・引き続きチャレンジショップ「Rikka」に参加し活動の支援と記録を行う。
- ・事後アンケートの回収をして活動の前後で生徒のキャリア意識にどのような変化があったか分析を行う。

片桐研究室通信

上越教育大学教職大学院では、9月より学校支援プロジェクトがスタートします。今回は、学校支援プロジェクトの内容を説明いたします。

これまでの取り組み

チャレンジショップ「Rikk a」での実践的な取り組みや、地域連携活動を通じた**生徒のキャリア意識の変化**を調査すべく、活動の前後でアンケート調査を行う。

7月

- ・仕入れ内容や価格設定等の検討・助言。
- ・高校生による大町小学校での特別授業の引率と映像・写真撮影。
- ・高校生による城北中学校でのビジネスマナー講座への引率と映像撮影。



8月

- ・チャレンジショップ「Rikk a」の準備・実戦販売補助と事後指導。

9月

- ・引き続きチャレンジショップ「Rikk a」に参加し活動の支援と記録を行う。
- ・事後アンケートの回収をし、事前アンケートと比較することで生徒のキャリア意識に どのような変化があったか分析を行う。

チャレンジショップ「Rikk a」では、自分なりに、どうしたら商品をもっと売ることができるかを考えたり、既に関心を持ってくださったお客様からのアンケート内容に基づいて、改善点などを話し合ったりする姿が見られました。

また、中学生や小学生と積極的に関わろうとする生徒の姿も印象的でした。

9月から新しいプロジェクトをスタートします。

国語の群読と物語の映像化を行います。どちらも活動を通して、脚本づくりでの文章表現や文学作品の内容の理解の深化を目的としています。また、制作した作品をお互いに発表しあい、表現の意図を知ることによって、更に深い読みを行うことができます。

上越教育大学教職大学院 片桐研究室



堀 晃大

片桐研究室1期生です愛知県から来ました。

片桐先生の門下生として国語の「おもしろい」授業のあり方を模索しております。学部時代には文学部で源氏物語について勉強していました。上越はお酒もおいしい上、海も山もあるので釣り、スキー、スノーボードと楽しいです。



上野 宏彰

片桐研2期生の上野宏彰です。

新潟県で生まれ育った生粋の新潟県人です。主に世界史や日本史を専門としており、学部時代には、趣味の映画鑑賞が影響し、映画を歴史教育に用いることの意義等について勉強をしていました。教師を目指す者として、また、1人の人間としても成長していきたいと思っています。よろしくお願いします。



遠藤 学

片桐研究室2期生の遠藤学です。

茨城県古河市より参りました。商業高校出身で、大学は商学部でマーケティングを専攻していたため、ビジネス教育に関心があります。片桐先生の下でたくさん「学び」を吸収し自分のものにしていきたいです。よろしくお願いします。

キーワード

- ・国語、古文、高校、群読、言語活動の充実、教科横断的な学習

研究

「国語と理科の教科横断的な学習とその効果」
「古文学習者の苦手感の研究」

教科教育・学級経営実践コース

木村研究室

ゼミ紹介

木村研究室では、木村先生の優しく、あたたかな人柄のもと、「すべては子どもたちのために」をゼミの合言葉に研究に取り組んでいます。

【研究室の特色】

- ① マニュアルのない生活科・総合的な学習の時間をメインに研究
- ② 生活科のプロフェッショナルである木村吉彦教授からの直接指導
- ③ 幼保小連携のスタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの研究・実施に携わることができる

【今の現状】

現在学部卒業生 M2 1人 M1 5人

- ・現場とかかわる時間を増やす
- ・ゼミ内で考えを共有する場面を多く作る



→ 現職がないところをカバー

☆ 和やか雰囲気の中、マイペースに研究に打ち込めます

H30学校支援プロジェクト



【支援校】 上越市立有田小学校

【学校教育目標】

あたたかく

理想は高く

たくましく

【支援テーマ】

互いに認め合い、学び合う子どもの育成
—学年・学級経営を基盤としたあたたかい人間関係づくりとその工夫—

【主な支援内容】

- ・地域に根ざしつつ、子どもの自己実現を図る教育活動への支援
- ・各学年及び学級の生活科・総合的な学習の時間をはじめとする教育活動への支援
- ・新しい地域の特性を生かした生活科・総合的な学習の時間の創造
- ・一斉指導では不十分な児童への個別の指導・支援(TA)
- ・学校行事等の準備や運営への参画や支援(運動会等)

先端教科・領域開発研究コース

新しい4つの領域が
学校課題を多面的に支援します

小学校英語

プログラミング教育

教科横断・教科実践開発

学習支援



先端教科・領域開発研究コース

プログラミング教育



石野正彦

この領域では「これからの社会をどう生き抜くか」が、テーマになります。これからの社会を文部科学省では、Society5.0(超スマート社会)として説明しています。自分の頭で判断し、思考し、行動できること、それが人間としての強みです。プログラミング教育を通して、これからの社会における教育のあり方を考えていきましょう。

※民間企業を経て新潟県内小・中学校教諭、新潟県立教育センター指導主事(国語科)、副参事、新潟県教育ネットワーク(NEIN)を企画立案。小学校教頭、小学校校長。上越市教育委員会勤務。合併上越市の10年間の教育計画「上越市総合教育プラン」を作成。平成21年4月から上越教育大学教授。専門は学校教育全般と情報教育、国語教育、学校経営。文部科学省ICTアドバイザー。日本教育工学協会評議員。平成27年度より学校教育実践研究センター長。



中野博幸

働き方改革と言われる中にもあっても、学校はますます様々なニーズに対応しなければならない時代になってきています。

ICTを活用することで、児童生徒が「わかった!」と笑顔になったり、先生方の仕事がスムーズになったと実感できたりするにはどうすればよいか、今までの自分の実践を元に学校の先生方と一緒に考えたいと思います。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教師の手立てとICT活用について、プログラミング教育の視点からも提案できればと考えています。

自然体験活動や地域学び活動などの具体的な体験活動を大切にしていきます。そしてその中から自分なりの課題を見つけだし、その課題に応じた最適な解決策を仲間と一っしょに探りながら導き出していく...そんな主体的で協働的な学びの深め方を共に探っていきましょう。

20年余り、公立小学校で生活科や総合的な学習の時間、理科を主軸とした総合学習を多くの地域の人に支えられ展開してきました。現在は、地球環境や防災といった観点から見えるESD教育、教育現場の課題解決や子どもたちの居場所としてのスヌーズレン教育...いっしょにいろんな観点から教育を探ってみましょう。



渡辺径子



清水雅之

小学校での学級担任・研究主任といった経験をもとに、連携させていただく学校の先生方と話し合いながら、様々な取組を行っていきたくと考えています。小学校の教員時代は、僻地小規模校において複式学級、他校とのネットを利用した遠隔教育の実践を行いました。また、上越市立東本町小学校では、人権、同和教育、情報教育(特にメディア・リテラシー教育)、生活科・総合の実践に取り組んできました。附属小学校では、教育課程開発、単元開発等に取り組んできました。大学では、附属中学校のフューチャースクール事業のアドバイザーを努めた経験から、授業におけるICT活用についてもアドバイスをすることもできます。新学習指導要領でプログラミング教育を行うことになりました。こちらについても学校の先生方との対話を通して考えていきたいと思っています。





先端教科・領域開発研究コース



小学校英語



大場浩正

小学校・中学校・高等学校の英語指導の支援(ファシリテート)します！

領域としては、小学校英語ですが、**小学校・中学校・高等学校の英語指導の支援**を行います。小学校英語に関しては、5・6年生の教科化に向けて大事な期間です。指導方法や内容についてサポート致します。また、中学校や高等学校における新しい学びのタイプの英語指導もサポート致します。特に、英語学習者の「**主体的・対話的で深い学び**」を担保する**協同学習**や**ファシリテーションの技術**を用いて、効果的な英語指導のサポートを行います。



染谷藤重

動機づけ、リスニング方略、聴解力の関連性を実践的・理論的に研究を行っています。小学生の動機づけは、英語学習において重要な要因となります。また、聴解力の促進にはリスニング方略が重要とされ、その方略と動機づけの関連性を調査研究することは重要です。

学習支援

平成29年告示学習指導要領では、小・中学校通常の学級において、発達障害を含む障害のある子どもが在籍している可能性があることを前提とした各教科等の指導を行うことが求められています。「各教科等の学びの過程において考えられる困難さ」をどのように明らかにし、「指導の工夫の意図」を踏まえた「手だて」を導けばよいのでしょうか。さらに、特別支援学級や通級による指導では、「個別的教育支援計画」、「個別の指導計画」作成が義務付けられました。このことも含め、特別な教育的ニーズのある子どもたちの個に応じた指導をどのように実践していったらよいのか、先生方と考えていきたいと思ひます。



藤井和子



岩本佳世

現在、我が国ではインクルーシブ教育の推進により、発達障害を含む特別な教育的ニーズを有する児童生徒が在籍する通常学級への教育的支援が必要とされています。児童生徒の教育的ニーズ(例えば、離席等の行動問題、選択性緘黙、学業不振)に応じた個別支援、彼らの在籍する通常学級全体への支援について、先生方と検討していきたいと思ひます。特に、学習場面において個に応じた支援と学級全体への支援を行い、個人と集団双方にどのような効果がもたらされるのか、先生方とともに考えていき、よりよい支援を子どもたちに提供できたらと思ひます。

連絡先： 大場浩正 hohba@juen.ac.jp
藤井和子 fkazuko@juen.ac.jp



先端教科・領域開発研究コース



教科横断・教科実践開発



渡部 洋一郎

放課後の学習で基礎の力を伸ばし、理解力を高めるお手伝い

宿題が解けない、授業がよく分からなくて困っているというお子さんは、いませんか？
でも大丈夫、学校が終わったあとに、基礎からわかるやり方で勉強の土台を固めましょう。私たちは、そんな理解を高めるお手伝いを積極的にさせていただきます。ためにやってみませんか。わかってくると、きっと毎日の授業が変わります。



迎 勝彦

放課後における児童・生徒の学習をサポートします！

国語の力を伸ばしたい！算数の力を伸ばしたい！…そうした子どもたちの学習サポートを放課後に行います。このサポートは、学校や先生方のニーズにそって、補習授業の位置づけとしてとらえてくださってもかまいませんし、漢字や計算のドリル学習等を見守ったり、理解力や表現力の底上げをねらったりするという個別的な学習支援という位置づけをしてくださってもかまいません。大学院生によるこうしたサポートは、国語や算数に限るものではなく、子どもたちの要望や学校の実情に合わせて、教科を横断して多様に編成することも可能です。

小学校での長期のフィールドワークを得意としています。休み時間の遊戯活動の調査、特別な支援が必要なお子さんの身体活動・**体育のサポート**などで、それぞれ2年以上、現場に入らせていただき活動してきました（現在も継続中）。雪国新潟ならではの**学年体育（合同体育）のお手伝い**、学びの見取り、**言語活動・コミュニケーション**を手立てとした「**体育科における深い学び**」なども提案していきたいと思います。



土田了輔



竹野 欽昭

専門分野の「①スポーツ心理学」、「②陸上競技」、「③スポーツ科学」を活かして、主に3つの学校支援を提案（予定）します。

①トップアスリートのメンタルトレーニングを応用した学習支援（小学校）

→実際にトップアスリートがメンタルトレーニングで行っている心理的技法を体験しながら、学習への取り組み向上を支援します。

②陸上競技大会参加および陸上運動学習の補助支援（小学校）

→大会等に応じて支援を行います。陸上競技の専門教員がおられない学校は是非！

③スポーツ科学を活用した運動系部活動の補助支援（中学校、高等学校）

→国立スポーツ科学センター元研究員の経験を活かしてトータルな支援を行います。

学習臨床・授業研究コース

我国の教育の動向を、中・長期的、グローバルに見据え、学習臨床の観点から、新しい教育方法、教育課程、学習過程を総合的にマネジメントする資質・能力を養成するコースです。

学習臨床・授業研究コースの学校支援プロジェクト

学習場面に臨みながら授業研究に取り組む先生方と協働し、主体的・対話的で深い学びを実現し、授業とカリキュラム・マネジメントの実質化を支援します。

支援の形態

学習活動支援：教材準備、授業補助、環境整備、補習・・・

授業研究支援：記録、分析、教材開発、アクションリサーチ・・・

授業実施支援：現職教員院生等による校内研修授業実施・・・

支援する学習活動や授業研究の例

多様なアクティブ・ラーニング ICT活用 eラーニング

ワークショップ型授業 探究型授業 対話型授業 NIE

支援する教科や学習領域等の例

国語

算数・数学

総合的な学習の時間

理科

社会

情報

地域理解 伝統・文化 自然環境

図工・美術

生活

国際理解 異文化理解 SDGs

飼育・栽培

コミュニケーションスキル育成

クラブ活動

教授 五百川 裕 (いほかわ ゆう) 025-521-3430 iokawa
専門分野：総合学習（自然環境学習）、野外体験、生物教育。著書：共著「マラソンで心を鍛える」（八重書房）、「新しい情報分野学」（講談社）他。自然環境学習において野外体験を基礎とした指導を行うのに必要な視点、技能を修得するための教育、研究指導を行っている。

准教授 河野 麻沙美 (かわの まさみ) 025-521-3340 masami
専門分野：教育方法学、授業研究、学習科学、授業での協働的な学習過程と教師の指導の場である「授業研究」を対象に、証言分析を行っている。「ひとが学ぶ、賢くなる」ことの意味と過程を考え、アクティブ・ラーニングを始めとした新たな学びのあり方を実践、研究しています。

教授 市川 和彦 (いちかわ かずひこ) 025-521-3450 nunokawa
専門分野：算数、数学を中心とした学習過程の臨床的研究。特に学習者の思考過程に関心をもち取り組んでいる。著書：共著「Explanation and Proof in Mathematics: Philosophical and Educational Perspectives」(Springer Verlag)

准教授 高野 浩志 (たかの ひろし) 025-521-3686 takano
専門分野：情報教育、数理解論。特にコマの一種であるラトルバックの研究。その他、人工生命における生命の創成に関する研究。著書：共著「Spin Reversal of a Rattleback with Viscous Friction」(Regular Chaotic Dyn. 2014)

教授 井上 久輝 (いのうえ ひさよし) 025-521-3517 inoue
専門分野：教育工学、情報教育、知識処理、情報教育の内容・制度・形態、情報教育の授業方法と学習過程、学校情報化のための組織マネジメント及び教育システムについて研究している。著書：共著「人工知能と教育工学―知識処理指向の新しい教育システム」(オーム社)。

准教授 古閑 晶子 (こが あきこ) 025-521-3385 koga
専門分野：国語学習デザイン研究、国語教育、言語を基盤として意味や知を創る対話的な学習過程の授業を研究する。著書：共著「思考力を育む授業」(学校図書)編著「対話を核とする学習過程デザインの要件」(「国語科教育」第73号)。

教授 松本 健蔵 (まつもと たけよし) 025-521-3346 takeyosi
専門分野：学習臨床学、美術科教育、幼児造形教育。著書：共著「表現芸術の授業」(朝文堂)。共著「社会文化的アプローチの実現」(北大出版部)。ものごとく人との相互作用による子どもの学びや遊びの生成過程について、表現行為の視点から研究を進めている。

准教授 田島 弘司 (たじま こうじ) 025-521-3312 tajima
専門分野：日本語教育学、国際理解教育、コミュニケーション学。著書：共著「文章・会話辞典」(きょうせい)。研究指導においては、教育現場の状況と学生のニーズを踏まえた実践的研究の課題設定を重視している。

教授 釜田 聡 (かまだ さとし) 025-521-3549 kamada
専門分野：総合学習、国際理解教育、社会科教育、現代的諸課題に対応した教育研究を行う。著書：共著「グローバル時代の国際理解教育」(明石書店)、「日韓でつくる国際理解教育」(同)、「国際理解教育ハンドブック」(同)。

准教授 城間 祥子 (しろま しょうこ) 025-521-3371 shoko
専門分野：教育心理学、状況的学習論、「参加としての学習」の観点から、伝統芸能などのワークショップ型授業を対象に学習過程の質的な分析を行っている。著書：共著「社会と文化の心理学―ウィゴツキーに学ぶ」(世界思想社)。

准教授 石川 真 (いしかわ まこと) 025-521-3518 ishikawa
専門分野：ネットワーク利用の教育・学習環境開発研究、情報モラル教育に関連する「デジタルネイティブのネット上の対人関係スキルを育成するための基礎的研究」を行っている。著書：共著「学びと教えで育つ心理学」(保育出版)。

准教授 野澤 有希 (のざわ ゆき) 025-521-3353 nozawa
専門分野：教育課程論、カリキュラム開発、カリキュラム開発の方法、カリキュラム評価、学校改善のためのカリキュラムマネジメントに関する研究を行っている。著書：共著「Curriculum Innovations in Changing Societies」(Sense)

根本的な問題の解決を探求する 学校づくりの協働研究プロジェクト

「実践と理論のつながりをめざして」

私たちは、現代的な教育課題となっている様々なトピックについて、**時間はないけれども本当は取り組まなければならないと思っている**学校・先生方と共にプロジェクトを組み、課題そのものに対する研究も深めながら、学校現場での課題解決をめざします。そのために、院生と共に学校・先生方と協力して**新しい学校づくりを支援します**。

たとえば、次のような課題について共に課題解決に取り組みます。

児童生徒の
教育課題

学力問題、人権・同和教育、多文化や貧困等の特別な支援、学級づくり、
幼・小・中学校連携、社会に開かれたカリキュラムづくり

学校組織の
経営課題

学校の業務改善、教職員の協働、若手教員のメンタルヘルス、校内研修の活性化、
学校評価や教員評価の効果的活用、施設設備の効果的活用

外部諸機関
との連携

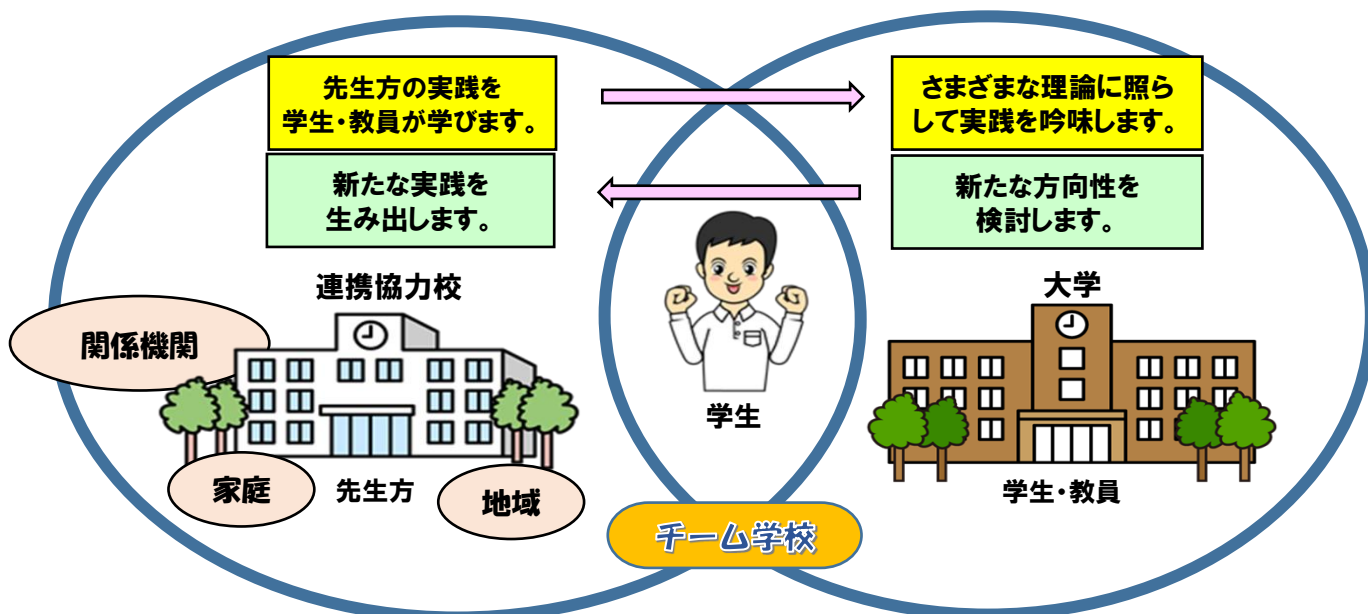
コミュニティ・スクール、地域学校協働活動、家庭教育支援、地域の子育てカリキュラム、
学校とNPOの連携、まちづくりと学校、教育行政との協働体制

※その他、多様な課題についてご相談いただきたいと思います。

「チーム学校」をデザインする 学校支援プロジェクト

学校現場で生み出した貴重な「実践」、それらを大学の「理論」と交流することで、**新たな見方、視点を提供します**。それは、「この実践には、このような意味があったのか」、「この実践は、他のこの実践とつながっているのか」、「実はこのような仕組みになっているのか」、「…となると新たな方向性として、このような可能性がありそうだ」などのように、学校現場と大学が連携することで、「理論」を活用し、新たな「実践」へとつながることができるような取組をめざしています。

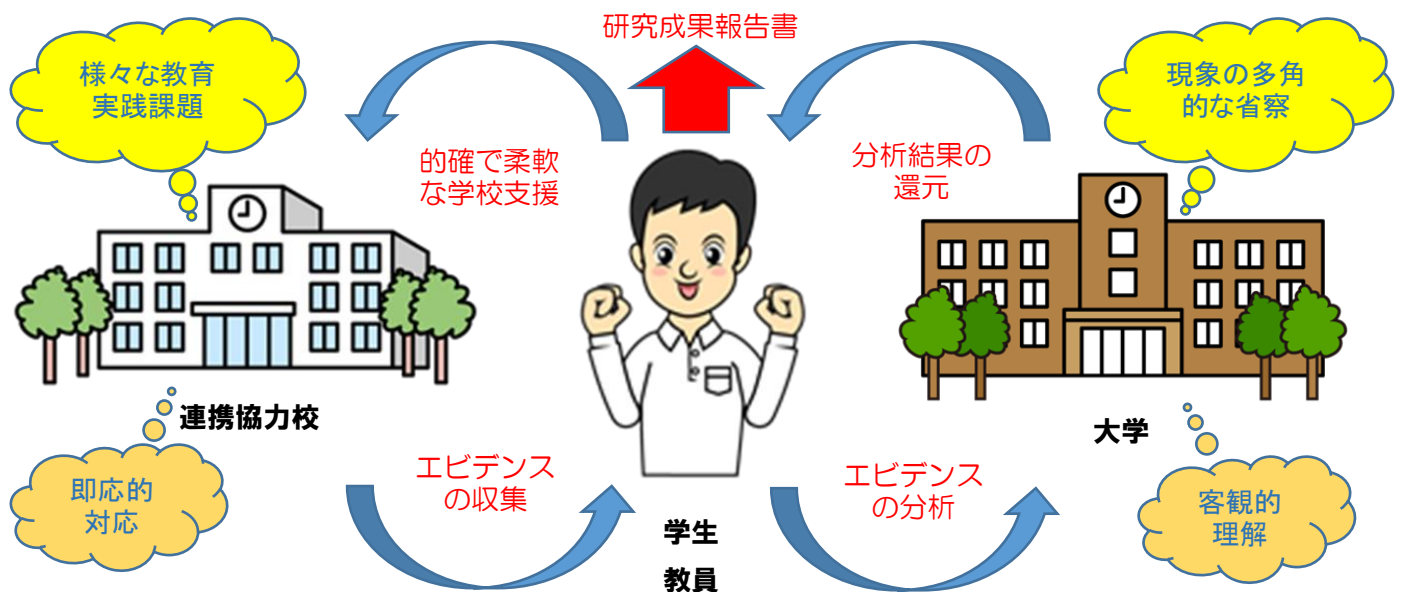
本領域では、「教育連携」や「チーム学校」、「学校・学級づくり」をキーワードにした「実践」を対象にしますが、この学校支援プロジェクトも、まさに学校現場と大学が連携しながら、チーム学校をデザインする取組の一つといえます。



エビデンスに基づく 学校支援プロジェクト

「発達と教育連携」領域では、学校教育現場で起こっている様々な出来事を「事実」として客観的に調査し、収集したデータをエビデンス(根拠)として分析し、分析結果を学校現場に還元することにより、実践者の「勘」だけに頼らない、より幅広い視野からの確で柔軟な学校支援を企てることをめざします。もちろん学校支援は先生方の仕事を最優先します。

アンケートや観察・インタビューなどの実地調査を行うだけでなく、学校で保管されている様々な研究報告書や既存データを再分析したり、学校や校区的関係資料を発掘したりすることにより、多角的な観点から学校現場の現状や課題を省察し、教育実践に寄与したいと考えます。また、その結果を研究成果報告書にまとめて発表します。



たとえば、次のようなプロジェクトを学校と協力して行うことができます。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| ・ 学力状況や学校評価に関するデータ分析 | ・ 過去の研究報告書や既存データの分析 |
| ・ 学校や家庭の社会環境に関する調査分析 | ・ 先進的な教育実践を行う事例の調査と紹介 |
| ・ 学校での実践的課題に関するフィールドワーク | ・ 地域との連携に関わるニーズの把握 |
| ・ 教室内の教師・生徒の相互作用分析 | ・ 校区的地域教育資源に関する調査 |
| ・ 外国につながる子どもたちの理解と支援 | ・ 危険や災害に関する調査とマップ作り などなど |

教育経営プロフェッショナル育成プログラム

発達と教育連携領域には、教育経営プロフェッショナル育成プログラムがあります。このプログラムでは未来の教育を構想し、その創造に向けた「マネジメント」について徹底して追究し、魅力ある管理職・専門職の育成を行います。また、**現職教員による教育経営、学校経営全般を意識した学校支援フィールドワーク**を行います。

担当予定教員

■菅原 至(すがわら いたる:教育経営学)

教職員の協働、教育組織マネジメント、カリキュラム・マネジメント

■大前敦巳(おおまえ あつみ:教育社会学)

教育調査分析、学校社会連携、比較教育

■安藤知子(あんどう ともこ:学校経営学)、

学校の業務改善、特色づくり、校内研修の活性化、コミュニティ・スクールの運営

■堀 健志(ほり たけし:教育社会学)

行為の意図せざる結果・ジレンマ、社会的排除、再帰的コミットメント

■辻村貴洋(つじむら たかひろ:教育行政学)

教育資源の発見・発掘、異校種間連携・地域学校協働活動の体制整備

■原 瑞穂(はら みずほ:社会言語学)

日本語教育、グローバル教育、多言語多文化共生

■蜂須賀洋一(はちすか よういち:教育法学)

学校関係の裁判事例分析、学校安全や生徒指導、人権教育、人権教育研修

連絡先: 大前敦巳 (ohmae@juen.ac.jp)

児童生徒の心理や行動を測定し 理解を深めるお手伝いをします

現代教育課題研究コース（発達と教育連携領域）
心理学系研究室からの提案



■こんな疑問や要望 ありませんか？



当校の子どもたちは自己肯定感が低い気がするけれど、ほんとうのところはどうなのだろう？



ゲームの時間が長い子ほど、成績が低い気がするが、実際、関連はあるのかな？



今度、全校あげて生徒の社会性向上に取り組むが、それにより生徒がどう成長するか、きちんと知りたい

■心理学の立場から

私たちは**心理学**の立場から、**児童生徒の心理や行動の客観的測定法を提案、実施、分析**し、先生方が児童生徒理解を深めるお手伝いをします。

エビデンスにもとづく教育が強調されている昨今、児童生徒の心理や行動を、客観的に測定し理解することは、とても重要です。しかし、心理面の測定は一筋縄ではいきません。子どもならなおさらです。

質問紙や行動チェックリスト、行動観察、インタビューなど、心理学では様々な測定法を工夫しています。これらに先生方の願いや思いを反映させながら、**学校の実態に即した方法で測定を行い、その結果を先生方とともに読み解いていきたい**と思います。

（＊対象は児童生徒に限りません。教員や保護者などを対象とした測定も可能です。）

■想定される支援例

- ① 先生方への聞き取りや日常の児童生徒の観察から、実態にあった測定方法や質問項目を選定・提案し、実施します。
- ② 生活習慣と成績との関係、友人関係と自己肯定感との関係など、これまで学校で蓄積してきたデータを活用しながら、これらの関連性を探ります。
- ③ 休み時間の行動観察など、先生方の目の届きにくいところでの、“気になる”子どもの様子を見守ります。
- ④ 児童生徒個人や学級集団の変化・成長の様子をデータ化し、分析します。

■私たちの専門分野

基本的に、**児童生徒の心理や行動に関する内容であれば幅広く対応できます**が、参考までに各教員の専門分野をお知らせします。



越 良子

学級の人間関係、学級集団、学校適応、教師の指導行動、子どもの自己評価



角谷 詩織

子どもの発達・適応、部活動の意義と課題、ギフテッド児の理解と支援



内藤 美加

認識（言葉、概念、記憶力など）の発達、社会性、発達に障害をもつ子どもの理解



中山 勸次郎

動機づけ（学習意欲）、自己効力感、自尊感情、対人関係

連絡先：大前敦巳 (ohmae@juen.ac.jp)

上越教育大学 教職大学院 現代教育課題研究コース

道徳・生徒指導領域



現在の道徳・生徒指導コースは、同じスタッフのまま、平成31年4月より教職大学院現代教育課題研究コースの一領域に移ります。

学校実習では、私たちの領域がどのようなテーマで学校現場と連携できるか、考えてみました。皆様から忌憚のないご意見を頂戴したいと存じます。いただいたご意見をもとに、テーマを再検討し、31年度のスタートを迎えたいと考えています。

稲垣応顕研究室（学校教育相談）チーム

①「育てるカウンセリング」からの子供支援

自分の長所を自分で伸ばしていける力（自己指導力）の促進を目指した個別対応としての教育相談の在り方・方法を検討・実践します。

②集団心理教育による集団づくりの取り組み

発達モデルの採用，ガイダンス機能の活用，集団活動の重視の視点から実際の学級に即した集団づくり，良好な人間関係作りの実践に取り組みます。

高橋知己研究室（特別活動）チーム

①「子どもを知る」ことから始める学級経営の工夫

発達に応じた特別活動（学級活動，学校行事等）に取り組む中で，子どもたちの特性をアセスメントしながら効果的な学級経営の在り方を検討し，実践化します。

②特別活動を活用したカリキュラム

学校生活の基盤となる学級経営は，教科指導，生徒指導のかなめとなります。授業場面とは違う生徒の表情の意味に迫りながら，成長や発達を支えるカリキュラム作りを考えます。

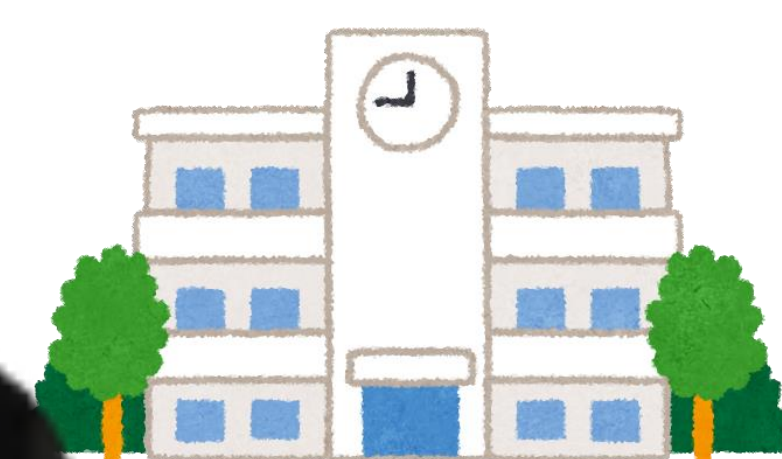
2～5人の院生でチームを組み，アドバイザー教員の指導を受けながら，学校にお伺いいたします。テーマによっては，研究室を超えて合同チームを編成します。



道徳・生徒指導領域合同チーム

①生徒指導プロジェクト～いじめ予防の取組～

さまざまな，いじめ予防のアプローチを学びながら，学校の教育活動全体を通して，いじめ予防やいじめの初期対応等に取り組みます。



林泰成研究室（道徳教育）チーム

①「考え、議論する」道徳授業の工夫

道徳の時間が教科化され，新しい道徳授業が求められています。どのような授業がよいのか，先生方と院生がともに検討し，実践化します。

②道徳授業を要としたカリキュラム・マネジメントの取組

道徳教育は，すべての教科、領域において実践することになっています。道徳科授業を中心に据えて，教科横断的にカリキュラムを検討し，次年度へ向けてカリキュラムをマネジメントします。

山田智之研究室（キャリア教育）チーム

①「キャリア教育を科学する」工夫

小・中学校の学習指導要領に示された「キャリア教育」の効果的な取り組みについて，先生方に院生を活用していただき，具現化することを目指します。

②教育活動全体を通じたキャリア教育

キャリア教育は，特別活動を要としつつ，学校の教育活動全体を通じて，組織的・計画的・創造的に行うものです。現在，学校で行われている一つ一つの取り組みをキャリア教育の視点でつなぎ，新たなカリキュラムと教材開発を行います。

稲垣 応顕（いながき・まさあき）



1964 年，新潟県生まれ。駒澤大学仏教学部を卒業後，千葉県で4年間の高校教諭(NHK 学園高校講師 兼)。上越教育大学大学院修士課程修了。新潟大学大学院博士課程中退。新潟中央短期大学，国際武道大学，富山大学を経て，2015 年より上越教育大学教授。新潟工科大学・金沢学院大学非常勤講師。いじめ第三者委員会委員 など。

専門は学校教育相談学(教育カウンセリング心理学)。登校拒否・非行・いじめ加害また被害児童生徒などへの臨床研究、育てるカウンセリングによる学級・人間関係作りを研究している。

1997 年日本カウンセリング学会奨励賞。2015 年日本教育カウンセリング学会サイエンティスト・プラクティショナー賞。

著書：『教育カウンセリングと臨床心理学の対話』、『集団をはぐくむピア・サポート』、『生徒指導論-やさしさと真心と-』(以上，文化書房博文社)，『学際型現代学校教育概論』、『スクールカウンセラーのビリーフとアクティビティー』(以上，金子書房) など

その他：2 児のパパ。妻に従い子育て奮闘中。

林 泰成（はやし・やすなり）



1959 年，福井県生まれ。同志社大学を卒業後，同大学院へ進学。同博士課程後期課程満期退学。

1996 年より上越教育大学助教授，2007 年より教授。

2009 年より 2 年間附属小学校校長を務めた。上越市内の公立小中学校，高校でスクールカウンセラーを 5 年間務めた。現在は，教授兼副学長。兵庫教育大学連合大学院（博士課程）教授を兼務している。

専門は道徳教育論。モラルジレンマ授業や，ケア倫理に基づく道徳教育などの実践研究に取り組んできた。行動面での指導を道徳教育に取り入れたモラルスキルトレーニングを提唱している。

趣味は映画観賞，カラオケ。

著書：『道徳教育の方法』（放送大学叢書）左右社、『モラルスキルトレーニング スタートブック』明治図書、『教員養成を哲学する』（共編著）東信堂など。

高橋 知己（たかはし・ともみ）



1962 年，岩手県生まれ。岩手県公立小学校教員。上越教育大学大学院修了。

2014 年より，上越教育大学准教授，2018 年より教授。兵庫教育大学連合大学院（博士課程）教授を兼務。上越市いじめ防止対策等専門委員会委員長，新潟県いじめ事案に関する調査委員会委員。

専門は特別活動論，学級経営論，学校心理学。学校を取り巻く学習や学級経営などの諸問題について，質的・量的アプローチから研究を行っている。

著書：『いじめから子どもを守る学校づくり』図書文化社(2018)，『最新特別活動論』大学教育出版(2016)『創発学級のすすめ』ナカニシヤ出版(2016)，『よくわかる盛岡の歴史』東京書籍(2016)，『学校での子どもの危機への介入』ナカニシヤ出版(2015)(いずれも共著)など。

山田 智之（やまだ・ともゆき）



1961 年，東京都生まれ。日本大学芸術学部を卒業後，東京都中学校教員を 31 年間務める（1997～2000 年カイロ日本人学校派遣，2003～2013 年主幹教諭，2013～2015 年副校長）。都に在任中，日本大学大学院総合社会情報研究科に進学，2010 年同大学院博士後期課程を修了，博士（総合社会文化）を取得する。

2015 年より，上越教育大学准教授，現在は新潟県社会教育委員連絡協議会会長，新潟県社会教育委員等を務め，愛知教育大学，日本大学法学部，和光大学大学院等で非常勤講師を兼務している。

専門はキャリア教育論であり，職場体験や教科で行うキャリア教育等を中心に，実践的・実証的研究をすすめる，キャリアイメージの構築を促進するキャリア教育を提唱している。

著書：『教職員のための職場体験学習ハンドブック』実業之日本社，『産業・組織心理学エッセンシャルズ（改訂三版）』（分担執筆）ナカニシヤ出版，『教職シリーズ 7 進路指導』（分担執筆）培風館など。

連絡先：mecc@juen.ac.jp

道徳・生徒指導領域のメールアドレスです。